

Document Citation

Title	[Keisuke Kinoshita]
Author(s)	
Source	<i>FC</i>
Date	1977
Type	booklet
Language	Japanese
Pagination	
No. of Pages	29
Subjects	Kinoshita, Keisuke (1912-1998), Hamamatsu, Shizuoka, Japan
Film Subjects	

KINOSHITA, Keisuke (1977)

フィルムセンター

昭和52年2月1日 東京国立近代美術館フィルムセンター発行

38

木下恵介監督特集





目 次

木下恵介——その日本的資質……………	登川 直樹(4)
連載論文：比較映画史研究(18)……………	山本喜久男(52)
上映作品解説……………	佐藤 忠男, 大場 正敏
2/1 花咲く港……………	(8)
2 生きてゐる孫六……………	(9)
3 歓呼の町……………	(10)
4 陸軍……………	(11)
5 大曾根家の朝……………	(12)
7 わが恋せし乙女……………	(13)
8 結婚……………	(14)
9 不死鳥……………	(15)
10 女……………	(16)
12 新釈 四谷怪談(前・後篇)……………	(20)
14 肖像……………	(17)
15 破戒……………	(18)
16 お嬢さん乾杯……………	(19)
17 破れ太鼓……………	(21)
18 婚約指環(エンゲージ・リング)……………	(22)
19 善魔……………	(23)
21 カルメン故郷に帰る……………	(24)
22 少年期……………	(25)
23 海の花火……………	(26)
24 カルメン純情す……………	(27)
25 日本の悲劇……………	(28)

2/26 二十四の瞳……………	(30)
28 女の園……………	(29)
3/1 遠い雲……………	(31)
2 野菊の如き君なりき……………	(32)
3 夕やけ雲……………	(33)
4 太陽とバラ……………	(34)
5 喜びも悲しみも幾歳月……………	(35)
7 風前の灯……………	(36)
8 檜山節考……………	(37)
9 この天の虹……………	(38)
10 風花……………	(39)
11 惜春鳥……………	(40)
12 今日もまたかくてありなん……………	(41)
14 春の夢……………	(42)
15 笛吹川……………	(43)
16 永遠の人……………	(44)
17 今年の恋……………	(45)
18 二人で歩いた幾春秋……………	(46)
19 香華……………	(49)
22 歌え若人達……………	(47)
23 死闘の伝説……………	(48)
24 なつかしき笛や太鼓……………	(50)
— スリランカの 愛と別れ……………	(51)

* 本文中のベスト・テンは「キネマ旬報」誌による。
 * <配役>の末尾の記号は、C=カラー・W=ワイドを示す。

木下 恵 介

——その日本的資質——

登 川 直 樹

執 念 の 人

子どもの頃から映画が好きでたまらず、撮影所に入れてもらうつもりで家出までしたが連れ戻された。その熱心さにほだされた母親も奔走してくれて、手づるをたよって計画をすすめた。映画をやりたい一心だった。

好きで映画界に入ったといえば誰でもそうに違いないが、木下恵介の場合は人一倍だったし、それもちょっとまわり道をした。監督よりカメラマンになる方が入れてもらえると教えられ、そのために写真学校を出た方がいいと言われ、その入学のために写真屋で働いた。1912年12月5日浜松に生まれ育ち、工業学校を卒えてから、写真屋―写真研究所―オリエンタル写真専門学校―松竹大船撮影所現像部―撮影部助手―監督部助手―というルートをとどってから、念願の監督になれたのである。言われる通りに勉強したのに、現像場ならいれてくれると言われた時は口惜しかったに違いない。いまの様な自動現像機のない時代で、フィルムを巻いた木枠を液槽につけたりあげたりするのだ。魚屋みたいなゴムびきの服を胸までぬらして働く辛さは、やった人にしか判らないと、新藤兼人は言っていた。木下恵介も同じ苦労をしたのである。現像場の窓からロケに出かける人を見るくやしさを彼は語っている。執念で映画作家になった人である。

まわり道をしたにしては、監督になるのが早かった。「花咲く港」でデビューしたのは30歳になったばかりの頃である。当時松竹では小津安二郎、吉村公三郎など監督の応召が相ついでいた。中村登、萩山輝男、木下恵介、家城巳代治などは大船で戦時中に昇進した監督である。木下恵介はその前からシナリオを書いていた。シナリオの書けない監督はダメだという家訓のようなものが松竹大船にはあったが、木下恵介は助監督のうちから熱心に書いた。「五人の兄妹」は吉村公三郎が監督し、「素裸の家」は柏原勝が監督した。どちらも家族の間におこる摩擦や衝突を描いていて、親子兄妹がよく言い争うはなしだった。おしなべて木下ドラマはじつによく言い争うが、もうこの頃からその芽生えがあったようである。

島津保次郎のもとで助監督をしていたのは吉村公三郎、中村登、木下恵介らであった。島津保次郎は職人的

な技巧のうまさにかけては定評があつて、演出技術の師匠としても大いに才能を発揮した。3人とも個性はちがうが、木下恵介はドラマ運びのうまさをよく師匠から受け継いだ。流れるような絵のつなぎもそれである。

喜 劇・悲 劇

監督第1作の「花咲く港」は当時プロデューサーだった遠藤慎吾が持ってきた企画である。菊田一夫の舞台劇で、表向きは増産映画、実体は2人のペテン師が村人の純朴さに負かされるという喜劇である。映画の配給が統制されてしまったから製作も計画生産のようなもので、恵まれた条件でつくることができた。舞台は天草だが棕櫚の並木まで植えさせて、そこへ乗合馬車を走らせるなどという、ぜいたくな雰囲気描写ができた。流れる様な演出が光った映画である。村の資産家の遺児がやってくるという知らせに、村人たちが着飾って迎えに行くところだ。馬車がトンネルに入ると、その暗さのなかで昔の思い出が映りだす。みずみずしい感覚を随所にみせた若々しい作品だった。

他人がやったことのないテクニックを見せてアツと言わせようと気負いたっていたのかも知れない。湯水のように新しいアイデアが湧いてくる斬新な創造力を感じさせた点は、同じ年に「姿三四郎」で世に出た黒沢明と似ている。「花咲く港」の場合、上原謙をペテン師に仕立てたことにもそれは現われていた。資産家の遺児に化けて乗りこんでみると、自分の相棒がすでに同じことをやってさきに乗り込んでいたのである。2人が鉢合わせしたあわてぶり。さきに乗り込んだペテン師の小沢栄の方が、いかにも困った顔をするのに、あとから来た上原謙のヌーッとしているところが実にいい。どこかバスター・キートンを思わせる扮装も愛嬌があつて、この俳優の意外な一面をひらいて見せた。そしてこの映画は、木下恵介の喜劇映画の系列をつくりだす起点ともなった。

しかしかれは、ただ才はじけた新人監督というのではなかった。もっと内に秘めたシンの強い人間観照があった。「陸軍」はそれを証明した大作である。原作は火野葦平の新聞連載小説だった。明治維新以来代々戦争に係りながら生きてきた日本人を、一つの家で描いている。

とりわけ、わかという女は、女中として主家に仕え、のちには妻として家に加わり、子を育てる。夫を戦場に送り、育てたわが子を、また戦場に送りだす。小説は日本の「家」を感じさせたが、映画は日本の「母」を強く印象づけた。ことに出征部隊にまじるわが子を見送る母を描いたラスト・シーンは圧巻である。何かの気配に誘われる様に家のそとにでる、隣家の人と顔が合つてちよつと会釈する。かすかにラッパの音がきこえる。それにひかれるように歩きだす。このあたりから丁寧にカットを重ねていく。橋を渡りながらフト見ると、遠く向うの橋を部隊が行進するの がみえる。ついに行進にたどりつく。わが子をさがす。わが子を見つける。行進につれて歩く。うなずく様に見守りながらついていく、といったカットの一つ一つが、わが子を戦場へ送りだす母親のこみあげる感情をよく表現していた。最後には人混みにもまれながら合掌して立ちつくすまで、この息の長いシーンは、田中絹代の名演技と相まって感動的な情景となっていた。30数年を過ぎて今なお鮮やかに脳裡に蘇る。そしてこれは彼の悲劇系列をなす作品群の最初となった。

ゆたかな試み

木下恵介の映画は概して抒情的で感傷的だという印象が強く、「二十四の瞳」や「喜びも悲しみも幾歳月」などが代表作にあげられる。たしかに抒情派の一面も十分持ち合わせているが、他にもさまざまな映画をつくる。多様な資質を兼ね備えた作家である。

「大曾根家の朝」を見たとき、こんなに戦争をはげしく憎むことのできる作家かとはじめて知った。自由主義の一家が戦争中の弾圧のなかを生きのびる忍苦のすがたを、つきつめていくのである。戦争にまきこまれた時代は、いまわしい時代であった、と過去をふりかえる映画は多かった。しかしそれが木下のきりひらこうとしている道というわけではなく、次にとりあげたのは、古いアメリカ映画にヒントを得た、まことにロマンティックな田園青春映画「わが恋せし乙女」であった。「だから牧場は春なのさ……」などと軽やかに歌っていた。これを小沢栄の扮する陸軍将校が杉村春子の自由主義一家を憎々しげに罵倒した「大曾根家の朝」とどうつなげたいのか見当が立たなかった。

手法の上でも木下恵介はいつも新しいことをやりたがった。「女」はいわゆるオール・ロケ映画である。電力事情の悪かったころ考えた企画だったが、撮影所のセットやライトは使わない代りに、長期ロケや熱海の火事の群衆シーンで結構製作費はかかったという。強盗を働いた男が愛人を道づれにして一緒に逃げるという話の筋立てだから湘南のあたりを汽車に乗ったり降りたり、トラックにのせてもらって逃げたりする。かと思うと「カル

メン故郷に帰る」で最初の色彩映画を撮ってみたり、「檀山節歌」でセットだけの舞台劇風な映画をつくってみたり、「カルメン純情す」ではすべてのカットをカメラを傾けて撮ってみたり、「野菊の如き君なりき」では、古い写真よろしく楕円形の窓枠を通して眺めたり、数えていくといろいろな実験を試みているのがわかる。「二十四の瞳」では12人の子どもを演じる子役をさがすのに、兄弟や姉妹を一对にしてさがした。物語の小学1年生の部分を小さい方に演じさせ、卒業してからの部分を、兄や姉で同一人物を演じさせた。物語は数年経過したところへ飛躍するのだが、一見してそれと判る成長した一人一人の出現に、観客は思わず顔を綻ばすのである。こんな思いつきまで含めて、木下恵介はいつも何か新しい試みを自分の映画に注ぎこんできた。

「四谷怪談」はすべて少し上から見下ろし加減の構図で統一されていた。浮世絵のように日本の絵画がしばしば俯瞰気味なのはそれなりの様式だが、映画でもそれが一つのスタイルになり得るだろうかという実験らしかった。「日本の悲劇」は寄りそって生きてきた母子がバラバラになる話だが、戦時中の実感をこめるために、ニュース映画が挿入され、同じような画調で貫くというまとめ方をした。

こういうつくり方は必ずしもすべてが成功したとは限らない。時にはさほど効果をあげなかったものもある。しかし映画がいつも繰り返してあつてはならないとする考えから生まれたものであり、それが作品を一つの様式にまとめあげるための方法として採られている点は注目していい。

流 れ る 様 式

撮影所へ入るために写真学校で学んだことは廻り道だったかも知れないが、監督になるために撮影部で働いたことは、木下恵介の映画作家としての個性に、マイナスどころかえってプラスになっている。カメラのわかる演出家はそんなに多くはないからである。彼は撮影中にしばしばカメラのうしろへ行つてファインダーをのぞく。時にはカメラマンよりも余計にのぞくのではないかと思う。撮影スナップでも、まるで彼がカメラマンかと思ひ違えるほど、カメラをのぞいている彼の姿をよく見かける。映画の監督に二通りあつて、演技を監督するのと、イメージを監督するのとに分かれる。溝口健二などは演技を監督する方の典型だろう。木下恵介はイメージを監督する方である。もちろん演技をまるっきり考えない監督なぞいないが、画面がきりとる枠とか、写真的な性質を帯びた画面の諧調とか構図とか、それを計算にいられて映画をつくっていく方である。それは撮影の現場だけではない。シナリオを書くときから、いやその前から

映画を、スクリーンに映る画像として考えドラマを練っていく、そういう作り方である。

これは師匠の島津保次郎から会得した創作方法論だとおもう。島津監督も映画の流れとして捉えていた。場面転換がなだらかで、意外な展開もすべて流れの中にある。助監督は自分のついた監督から学ぶものは多いし、その方法論を受け継ぐのは当然である。論理的な構築を考える作家につくとそういう考え方をする様になる。彼はそうでなかった。

そのことは、シナリオを書く段階ですではっきりあらわれる。木下恵介のシナリオ執筆は、人物とシチュエーションを設定して、あとはファースト・シーンから書きはじめるというやり方だ。登場人物は自然に行動し、それを追っていくと、ほかの登場人物も行動しはじめてドラマが織られていく。起伏があり、クライマックスもあれば不安もあり爆発もあり、そうやって終結に到達する。これと正反対の書き方をするシナリオ・ライターがいて、この方は、人物を分析し、事件を選択し、ドラマの骨組みをたて、これに従って構築する。土台の上に建物を築きあげていくような作り方だ。この方は構成はしっかりしているが、流れがスムーズにいかないうらみがある。木下恵介のシナリオ執筆は前者で、シーンを追ってドラマを綴っていく。それでよく構成のまとまったシナリオができあがると思うが、ちゃんと結末にたどりつくから妙だ。特別な才能だとおもう。もっとも、こういう方法で書き進めていって、ひとたび行き詰ったら、どうにも動きがとれなくなると思うが、映画にできあがった作品はすべてみごとに流れて結末に到達している。つまり、流れるドラマとは、1つの場面、1つのカット、1つの動作、1つのセリフが、いずれもつぎのそれを要求しているという進み方なのだ。悲しく暗い場面のあとにパッと明るい場面がきたり、沈んでいる感情のあとに急に走りだすような動きがあったり、ほほえましい挿話のあとに、哀しい出来事が起こったりする。こういう意外性もひっくるめて、すべては流れるドラマなのである。

忍苦のドラマ

木下映画を眺めていくと、彼の好んで描く人物に気付く。その第1は、献身的に生きる母である。「陸軍」のわかは主人と夫と息子に仕えた典型的な日本女性像として描かれる。あのラスト・シーンの合掌は、彼女の生き方の象徴でもあった。「大曾根家の朝」で杉村春子の演じた母房子は、まさにその延長線上にあったと思う。しだいに狂暴化する軍国主義の嵐の中で、子どもたちのうける迫害と絶望の苦難のなかを辛うじて生きぬいてゆく1人の母の姿は、まことにヒロイックである。

木下映画の母はつねに受難者として描かれる。「日本の悲劇」はその最たるもので、夢中になって働き通した末に子どもたちには捨てられ、発作的に死をえらぶのである。戦争は日本人を変えた。肉親にすら愛情を失わせた。それを彼は、自殺する母親で描く。ここもまたみごとに描写であった。駆け落ちした娘、養子におさまった息子　すべてたよるものを失った母親は、疲れ果てたわが身を走り来る列車の前に投げだすのである。

「喜びも悲しみも幾歳月」をはじめとして「笛吹川」「二人で歩いた幾春秋」など後年は年代記風の作品が相づくが、ここにも健気に生きた母の姿が描かれる。いつの世にも母の生きかたは忍耐そのものであり、じっと泳えて生きるという姿勢が、この作家を強く牽きつけるのである。

母ほどではないが、若い女性も木下作品ではしばしば忍苦の姿で捉えられる。「女の園」の出石芳江は苦しみに耐えきれず自殺を選んだ。「野菊の如き君なりき」の民子は周囲の冷やかな眼によって恋を意識し、仲を引き裂かれ、他へ嫁がされ、病苦の末に死んでいった。愛する者の名も言わず、彼から届いた手紙を手握りしめたまま死んでいったというのである。じっとこらえ、苦しみに耐えた者を美しいと讃える、そこに木下作品のパターンを見ることができる。

多くは女性を主人公とする映画だが、稀には男性が主人公となる。そして、そこでも主人公は苦しみに耐える姿で描かれる。「破戒」の瀬川丑松は、己れの出生の秘密をかくしきること父の訓えを守り、人並みに生きようと努力する。しかし、ついに泳えきれず、父のいましめを破って告白する。教え子たちの前で素姓を明かすことも苦しいが、それをかくして生きてきた今日までの1日1日も、やはり身を斬られる辛さに覚えていたのである。

それは「檀山節考」の場合にもあった。70歳になると山へ捨てられるというならわしの村で、おりん婆さんは来年その日が来るのを待ちのぞんでいる。息子の辰平は、その日が来れば母親を捨てに行かねばならぬ悲しみに胸を痛めている。母が恐がりもせず、嫌がりもせず、喜んでその日を待っているのが、かえってつらいのである。隣家の又やんが70歳になっても山に捨てられるのを嫌い、それを伴が無理矢理捨てに行くのと対比される。棄老のならわしが日本にあったかどうか知らない。おぼすて山の名はあるが、そこが老人をすてた所とは思えない。伝説としては各国にある。しかし彼はこれをただの伝説とは描かない。しかし事実だとも言わない。舞台劇の形をかりることで架空劇の印象を強める。それでいながら、各人物の心情は、実感をもってうけとることを期待して描いている。人間は悲しみをこらえて生きるもの

だという捉えかたである。

社会・人間

男でも女でも、木下映画の主人公は、悲しみをこらえて生きる。こらえるというのは受身で弱そうに見えるが、じつはシンが強い。そこが木下映画のきびしいところでもある。「二十四の瞳」は島の分教場に働く教員の子どもたちに注ぐ愛情を美しくうたう。しかしただただ感傷的に見えるようなこの映画も、単純なセンチメンタルでは決してない。子どもたちは先生を傷つけたことで悲しい思いをする。世に出れば貧しさのために家をはなれ、あるいは病に苦しみ、戦場に赴く。信念を貫いた教師は無理解な校長に妥協せず教壇を追われた。あどけない子どもたちはそれぞれに苦しみ、それを教師は救うことができなかった。外見は甘いが、シンはきびしい映画である。

そういう悲しみこそ真実といった理念に貫かれた映画ばかり作りつづけるこの作家が、ひとたび喜劇を手がけると、雰囲気は全くちがう。人間は愚かしく、社会は矛盾に満ちている。精一杯生きている人間を、突き放して眺めると、それがたちまち滑稽にみえてくる。「破れ太鼓」はそういう彼の喜劇の代表であろう。すべてに君臨する雷おやじは大まじめであり、その家族もめいめい勝手に真剣に生きている。おやじの頑迷さに歯が立たないから余計真剣になる。そういう状況が大まじめな言動を1つ1つ滑稽にみせる。

同じことは「カルメン故郷に帰る」にも言える。少し頭の弱いらしい踊り子はいっぱし芸術家に出世したつもりで故郷へ錦をかざった。派手な衣裳やポーズが村人を啞然とさせる。どっちも大まじめだがかみ合わないところがおかしい。「風前の灯」も人間の欲深さに光をあてた喜劇である。

しかし、よくみるとこれらの大まじめな人間は、世間なみから少々外れているだけで、結局は善良な人間の仲間であることに変りはない。ぞっとする様な人間の食欲さとか、ドス黒い憎悪などというものは出て来ない。まことに明朗闊達な喜劇なのである。　　そういえば「春の夢」も「今年の恋」も喜劇の部類に入ろうが、程よい笑いをふりまいたところで終ってしまう。人間をおとしめるほど冷酷な喜劇はつくらない。ブラック・ユーモアなどという意地の悪い趣向は、善良なる人間観察からは生

まれないのである。

悲劇の追及の鋭さにくらべて、喜劇がかなり甘いということは、彼の善良な精神の反映にほかならない。人間が生きることは苦しくて辛い。まじめに観察すればするほど、人間は苦しみながら生きる動物だということがはっきりする。喜劇を描いても善人の喜劇にしかならない。どす黒い笑いに馴れた目にどこかもの足りなく映るのはそのためである。

悪人が描けないというのは木下映画の特色である。それがいいか悪いかではなく、悪人もまた善人であるという結末になってしまうところにこの監督の人生観を見る。「大曾根家の朝」に登場する小沢栄の職業軍人は、彼が描いた唯一の悪玉かも知れないが、これも米軍検閲からの注文で悪人に塗りがえさせられたと語っている。とすると木下映画はすべて善人のドラマだと言ってもいい。

もしその中の特異な例をあげるなら「日本の悲劇」かも知れない。ここではすべての登場人物が多かれ少かれ冷酷である。女手一つで子どもたちを育ててきた母親は、ただ必死に生きてきたにすぎない。しかし子どもたちはその母に同情しない。母親を捨てて自分だけの生きる道をえらぶ。周囲の人物も冷たかった。誰も笑わない。みんな苦しみながら生きていた。みんな悪人とは言えないが、悪人になるギリギリのところで踏みこたえていた。それが観る者の胸をうつ。

「日本の悲劇」を木下恵介の最高傑作と呼ぶ人は少ない。それはここに描かれた人間の冷徹な観察によってである。母親を死に追いやる子どもたちの非情さを、日本の悲劇と作者は断じているのである。

木下恵介が今日までにのこしてきた映画は一見まことに多様である。喜劇あり悲劇あり、恋愛映画あり、社会劇あり、怪談もある。またそこに用いられた技法も千変万化である。しかし、つきつめると彼の映画にでてくる人物は、生きることに苦しみ、それを逃れる代りに耐えている点で似通っている。生きることを苦しむ、それほどまじめで善良なのである。そのことが彼の映画をおもしろくしているし、また面白さを限定している様におもう。年とともに円熟味をまし年とともに懐古趣味をますという多くの作家がたどった道を彼も歩いているのであろうか。その善良なやさしさを突き抜けたところで新しい境地を拓くかも知れないという期待を私は捨てないのだが。

花 咲 く 港

松竹大船1943年作品

原作……………菊田 一夫
脚 色……………津路 嘉郎
監 督……………木下 恵介
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………本木 勇
音 楽……………安倍 盛

＜配 役＞

野長瀬修三……………小沢栄太郎
勝又留吉……………上原 謙
お春……………水戸 光子
野羽玉……………笠 智衆
網元 林田……………東野英治郎
村長 奥田……………坂本 武
おかの……………東山千栄子
平湯良二……………半沢 洋介
おゆき……………村瀬 幸子
せつ代……………横 美佐子
袈裟次……………河原 侃二
木村巡査……………仲 英之助
英吉……………大坂 志郎
技師……………毛塚 守彦
小使……………島村 俊雄
ゆきの子……………井上 妙子

9巻 7月29日封切

ベスト・テン第4位

＜かいせつ＞

1933年に松竹蒲田の現像部に入社した木下恵介の第1回監督作品。

監督志望の木下は手始めに撮影部に入るため写真学校に入学したものの、卒業してみれば撮影部にも空きがなくて現像所に廻された。しかし3カ月程で当時の撮影技師長の桑原昂によって撮影部に転入され、そこで松竹の大巨匠島津保次郎と出会うことになる。撮影部に入りたてと思われる頃の島津作品「非常線の女」（1933）に厚田雄春を筆頭とした撮影助手の5番目に「木下正吉」の名が見られ、1934年の島津作品「隣の八重ちゃん」ではセカンドに昇進している。その頃の木下はカメラの前で演じられている芝居の方へ注意を集中していたらしく、島津組の助監督だった吉村公三郎をして「君はカメラの仕事よりも監督部に来た方がいい」と言わしめたという。そんな

木下の才能を見てとった大御所島津は自分の組に起用することになり、1936年には念願叶って監督部に転じた。その頃島津組のチーフ助監督だった豊田四郎が一本立ちとなって吉村公三郎がチーフとなり、木下は1937年作品の「朱と緑」「浅草の灯」（共に島津監督）では各々サードとセカンドを務めた。

木下の脚本が採用されたのは吉村の第6作「五人の兄妹」（1939）で、吉村、大庭秀雄、山本武らと共に監督昇進した柏原勝の佳作「素裸の家」（1940）に続いて、「間諜未だ死せず」（1942・吉村）、新進中村登の「新なる幸福」「男の意気」（同年）等の脚本を担当し、着実に監督への道を歩んでいった。そして、本作品が第1回監督作品となったわけだが、当時の松竹大船の実力者城戸四郎の覚えもめでたく、かなりラッキーなデビュー振りであった。当時の貧窮した製作状況の中で「天草のロケ40日、浜名湖へ40日、セットが20日間」と本人が述懐する程の優遇振りで、その上これまで修業した努力と持ち前の天分とで、この作品は好評をもって迎えられた。ひなびた村の美しい情景描写、馬車が暗いトンネルに入ると過去の思い出につながるといった新技法は、単なる新人監督とは思えない才能を示し、同じ年に東宝からデビューした黒沢明と共に大いに注目されたのだった。

日本映画を代表する二枚目スター上原謙を型破りの二枚目半に仕立て、彼の周りに新劇のヴェテラン、松竹の名脇役を配しての演出も絶妙を極めるものだった。（大場）

＜あらすじ＞

昭和16年の秋、九州南岸のある静

かな港町に突然奇妙な2通の電報がまいこんだ。善良な漁村の人たちはこの電報を前にいろいろな臆測を始めた。実は15年ほど前のこと、渡瀬という男が漂然とこの村にやってきて、この港に造船所を造ろうとしたが不景気のあおりで失敗した。太腹な性格は村人から非常な尊敬をもって迎えられたが、渡瀬は悄然と南方へ旅立ち、彼の事件もいつか忘れられてしまっていた。それから15年、2通の電報は打たれた場所こそ違え、いずれも渡瀬の遺児と称する2人の男の来港を告げている。村長はじめ村の代表連中にその昔渡瀬の後を追って南方まで行ったというかもめ館の女将おかのらの出迎える中を、港町へ着いた渡瀬憲助と名乗る男はまず、かもめ館の一室に旅の疲れを休めた。同じ頃、矢張り渡瀬の遺児と名乗る男が港に着いて村人を戸惑いさせた。憲助は驚き狼狽したが、突嗟の機転で今現われた遺児を自分の弟だと村人に紹介した。村人以上に弟と紹介された男も狐につままれた様子である。その夜かもめ館の一室で例の兄弟は声を落して何か話しあった。実は兄弟でも何でもないひょっとした事で興信所でこのネタを聴きだした2人、野長瀬修三と勝又留吉は妙案をたて一儲けしようと企んだ。儲けは山分けという事にして2人は早速造船所再建の仕事にかかった。時代の波に乗って非常な好調のうちに仕事は進み、折から太平洋戦争の勃発するや、修三と留吉の心にも日本人としての自覚が目ざめるのだった。



生 き て る る 孫 六

松竹大船1943年作品

企 画……………中野 恭介
脚本・演出……………木下 恵介
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………本木 勇
音 楽……………早乙女 光
解 説……………徳川 夢声

＜配 役＞

相良喜代松……………上原 謙
小名木義弘……………原 保美
妹 真琴……………山鳩くるみ
軍医 坂部勝輔……………細川 俊夫
義弘の祖母……………葛城 文子
義弘の母 梅野……………吉川 満子
織田茂次郎……………河村 黎吉
息子 幸一……………宮子徳三郎
娘 八重子……………河野 敏子
下男 花井周平……………坂本 武
妻 お市……………岡村 文子
息子 莊吉……………前畑 正美
鈴木曹長……………川辺 孝二
磯部……………山本 博一
曾布川……………横山 準
武田信玄……………坪井 哲
柴谷……………佐土島 茂

9巻 11月18日封切

＜かいせつ＞

前作「花咲く港」で華々しくデビューした木下監督は、同じ年に「姿三四郎」でデビューした黒沢監督と共にその将来性を大いに期待される新人と目された。処女作が良くも悪くもその作家の資質を示すと言われる通り、この2人の作家はその後の作風の全てを処女作に表現し、まるで正反対の資質と表現法を際立たせていた。

本作品は前作同様舞台を農村におき、古い因習にとらわれる旧家の人々をめぐるくり抜かれる事件を喜劇仕立てにしたもので、戦時色に塗りつぶされていた当時の状況を考え合わせれば特異なものだったに違いない。これは木下の資質と共に、＜蒲田調＞＜大船調＞等の言葉で特徴づけられる松竹映画のメロドラマ性、家庭劇への強い指向が容易に時局に乗り切れなかった＜封建性＞の

せいかもしれない。逆に＜近代性＞を誇った東宝などの会社が時局に敏感に反応した製作態度を示した事と考え合わせれば、その対比に非常に興味深いものがある。

助監督時代からせっせと脚本を書いていた所長の城戸四郎（現松竹会長）に提出しており、溢ふれるばかりの才能の片鱗を既に見せていたのだが、2作品とも舞台が農村であることと、家族主義の強い状況を題材に選んでいることはこの作家の作風を決定的なものとしている。そしてその資質が時には喜劇的に、時には悲劇的な作品として生み出されていくのである。閉鎖的な状況の中で家名や迷信に振りまわされている人々を揶揄する喜劇が、軍刀である＜関の孫六＞をめぐるひきおこされるものなれば当局にとっては面白いものではなかったはずだ。それでも優等生であった木下は会社内部では随分目をかけられたらしく、冒頭の合戦場面にも見られるように、逼迫した当時の映画界では考えられない程の撮影ができたことでもうかがえる。全篇をロング・ショットを通して会話の妙でつなぐという手法は師匠の島津保次郎ゆずりのものである。（大場）

＜あらすじ＞

三方カ原の古戦場にある名家小名木家には、「小名木家の男は死に断える」という噂に苦しむ4人の家族が住んでいる。そんな時三方カ原の野鍛冶織田茂次郎の伴幸一が村の若者たちと一緒にあって小名木家の原30町歩を開放して畑にせよと叫びだした。この小名木原は小名木家の先祖内膳義次が三方カ原合戦の時に憤死した場所で、以

来鎌を入れることは堅く禁じられてきたのだ。このため、幸一の妹でバスの車掌をしている八重子とバスの運転手の花井莊吉がとぼっちりを受けた。莊吉の両親は先祖以来小名木家の家来筋で、「小名木原を汚そうとする男の妹を嫁にするなら、主従関係も今日限り」と梅野夫人から言い渡されたからである。

その頃、2人の男がバスに乗って三方カ原を訪れた。前日、三方カ原で軍事教練中、茂次郎に自分の親譲りの初代孫六を偽物だと言われ、その鑑定を迫ってきた浜松の青年学校の教官相良中尉と、学資に窮し家宝の名刀を父に無断で売り払って勘当され、同じ孫六が小名木家にあると聞き、それを手に入れようとする若き医学博士坂部勝輔である。

その2人が図らずも顔を合せ、相良の孫六を坂部に譲ることになったが、その刀は偽物と判り、試し切りで折れてしまう。相良は茂次郎の腕に感服し一本刀を打って貰うことにした。坂部は小名木家の人と親しくなり、義弘の病氣診察のため再来訪を約束する。その後、急の応召に出来上った初代光茂を受取りに来た相良は、莊吉と八重子の仲を知り、2人を結んでやろうと小名木家に乗りこむ。坂部から肺病でなく神経衰弱と診断された義弘は土蔵の中に入って出てこない。相良は無理やり土蔵に押入って義弘を説得して当主としての自覚に目覚めさせ、坂部に家宝の孫六と共に真琴を手に入れさせ、莊吉と八重子を一緒にさせてやるのだった。



町の歓呼

松竹大船1944年作品

脚本……………森本 薫
監督……………木下 恵介
撮影……………楠田 浩之

＜配 役＞

古川慎吾……………上原 謙
慎吾の父……………東野英治郎
慎吾の母 きよ……………信 千代
風呂屋……………小堀 誠
風呂屋の女房……………飯田 蝶子
たか子……………水戸 光子
たか子の父……………勝見庸太郎
郵便配達の女性……………河野 敏子
印刷屋……………日守 新一
たか子の母……………岡村 文子
風呂屋の婿 三郎……………安部 徹
〃 の娘……………山鳩くるみ

8巻 6月8日封切

＜かいせつ＞

木下の弁によれば、当初この映画は大庭秀雄監督のために書かれた脚本だったものが、急遽木下にまわってきたもので、当時の世相を反映した＜疎開＞をテーマにした作品である。

映画史家田中純一郎によれば、＜疎開＞なる言葉は当初軍隊用語であったものが、戦局が激しくなったため、過密地帯の空襲被害を最少限に食い止めるため、人口の分散や建物の間引きを奨励実施するために一般用語としてこの頃定着したものであった。実際この年に本作品と相前後して作られた国民時局読本とも言える記録映画「疎開」（演出・蛭川伊勢夫）は、そのものずばりに教師に引率されて地方に出かける学童達や、強制的立退きで取り壊される家の様子を取りあげたものであった。

本作品はいかに木下作品らしく取り扱われている。というも、登場人物が皆な自分の家や土地に愛着を持ち、ある者は数年前家を出たままの夫の帰りを待つため、ある者は永年続いた商売を守るため、ある者は愛する人と別れ離れになるのがいやなためといった風に、時局読本になる要素などほんのかけらもない有

様で、そこには大船調人情劇にあふれたドラマが展開する。

場所も同じ町内に隣り合わせる4軒を結ぶ空間と、たった3日間の出来事をしめじみと描いたもので、木下はカット数を極端に少くして会話のつなぎとカメラの移動によって構成した。それは急に持ちこまれた話であることにも原因があるだろうが、撮影日数の少さを逆手にとった木下の実験的精神の旺盛さも指摘できるだろう。カメラの動きを余り意識させないで、実に見事に人物の出入りを演出しており、若い恋人同志の場面や、しばらく振りで再会した東野の夫と信の妻との雨の中の場面などは、木下らしい抒情味にあふれた場面が見られる。そしてこれらを含めて木下の作品は情報局からにらまれるようになっていった。（大場）

＜あらすじ＞

古川慎吾は母きよと2人で暮していた。父は数年前家を出たまま、そんな父を待っている母をみるにつけ、慎吾は心が痛むのだった。

町内の大方の人は、疎開のために引越して行ってしまい、今では隣りの印刷屋一家と向いの風呂屋夫婦、それに町会長一家のわずかな人しか残っていない。

夫のあてのない帰りを待つきよは、慎吾のすすめにもかかわらず、ここから居なくなってしまえば父の

帰るべき所がないといって、疎開を渋っていた。風呂屋の親爺は、長年続いた稼業を捨てられないとばかり女婿の三郎と口論する。三郎夫婦はそれでも自分達の家へ来てくれるように説得するのだった。印刷屋夫婦も、住みなれた家に末練が残っていた。町会長の家では、これら3家族が疎開するのに適当な所をと苦心していたが、当人達はさらさらそんな気などはない。娘たか子は慎吾に思いを寄せ、慎吾も彼女を心憎からず思っていた。それはきよも十分知っている間柄だった。

ある日きよの夫がこの町にやってきた。風呂屋の女将が気を利かせてきよを連れ出し、風呂屋の庭先で2人を再会させた。すっかり年寄った夫をみたきよは、何もいわずやさしく迎えるのだったが、慎吾には言い出せなかった。安心したきよは、これでやっと疎開できると決心し、この地を離れる前に、どうにかして慎吾とたか子の仲がまとまるようにと思い、たか子の気持ちをたしかめるのだった。たか子には他の縁談がもち上がっていたが、彼女の決心は変らなかった。それを聞いてきよもほっとした。

そんな時、飛行訓練に出かけた慎吾が事故死してしまう。誰もが悲嘆のどん底につきおとされた。そしてきよは夫と共に町を去ることになり、印刷屋一家も疎開することになった。1人去り、2人去って行く姿を見送った風呂屋の親爺も、仕方なく娘夫婦の世話になろうと思った。



軍陸

松竹大船1944年作品

原作……………火野 葦平
脚 色……………池田 忠雄
監 督……………木下 恵介
撮 影……………武富 善男
美 術……………本木 勇

＜配 役＞

高木わか……………田中 絹代
友助、わかの子……………笠 智衆
友之丞……………三津田 健
わかの子 伸太郎……………星野 和正
友之丞の妻 せつ……………杉村 春子
仁科大尉……………上原 謙
桜木常三郎……………東野英治郎
藤田謙朴……………長浜 藤夫
友助の妻……………信 千代
林中尉……………細川 俊夫
機関銃隊長……………佐分利 信
金子軍曹……………佐野 周二
竹内喜左衛門……………原 保美

10巻 12月7日封切

＜かいせつ＞

原作は1943年5月から1944年4月にかけて朝日新聞に連載された火野葦平の同名小説であり、西南戦争の頃から始まって日清、日露の大戦を経て、今次の大東亜戦争に至るまでの三代にわたる歴史を、ある一家の歴史と重複させて描いた大作であった。この一家がかかわってきた歴史は、とりもおさず明治維新後の近代日本の姿そのものであった訳であり、富国強兵政策の足跡そのものでもあった。

この映画のクライマックスは、何といっても田中絹代扮する母親が、出征する息子を見送る長い移動のシーンであろう。ここには木下の作風と資質の最大公約数的部分が凝縮されているのであった。

近代日本の道徳が家父長制により成立し、それが強力な国家主義を形成していたと考える時、この高木一族の歴史はそれを象徴するがごとくであり、女中から一家の妻に迎えられて母親になり、主人と子供のために献身的努力を惜しまない田中絹代の姿こそ、歴史をささえた見えざる

要因でもあったはずである。

脚色を担当した池田忠雄は、松竹でも指折りのヴェテラン・ライターであり、出征を見送るラスト・シーンをたった一行「駅に送って行く」とだけ書き、木下にとにかく注文はつけなかったらしい。それを木下は、お国のために出征していく息子との別れを延々と移動するシーンで表現してしまった。これでは戦争に対する国民の合意を求めようとする意図は伝わらず、戦意昂揚に躍起の情報局から大いににらまれたのは当然であった。

歴史の重みの中でじっと生きる人間の姿を、抒情的に描くといったこの種のテーマは、以後の木下作品の最大の課題となり、題材的にも年代記的なものを格好なものとしてとり入れるようになった。これは木下の作品系譜を考える時重要な作品であり、日本映画史というものを考えた時にも重要な意味を持つものである。

木下はこの作品以後しばらく不遇の時を過ごす。また木下の全作品の撮影を担当している楠田カメラマンは、応召のためこの作品だけ抜けている。（大場）

＜あらすじ＞

九州の小倉で質屋を営む高木屋は、王政復古の戦火に見舞われて、

家を捨てて避難したこともあった。息子友之丞は19歳、維新の胎動を目のあたりに見る思いがした。それから30年の年月が過ぎ去った。明治28年、日清戦役の直後、友之丞は父ののれんを受けついで、妻を迎えたせつと質屋を守っていた。しかし、日本はドイツ、フランス、ロシア三国の干渉を受けて、一度は獲得した遼東半島を清国に返還のやむなきにいたり、世論は沸騰した。憂国の士友之丞は上京して山県有朋に面会し抗議した。が、狭心症を起こして入院し、急を聞いて郷里から息子の友彦が上京してきた。手当ての甲斐もなく友之丞は病院で亡くなった。

明治37年になった。友彦は気丈な母の指図で女中のわかを妻を迎えたが、折から勃発した日露戦争に応召した。しかし、病弱な友彦は陸軍病院に入れられ、何の働きもせずに帰宅した。戦勝で凱旋する同僚をみて肩身が狭い思いをせざるをえなかった。

軍人に向かない友彦は一家とともに福岡に移り雑貨屋となった。といっても店は母と妻がきりまわした。読書好きの友彦も気性だけは一本気であった。しっかり者の妻わかも息子たちをよく訓育した。やがて満州事変をへて大東亜戦争を迎えた。満州事変で応召した息子伸太郎に再び召集令状が届いた。福岡の街を行軍する一部隊の中の伸太郎を、歓呼の群衆にもまれながら、わかはいつまでも見送っていた。



大 曾 根 家 の 朝

松竹大船1946年作品

製作・企画……………細谷 辰雄
脚 本……………久板栄二郎
監 督……………木下 恵介
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………森 幹男
音 楽……………浅井 肇

＜配 役＞

大曾根房子……………杉村 春子
長男 一郎……………長尾敏之助
次男 泰二……………徳大寺 伸
三男 隆……………大坂 志郎
娘 悠子……………三浦 光子
大曾根一成……………小沢栄太郎
妻 幸子……………賀原 夏子
実成明……………増田 順二
丹波平兵衛……………藤輪 欣司
特高主任……………西村 青児
古賀……………鈴木 彰三
婆や……………高松 栄子
女中……………国兼 久子
八巻一平……………東野英治郎

8巻（2216米）2月21日封切
ベスト・テン第1位

＜かいせつ＞

終戦を迎えて様相が一変した中で作られた第一作が本作品である。それまでの内務省の検閲に変わって占領軍の検閲が出現し、決して作家の思いのままに作ることは不可能であった。そこで劇作家出身の久板栄二郎（1898～1976）と組んで、占領軍の民主化政策に沿った題材として、幸福に暮らしていた一家に軍人で横暴な叔父が乗り込んだが、家族の平和を乱された事にそれまで耐え忍んでいた当主の母が立ち上るという題材が選ばれた。

久板は戦前から新劇作家として活躍していたが、戦時中の弾圧による新劇界の潰滅後にシナリオ・ライターに転じた。本作品と同年に作られた木下のライヴァル、黒沢の「わが青春に悔なし」の脚本を担当しているのも奇しき縁といえるだろう。

一作々々実験的試みをしている木下にとって、久板との出会いは好感のもてるものだったらしい。緻密な

劇構成を得意とする久板の脚本を、木下は徹底して演劇的なものに仕上げるよう注文し、予算も十分とれない当時としてはセットも一ステージしか与えられず、木下にとっては＜演劇的映画＞を試みる絶好のチャンスであった。それを単なる室内劇としているのではなく、いかに映画的にさせるかの苦心が払われて、カメラの移動や回転によって人物の出入りを空間的に豊富なものとして、演出の妙をやったのけた。

この作品では、軍人の叔父に扮した小沢栄太郎が、徹底した悪人として描かれているのは、木下が自ら述懐するように久板共々両者の本意ではなかった。結局検閲でもめた結果の人物設定であり、ラストの政治犯の長男が釈放されて出獄するシーンを含めて、妥協の産物だったのである。

戦前においては森本薫、戦後においては久板栄二郎との出会いは、木下にとって大きいものであり、彼の脚本構成に少なからぬ影響を与えたものと思われる。（大場）

＜あらすじ＞

太平洋戦争下の1943年12月下旬のある日、大曾根家では、娘悠子の婚

約者実成明の出征を祝って、和やかな雰囲気に包まれていた。その夜、長男一郎は思想犯として突然検挙され、軍人の叔父大曾根一成は悠子の気持ちも察せず、実成との婚約を破棄する。悲歎に暮れる大曾根家に、画家志望の次男泰二は召集を受け、絵に対する情熱は絶ち切れないまま出発する。折からの空襲で焼け出された叔父夫婦は大曾根家に移り、わがもの顔に一家の上に君臨する。その頃、前線にある実成から次男泰二が戦病死した報せがもたらされる。三男隆は海軍予備学生を志願し、母の許可を求めるが、叔父は房子にこまわす無造作に許してしまう。その上叔父は自分の地位のため、悠子を無理やりに軍需会社の社長の息子との縁組を強要した。

8月14日の深夜、房子は隆が元気で帰ってきた夢を見、特攻隊へまわったという隆の戦死を予感する。秘密情報で早くも終戦を知った叔父は部下に督励して米俵をはじめ軍需物資を大量に家に持ちこむ。房子は叔父の態度をなじり、口論の末、叔父たちに立退きを要求する。

復員した実成と悠子は再び結ばれ、マッカーサー司令部のはからいで政治犯釈放により、長男一郎は晴れて自由の身となり、大曾根家は平和な姿をとり戻すのだった。



わ が 恋 せ し 乙 女

松竹大船1946年作品

企 画……………細谷 辰雄
脚本・監督……………木下 恵介
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………小島 基司
音 楽……………木下 忠司
編曲指揮……………宮田 東峰
唄……………栗本正, 栗本尊子

＜配 役＞

兄 甚吾……………原 保美
妹 美子……………井川 邦子
母 おきん……………東山千栄子
父 草二郎……………勝見庸太郎
野田……………増田 順二
喜造……………山路 義人
次郎……………大塚 紀男
少年時代の甚吾……………大塚 正義
少女時代の美子……………河野 正昭
牧 童……………稲川 忠一
〃……………杉山 繁三
〃……………泉 時彦
〃……………小泉 光弥
〃……………浜野 肇
〃……………鈴木 彰三
〃……………千葉 晃

9巻（2042米）10月29日封切
ベスト・テン第5位

＜かいせつ＞

華々しいデビューを飾った木下も、戦時中は多くの作家と同様苦しい時期を過ごさなければならなかったし、前作でベスト・ワンを受賞したものの彼本意のものではなかった。映画が撮れない時期でもセッセと脚本を書きためていた彼のことがあったから、手元には何本もの作品が揃っていた。この作品も、以前大船の企画部にマキノ光雄が在籍していた時、彼のアドヴァイスで構想を練っていたらしく、戦後の解放された気分の中で、短期間に書きあげられたらしい。木下の性に合ったアイデアらしく、シーン割りもない、まるで小説のような形式で一気呵成に書かれたものだったと自ら述懐している。

のんびりした農村を舞台に、仲睦まじく育てられた兄妹が、年頃にな

った時実の兄妹ではないことを知った兄が、心迷いながらもいさぎよく手を引いて妹の幸福な結婚を願うという物語を、牧歌的雰囲気の中にロマンチックに描いた作品であった。これは処女作の伸び伸びした作風が一番近いものではないかと思われるが、この作品以後のロマンス劇の端緒にもなった作品である。

戦後の解放的気分と、占領政策的検閲にもひっかかることのない状況と、木下のロマンス指向性が一致して出来た作品ともみられ、作品的にも興行的にも大成功を収めた。

作曲を担当した木下忠司は、周知の通り木下監督の実弟であり、武蔵野音楽大学を卒業後しばらく軍隊に在籍し、復員後松竹に入社した第一回作品がこの映画であった。カメラマンの楠田は木下監督と同じ時期に撮影部に入り、木下の第一作から、カメラを担当している盟友であり、また木下監督の実妹芳子は楠田夫人で女流シナリオ・ライターの楠田芳子であり、これ以後木下一家が木下作品に全面的に協力している。

この作品で一躍主役に抜擢された井川邦子は、当初河野敏子の芸名で1940年「絹代の初恋」（野村浩将）で田中絹代の妹役でデビューし、木下作品「生きてゐる孫六」「歓呼の町」などにちょい役で出演していたが、これは彼女の改名第一作であり、以後松竹の中堅女優として永い間活躍している。

（大場）

＜あらすじ＞

美しい牧場の夜明けの薄闇の中を慌しく走って行く人影、それはこの牧場で働く喜造老人である。彼は大声で叫びながら主屋の表戸を叩いた。この牧場で喜造をこんなにあわ

てさせたことはなかった。それから4年——牧場主草二郎の妻おきんの手で育てられた捨児の美子も無事に成長し、おきんは一人息子の甚吾と美子を変りなく愛育した。そして2人は忘れ難い思い出の幼年時代を共に過した。いつしか牧場にも深い秋が訪れた。甚吾と美子は牧場の青春を謳歌するかのように27歳と21歳の若人として甲斐々々しく働いていた。無邪気に話しかけてくる美子を見つめて甚吾はうっとり彼女の姿にみとれたりした。そんな時、甚吾の夢には完全に一人の女として成長した美子への魅力に対する歓喜が激しく奔ってくるのだった。幸福なこの生活も、美子にとって亡き母の面影を抱くことはたまらなく傷ましいことであった。また、幾日かの日々が過ぎ去った。村への街道はどこまでも続いている。若い2人は右と左とに山を背にして駆け下りて行く馬車のように運命の岐路へとさしかかって行った。豊年祭の夜、「そうだよ、お前と美子と一緒にいちゃ気心も解って良いからな」というおきんの言葉に、甚吾はどんなにか勇気づけられたことであろう。だが、美子には甚吾ならぬ愛人がいたのだ。甚吾もそれを知って愕然とした。沈黙の2人を乗せた馬車は運命の糸に操られながら静かに帰途への道を揺れて行った。甚吾は行手の山向うからぼっかり浮ぶ月に心奪われながら人知れずわが心に問うていた。甚吾と美子に乗せた馬車は月光の道を何処かへと走り去って行った。



結

婚

松竹大船1947年作品

製作……………細谷 辰雄
原案・監督……………木下 恵介
脚 色……………新藤 兼人
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………浜田 辰雄
音 楽……………木下 忠司

＜配 役＞

菅原積……………上原 謙
松川文江……………田中 絹代
父 浩平……………東野英治郎
母 ふき子……………東山千栄子
妹 君子……………井川 邦子
弟 敬二……………鈴木 彰三
島本……………小沢栄太郎
藤枝……………村瀬 幸子
下宿の主婦……………岸 輝子
きよ……………久慈 行子

9巻（2358米）3月18日封切

＜かいせつ＞

木下は前作「わが恋せし乙女」から数本たてつづけに恋愛映画を作るようになるが、本作品は、戦前からの日本映画界を代表する男女優上原謙と田中絹代を主演にして作られたメロドラマである。

荒廃した戦後世相を背景に、生活苦のため結婚が思うにまかせない恋人同志を描いたこの脚本は、「女性の勝利」（1946・溝口）で野田高梧と共作してデビューした新藤兼人の6作目で、木下のオリジナルを脚本化したものである。戦後の世相、薄情な世間が、愛し合う者同士に否応なくのしかかってくるという話はいかにも新藤らしい所だが、木下好みの感傷が加わる時に、それは社会問題を強く感じさせるような方向には発展せず、世間の荒波にもまれ、世の冷たさを嘆く人間像が色濃く浮び上ってくる。

「愛染かつら」（1938・野村浩将）で史上空前のヒットを飛ばした名コンビ、上原＝田中の共演ともなればドラマの筋立てがきまってくるだろうし、戦前の夢よう一度という会社側の期待がかけられればなおさらそうであろう。そうした予測は、同

年度内の松竹作品でも大ヒットとなって現われた。荒んだ観客の心には容易に受け入れられる題材でもあった訳だが、配役に、東山千栄子、東野英治郎、小沢栄太郎、村瀬幸子、岸輝子といった新劇人の名優を配して、甘く流れ易い物語をガッチリと引き締めようとする意図が十分に現れてとれる。

木下はこの頃より、与えられた題材がどんなものであろうともソツなくこなし、撮影条件の悪さにもめげぬたくましい製作力を身につけ始めていたのだった。（大場）

＜あらすじ＞

松川文江と菅原積は相思の仲だったが、2人の結婚はなかなか実現できなかった。文江の父は或る会社に30年も実直に勤めてきたが、終戦とともに失業したきりで、以来一家の経済は文江と妹君子の乏しい収入にたよっていた。1人の弟が大学へ通っているのも苦しい負担だった。こうした事情等が文江と積との結婚を阻んでおり、彼女の結婚は今の文江一家にとって経済上の破綻に等しかった。娘の苦しい立場を知る父は八

方就職に奔走し、母も妹も弟も姉の結婚を一日も早く実現させようと心をつかっていた。が、周囲の人たちの暖い心遣いにもかかわらず、2人の結婚の行く手には依然として現実の厚い壁が立ちふさがっていた。積にも文江一家をみただけの力はなかった。或る日、父は昔の下役島本に会い、いま料理屋をやって景気のいい島本から料理屋の勘定係で働いてはどうかと勤められた。娘の結婚を願う父ではあったが、一徹な気性として島本のような生活は到底耐えられず、その決心も鈍るのだった。ちょうどその頃、積の姉藤枝が上京してきて、老いさき短い母親の唯一の楽しみは積の嫁の顔を見ることだけだという。それを知った文江は苦しんだ。自分の結婚をめぐってみんなが苦しんでいることを思い、この際自分が身を退くよりほかないと決心する。一日2人は郊外の野辺に遊んだ。それは彼らにとって悲しい別離の一日だった。ところが、その日おそく積のもとへ故郷から母の危篤を知らせる電報がきた。積は文江の家を訪れ、死んで行く母のために文江に仮の花嫁となって同行してくれと頼む。今はもうすべてを知った父は働こうと決心した。一家は心から花嫁文江の前途を祝うのだった。



不

死

鳥

松竹大船1947年作品

製作……………小出 孝
原 案……………川頭 義郎
脚色・監督……………木下 恵介
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………小島 基司
音 楽……………木下 忠司

＜配 役＞

相原小夜子……………田中 絹代
相原弘……………黒沢 昭二
八坂真也……………小杉 勇
" もと……………高橋 豊子
" 真一……………佐田 啓二
" 勇二……………山内 明
" 三郎……………浜野 肇
" 保子……………長船ふじ子
" 健一郎……………川頭義一郎

9巻（2251米）12月11日封切

＜かいせつ＞

木下が松竹のトップ女優田中絹代と組んだのは、前作「結婚」が初めてであったが、これが大ヒットして田中と会社側の意向もあり、次の作品も田中主演の悲恋ものということで製作されたのが本作品である。

ヒロイン相原小夜子はやっと迎え入れられた八坂家で、わが子の誕生を祝いながら過ぎ去りし日々を回想する。女学生の頃高校生だった夫真一との出会いと激しい恋、父の死や弟の病気などの不幸な出来事、真一の父の2人の結婚への頑固な反対、そして愛する真一の応召と死など、彼女の身の上によりかかる幸福と不幸の交錯が、回想形式の中で感傷的で甘美的に描かれる。「岸壁の母」「戦争未亡人」等の言葉が巷に溢れるようになった当時の世相では、当然この種の映画が多く作られるようになったのだが、木下の助監督だった21歳の川頭義郎のこの原案を、社会性を前面に押し出すよりも、木下流に甘美に流れた日々、不幸に耐え忍んだ女の感傷といった点を強調して脚色化している。

一作品ごとに何らかの新しい手法を試みる木下にとって、題材が前作と似ていることもあり、本作品では

回想形式で話を展開するという技巧派の一面をのぞかせている。ことに最初の導入部ではカメラが室内に入りこんでヒロインの姿をとらえるまでの移動とか、不安に揺れ動く感情を表現するカメラの回転、野外場面での流麗なカメラワークなど、楠田カメラマンの功績と共に木下演出の冴えを十分発揮しており、興行的にもヒットした。

助監督を務めた川頭は1926年の生まれで日本映画学校に学び、45年松竹大船撮影所の撮影部に入社し、翌46年助監督に転じて「大曾根家の朝」から木下についた。55年「お勝手の花嫁」で監督に昇進して中堅作家として活躍し、その作風は師匠ゆずりのもの大であったが72年急逝した。

俳優の新しい面を引き出したり、新人を起用する事に才能を示す木下は、本作品で新人佐田啓二をデビューさせるのに成功した。当初田中＝上原コンビで作られるはずだったが調整がつかず、ちょうど入社のために撮影所にきていた佐田に目をつけて急遽抜擢したのだった。それ以後佐田は、その端正な甘いマスクで松竹のトップ男優として活躍することになるのだった。

日本映画最初の接吻シーンをやったのは、幾野道子・大坂志郎主演の「はたちの青春」（46・佐々木康）

であったが、本作品でも木下演出最初の接吻シーンが見られる。（大場）

＜あらすじ＞

息子健一郎が誕生日を迎える初秋の朝、今は八坂家の若い未亡人となっている小夜子は夫真一との短くも真実の愛に生きた若き日のことを想い出していた。

あの頃、小夜子

は女学生服、真一は一高の制服姿だった。通学の折り何時となく乙女心に印象づけられていた真一の落とした定期券を小夜子が届けたことによって2人の青春は急速に接近して行った。夢のように楽しい4年の年月が過ぎ去った時、突然に父の死、弟の病気さらに真一の応召とたて続けに不幸が小夜子に襲いかかってきた。

疎開先の小夜子のもとに入営していた真一が1週間の休暇で戻ってくるとの報せが届いた時、真一の父が突然彼女を訪れた。今まで2人の結婚を頑強に反対してきた真一の父親も、瀕死の弟の安心をひたすらに願う小夜子の真心を前にして結婚を許さないわけには行かなかった。晴れて八坂家の長男真一の妻として過した日は、悲しい弟の死にあった小夜子ではあるが、夢としか信じられない一週間だった。私がこんなに愛しているのだから絶対に死ぬはずがないと信じていた真一が戦死した。が、愛に生き抜いた小夜子には不幸とは感じられなかった。

八坂家では今夜、真一の忘れ形見健一郎が家族全員から誕生の祝福を受けていた。真暗な洋間に4本のローソクをたてたケーキが運ばれ、嬉しそうな健一郎と一緒にローソクの火を吹き消す。一つ、二つ、三つ、小夜子の笑顔も最後の4本目で消えていった――。



女

松竹大船1948年作品

製作……………小倉 武志
脚本・監督……………木下 恵介
撮影……………楠田 浩之
美術……………平高 主計
音楽……………木下 忠司
唄……………都 能子

＜配 役＞

林敏子……………水戸 光子
町田正……………小沢栄太郎

8巻（1832米）4月4日封切

＜かいせつ＞

木下の師匠格にあたる島津保次郎（1897～1945）は松竹映画創草期からの監督で、五所平之助、豊田四郎、吉村公三郎、佐藤武らの門下生をもち、木下は松竹時代最後の弟子であった。島津は厳格な仕事振りで知られてはいたが面倒見がよく、そのかわり自分の手許に置いた者が、他の組の助監督でついたりするのを好まなかったらしい。また＜映画は枠である＞とか、＜セリフの流れ＞とかいうことに非常に潔癖だった人らしく、門下生各々の述懐でそのことが偲ばれる。内容が技巧を決定する、技巧は内容によって変って行かなければならないといった島津の基本姿勢は、まさしく木下がこれまでの各作品に示してきたものだったし、以後もずっとそうである。木下自身が一作々々どこか違うものをと試みる実験精神が、決して突拍子もない“実験映画”に落ちこまないのは、前述の島津の映画文法を守っているからであろうし、本人自身繊細で潔癖な性質の持ち主だからであろう。しかし、島津が会社の企画に沿って難なく作品をこなして行っただけで、木下もまたあふれ出るアイデアを次々と作品化して行き、与えられた困難な題材をも自家薬籠中のものとしていった。群衆シーンの大作も撮れば、細やかな人情物や淡い恋物語も撮れる。その上興行的にも作品的にも注目を浴びるとなれば鬼に金棒である。

戦後の荒廃期で映画界は金もなけ

れば設備もない。しかし荒んだ人々の心をなぐさめる唯一の娯楽としての映画は量産されなければならない。そうなれば当然撮影所のスタジオが収容能力を超えてしまう。そこでロケーションによる撮影ということになった時、木下は見事にこういう悪条件に合ったアイデアを難なく提出してくれる。その結果が本作品なのである。

以前「わが恋せし乙女」で大半をロケ撮影によって映画化した経験を持つ木下は、出演者（俳優としての）がたった2人でオール・ロケーションという脚本を短期間のうちに書き上げた。当時流行した“泣くな小鳩よ”の唄が流れる中で、やくざでぐうたらな男に見切りをつけて、自我に目覚める女を描いたことは、これまでの木下にとっては珍らしい主題ではあったが、それでも小沢栄太郎の扮した男はどうにも憎めない存在であるのが木下らしい所であろう。彼のロケ・シーンはなぜか美しく生彩を放つ。自然の中で演じられる人生は牧歌的で優しく包まれている。こんな所にも木下の人生観、人間観が見られるのではないだろうか。（大場）

＜あらすじ＞

男性からの重圧に反発しつつ、正しく生きることを願う女、林敏子は雄々しくも強い自己本来の魂に目覚めていた。

レヴューの踊り子敏子は、やくざの町田の命令で箱根まで無理矢理に連れられて行った。町田は足を怪我したらしくびっこをひいていた。駅ですれ違った何やら怪しげな町田の友人2人と、車中で見た3人組強盗の新聞記事が、

女の敏感さから敏子はそこにただならぬものを感じとるのだった。

箱根についたと思ったら、すぐに浜松へ出かけようと言いだす町田。敏子の手を握っている町田の手は完全に1人の女の運命をつかんでいるのだった。それは、いくらあがいても逃がれることのできないクモの糸の如く、町田の触手は執ようだった。しかし、どうしても悪事を働いた人間とは思われぬ程無邪気に笑っている町田を見る時、敏子は思わずゾットするのだった。世間知らずの若い女をだまし、バーの女給やダンサーに転々と渡り歩かせ、女を使って男から金をしぼらせ、前借りを踏み倒しては逃げさせられた、敏子はさんざんな目にあってきた。男ゆえに転落していく敏子であったが、そんな中で彼女は絶えず、正しく生きるためには町田と別れる以外に道はないことを自覚していた。

熱海で途中下車したものの、町田は敏子に更生を誓ったばかりなのに、火事騒ぎに紛れて窃盗を働いてしまった。敏子はこの男の目から自己の将来をはっきり見とることができた時、この人は強盗したからつかまえて下さいと絶叫していた。敏子の名を呼んで救いを求める町田の声が耳に残っている。愛されているからといって愛せるものじゃない、悪人は悪人として憎まなければ善悪のけじめがつかなくなってしまう、冷たい女と言われてもいいと敏子は思った。劇場にもどってきた敏子は、今日もまた舞台のそでで他の踊り子と一緒に次の出番を待っていた。



肖

像

松竹大船1948年作品

製作……………小倉 武志
脚本……………黒沢 明
監督……………木下 恵介
撮影……………楠田 浩之
美術……………小島 基司
音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

金子の妾 ミドリ……………井川 邦子
一郎の妻 久美子……………三宅 邦子
ミドリの親友 芳子……………三浦 光子
画家 野村……………菅井 一郎
その細君……………東山千栄子
不動産屋 金子……………小沢栄太郎
〃 玉井……………藤原 釜足
野村の娘 陽子……………桂木 洋子
陽子の恋人 中島五郎……………佐田 啓二
野村の息子 一郎……………安部 徹
牛車曳……………山路 義人
ブローカー……………榊 保彦
絵本の商人……………新島 勉
近所の細君……………松原万里子
屋台主人……………植本 正道
久美子の息子 幸一……………木下 武則

8巻（2014米）

7月27日国際劇場、8月3日一般封切

＜かいせつ＞

本作品で一番興味をひくことは、同じ年にデビューしてライヴァル視され、作風の全く違う黒沢明が脚本を担当していることだろう。これは木下が黒沢に頼んで書いてもらったもので、前作「女」の熱海での火事のシーンを黒沢に賞められたり、自分とは違うやり方で佳作をものにしていて彼に一目置いており、黒沢の荒々しく歯切れのいいタッチを、自分の中に取り入れてみようという試みから発想したものだったが、黒沢の方が気を使い過ぎたらしく、余り黒沢的ではない脚本となってしまう、できた映画は黒沢にケチをつけられたと述懐している。

話は、ある不動産屋がボロ家を安く買ったものの、そこに永年住んでいるお人よしの貧乏画家一家が立ち退きそうもなく、一計を案じて、いやがらせに不動産屋の娘というふれ

こみで自分の妾を2階に住まわせる。しかしその若い妾は、画家一家の温かい人情にふれた時、自分の自堕落な生活に愛想がつき、独立独歩で生きようと決心するものである。これは、木下のオリジナル「女」にも似たようなモチーフが見られるが、小さい頃画家を目指したという黒沢らしく、純粋な芸術家としての老画家を設定し、若い妾をモデルにして大作を描かせる。その女は、2階のお嬢さんとして当初は喜々としてモデル台に立つが、美しく描かれていく自分の姿を見るにつけ、それとは裏腹の自分の生き方に疑問を持ち始める。そして、生活のためでも悪い絵本屋の注文を蹴ってしまう老画家を知って、ついには自分の道を歩むことになる。この辺の人物設定は、黒沢の処女作「姿三四郎」（43）や「酔いどれ天使」（48）などに見られる精神主義的傾向が見られるが、やはりソフト・タッチで木下向きに出来ている。貧乏を意に介しない老夫婦、甘いロマンスに酔いしれる若い恋人、そして停電したというのに月光の下でダンスに興じる楽天性。その上妾をやめる決心をして女友達と酒をあおってさめざめと泣くシーンなど、どこをとっても木下的である。これは、舞台が漁村から都会に変った「花咲く港」のようである。上述した各シーンを、同じ年に「酔いどれ天使」を作った黒沢のタッチと比較してみれば、両者の演出法の違いがまざまざと解るであろう。黒沢はワイプ（画面を横移動させて次のシーンに移る）を好んで使うが、木下もまたこの作品で、ワイプやアイリス・アウトなどの技巧をこらしてリズムをもたせている。

娘役の桂木洋子は、松竹歌劇団から映画界入りした新人で、これがデビュー作である。（大場）

＜あらすじ＞

若い妾ミドリの旦那金子は家屋売買のブローカーで、商売仲間の玉井

と2人で格安なアトリエつきの家を買った。だが、その家には老画家の野村一家が頑張っていて、金子も玉井も手を焼いたが、結局2階の間をあげるというので、野村を追いつ算段のため金子とミドリがその室に入るようになった。引越しの日ミドリは野村一家からお嬢さんとして迎えられ、やむなく金子とミドリは父娘として住みこんだ。野村一家は野村画伯とその妻、明るい娘陽子にまだ復員しない息子一郎の妻久美子とその子幸一の5人で、みんな善人ばかりであった。或る日、野村から肖像を描かせてくれと懇望されたミドリは、野村に本当の姿を見破られるのを怖れたが結局承知してしまう。ミドリは一人の娘としてモデルになっているうちに、ウソの皮に閉じこめられた良心の苛責に苦しむようになった。特に陽子とその恋人中島の明るい交際を目の前を見ると耐えられなくなり、モデルもやめ、この家から飛び出して行こうと金子にせがんだ。その日、友人芳子のアパートで酒を飲み、酔って帰宅したミドリは、自分はお嬢さんでなく妾だとわめきちらしながら、肖像画の前に立ちパレットナイフで絵を突き破ろうとした。これをみた久美子から強く生きることを諭されたミドリはわっと泣きふした。翌朝ミドリは姿を消していた。

その年の秋の展覧会場で、野村画伯の「肖像」を心持ちやせてはいるが何か凜然としたミドリがじっと見つめているのが見かけられた。



松竹京都1948年作品

製作顧問……………松本治一郎
 製作……………小倉浩一郎
 原作……………島崎 藤村
 脚本……………久板栄二郎
 監督……………木下 恵介
 助監督……………小林 正樹
 〃……………滝内 康雄
 撮影……………楠田 浩之
 美術……………本木 勇
 音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

瀬川丑松……………池部 良
 お志保……………桂木 洋子
 猪子蓮太郎……………滝沢 修
 土屋銀之助……………宇野 重吉
 町会議員金緑めがね……………清水 将夫
 郡視学……………加藤 嘉
 高柳利三郎……………小沢栄太郎
 校長……………東野英治郎
 丑松の叔父……………松本 克平
 町会議員 白ひげ……………永田 靖
 蓮華寺の奥さん……………東山千栄子
 猪子夫人……………村瀬 幸子
 丑松の父……………薄田 研二
 風間敬之進……………菅井 一郎
 勝野文平……………山内 明
 小諸の町会議員……………寺島 雄作
 僧侶……………玉島 愛造
 部落の青年……………青山 宏
 高柳夫人……………西川 寿美
 丑松の叔母……………岡田 和子
 11月30日国際劇場、12月6日一般封切
 11巻(2717米)ベスト・テン第6位
 ＜かいせつ＞

1946年～48年にかけて、映画界では労使間の争議が相ついで起った。特に東宝では、46年11月に＜十人の旗の会＞を中心とした分裂、47年3月新東宝の設立、48年4月には労働運動史上に有名な東宝大争議に突入し、8月には“こなかったのは軍艦だけ”というエピソードを残した進駐軍出動の事件にまで発展した。

島崎藤村の同名小説の映画化は、当初東宝で企画されたもので、既に久板栄二郎の手で脚本化されていたが、東宝争議のあおりで製作不可能

となり、急拠松竹にもちこまれたものであった。ところが大船撮影所ではステージが満杯だし、京都撮影所では監督が足りないというところから、木下に白羽の矢が立てられ、“東西撮影所交流の第1回作品”と称して製作されたのだった。

木下はこれを映画化するにあたり、久板のすすめもあって敢えて原作を読まなかったという。久板の脚本は、主人公瀬川が部落民として差別されている社会問題よりも、不遇な身の上にある少女お志保との心の交流に重点を置いている。木下演出もまた、問題の重要さをことさら深刻に取り上げず、若者が誰でも一度は通らなければならない人生の壁という事に焦点を合わせ、若者と少女のかかわり合いを、美しい自然の中で育ませるという演出法をとった。

悩める主人公瀬川を演じた池部良（1918～）は、1941年東宝の文芸部員として入社し、同年島津保次郎の「闘魚」でデビューし、今日まで万年青年の風貌で映画・テレビで活躍している。桂木洋子は前作「肖像」にひきつづいて木下に抜擢されて大役を射止めた。この若い出演者をめぐる傍役は、1947年結成された第一次民芸の滝沢、宇野、清水、加藤、それに俳優座から小沢、東野、松本、永田、東山、村瀬、薄田を迎えてのそうそうたるメンバーである。（大場）

＜あらすじ＞

水清い千曲川のほとりの飯山町に夢多い青春を何故か悲しみ、人知れず秘密を抱いて陰多い日を送る24歳の青年瀬川丑松がいた。新しい教育理念に目覚めて教鞭をとる身であったが、彼の秘密というのは彼が部落



出身であるということだった。同僚の土屋は師範時代からの親友で、当時の階級差別を糾弾する部落出の論客猪子蓮太郎に心酔していたが、その土屋にすら彼は真実を語れなかった。遠い山奥で独り淋しく息子の出世を夢見て暮す父の身分を隠せという厳しい叱咤に丑松は幾度か懊悩しても秘密の絆は解けなかった。丑松と一緒に蓮華寺に下宿していたお志保は、彼と同じ教鞭をとる風間老の先妻の娘だった。風間は退職を言渡されても土族の出を誇示することをやめようとせず、お志保は父の態度を見るにつけ身分に対する言いようのない反感に憎悪を感じていた。心の友土屋、心惹かれる人お志保の進歩的な気持に丑松の悩みは深まるばかりだった。こうした時、父の訃報がもたらされ、急ぎわが家に帰った丑松に、親族郎党は父の遺言を守って出世してくれと励すのだった。飯山の町へ戻った丑松はお志保の思慕にふれ、よみがえる思いだったが、幸福は長く続かなかった。代議士高柳が金策つきて迎えた妻は丑松と同じ部落の出で、互いに秘密を守ろうと懇望する高柳に、私はそんな女を知らないと突っぱねた。復讐心にとらわれた高柳は丑松の身分を、かねて犬猿の仲の同僚勝野に洩らした。町は大騒ぎとなり、不浄者を追いだせと怒号が飛びかう中であって、決然と丑松を擁護する二人の尊い姿があった。千曲川を上る屋形船の中に丑松と共に苦しみ、共に闘おうと丑松によりそうけなげなお志保の姿が見えた。

お嬢さん乾杯

松竹大船1949年作品

製作……………小出 孝
 脚本……………新藤 兼人
 監督……………木下 恵介
 撮影……………楠田 浩之
 美術……………小島 基司
 音楽……………木下 忠司
 バレー振付……………貝谷八重子
 主題歌「お嬢さん乾杯」…灰田 勝彦
 作詞 佐伯孝夫、作曲 灰田勝彦
 「バラを貴女に」灰田勝彦、若原弓子
 作詞・作曲 木下 忠司

＜配 役＞

石津圭三……………佐野 周二
 池田泰子……………原 節子
 祖父……………青山 杉作
 祖母……………藤間 房子
 父……………永田 靖
 母……………東山千栄子
 姉……………森川まさみ
 義兄……………増田 順二
 高松五郎……………佐田 啓二
 その恋人……………佐藤 成子
 佐藤専務……………坂本 武
 バーのマダム……………村瀬 幸子
 泰子の友達……………楠田 薫
 〃……………町田 旬子
 〃……………石田 淑子
 アパートの主婦……………高松 栄子
 10巻(2452米)3月9日封切
 ベスト・テン第6位

＜かいせつ＞

戦後の世相はがらりとかわり、特に旧財閥解体や、華族制度の廃止にともなう斜陽族、新興成金の登場などいろんな人間模様が当時は見られた。そういう世相にヒントを得て、没落華族の令嬢と事業に成功した自動車修理工との、見合いから結婚に至るまでの様々な出来事に、世相諷刺を存分に含めた喜劇である。

脚本を担当した新藤は、没落華族の悲劇を既に「安城家の舞踏会」（47・吉村公三郎）で描いている。そこではチェーホフの＜桜の園＞を思わせる緻密な構成で、登場人物の悲劇をドラマティックに描いて見事な成功をおさめた。ちょうどその

頃、太宰治の小説＜斜陽＞が発表されて評判になり、没落する上流階級の代名詞として“斜陽族”という言葉が広まっていた。

本作品を脚本化した新藤は、「安城家の舞踏会」と同じような題材を手にながら、木下の意向にそって見事に諷刺喜劇に仕立てた事は、脚本家としての並々ならぬ才能と考えない訳にはいくまい。家柄も教養もない男と、深窓の令嬢として育てられた女との出会い。成金趣味と華族生活の相違。——そんなちぐはぐなものから生じる出来事を、木下は軽快なテンポで喜劇に仕上げた。処女作「花咲く港」から彼には喜劇的要素が強くあったが、あくまでも“ほほえましい”ものであって“喜劇”ではなかったと考えられる。本作品によって、「破れ太鼓」「カルメン故郷に帰る」にいたる“木下喜劇”の第一歩を踏み出したとも考えられよう。

主演の佐野周二は、上原謙、佐分利信と共に松竹三羽鳥の一人で、木下作品に出演したのはこれが初めてである。また、日本映画のトップ女優原節子は、後にも先にも木下作品はこの1本だけである。助演の佐田啓二は、佐野周二の紹介で大船撮影所に来ていたところを、木下監督に見出されて「不死鳥」でデビューした新人だが、この作品では先輩、後輩が共演しているのも奇しき縁であろう。ともあれ彼らの好演と、大船調の明るい都会風喜劇が受けて、興行的にも大ヒットした。（大場）

＜あらすじ＞

自動車の修理業をしている石津圭三のところへ、得意先の佐藤専務が池田泰子という華族の令嬢との縁談をもちこんだ。提灯に釣鐘だと最初

は問題にしなかった圭三も、佐藤の熱意に動かされて見合だけすることになった。見合いをしてみた圭三はしっとりとした控え目な泰子の人柄にすっかり惹きつけられてしまった。佐藤から結婚承諾の返事をきいた圭三は、新調の服に派手なネクタイをしめて池田家を訪れ、泰子から家族を紹介された。世間知らずの斜陽族の悲しさ、詐欺事件の傍で刑務所入りしている父親浩平だけがいなかった。そのため池田邸も50万円の抵当に入っていて、その期限もあと3カ月と佐藤から聞いた圭三は、金のための結婚だったかと失望するが、泰子への思慕の念は強まった。或る日圭三は泰子に誘われて帝劇へパレエ見物に出かけるが、さっぱり興味を示さず、その帰途に見た拳闘に熱狂するのを見て、泰子は2人の趣味の相違を感じた。泰子の誕生日に精一杯気をきかして圭三はピアノを贈ったが、泰子の弾くショパンの曲の良さがわからない圭三は、蜜声を張りあげて故郷の民謡を歌った。その後、圭三と刑務所に浩平を訪ねた泰子は、父から金の為の結婚はするなと諭されて心が重い。翌日、圭三から本当の気持を尋ねられた泰子は愛情のない結婚に悩んだが、気を取り直し結婚すれば愛することもできようと自分の我儘をわびた。披露宴の日、泰子の愛人が戦死した話を聞いた圭三は、泰子一家に後顧の憂いのないように手を打って立ち去った。圭三の真心にうたれた泰子は自動車飛ばして圭三の乗った汽車を追いかけるのだった。



新 釈 四 谷 怪 談

松竹京都1949年作品

製作……………小倉浩一郎
原作……………鶴屋 南北
「東海道四谷怪談」より
脚本……………久板栄二郎
監督……………木下 恵介
撮影……………楠田 浩之
美術……………本木 勇
音楽……………木下 忠司
時代考証……………甲斐莊楠音

＜配 役＞

お岩・お袖……………田中 絹代
民谷伊右衛門……………上原 謙
お梅……………山根 寿子
お槨……………杉村 春子
お倉……………飯田 蝶子
直助権兵衛……………滝沢 修
与茂七……………宇野 重吉
小仏小平……………佐田 啓二
按摩宅悦……………玉島 愛造
一文字屋喜兵衛……………三津田 健
目明し辰五郎……………山路 義人
新吉……………加東 大介
囚人……………加藤 貫一
深川寮女中……………林 喜美枝
〃 下男……………宮島安芸男
水茶屋の女……………大川 温子
賭場の男……………大東専太郎
前篇 9巻（2344米）7月5日封切
後篇 8巻（2003米）7月16日封切
＜かいせつ＞

前作「破戒」に続いて木下が京都撮影所で製作した作品である。歌舞伎界や映画界では、正月は「忠臣蔵もの」、お盆には「怪談もの」といった作品を出して、興行的にも大ヒットしないしは水準以上の成績を上げるのが常であった。占領政策のため、封建的な時代劇や、「忠臣蔵もの」に代表される「仇討ちもの」などは映画化されにくかった。しかし企画が次第に貧困になってきた状況で、木下が偶然口に出したアイディアが、結局木下作品として実現することになったのだった。

原作は言うまでもなく歌舞伎の当り狂言、鶴屋南北の＜東海道四谷怪談＞である。久板、木下のコンビ

は、この古典を映画化するに当り、原作のもつグロテスクとも言えるオドロドロした世界、お岩の亡霊が虐殺された女の怨念のシンボルといった解釈をさらりとかわし、貧乏で失業侍である伊右衛門が生活のためお岩を犠牲にし、お岩の亡霊は伊右衛門の良心の呵責からくるノイローゼのための幻覚であると合理化している。そのために原作のストーリーにかなり大胆に手を加えているし、ことさらに「新釈」とことわってあるのもそのためである。当時の状況としては、時代劇から封建性と非合理性を省くことが要請されていたから、そのことも脚本化する上で十分に考慮されたのであろう。浪人の伊右衛門が残酷非道な男としてよりも仕官の道に目がくらんだ気弱な男として描かれているのも、失業者が街頭にあふれていた当時としては、妙にリアリティーが感じられる。

木下はこの演出にあたり、日本独特の絵巻物にヒントを得て、全体を俯瞰撮影で統一している。シーンごとスタイルが崩れることを極端に嫌った彼としては、全体を一つのスタイルで統一しなければならないという演出法に基づいた結果である。

上原＝田中のトップ・スターの共演と豪華な配役、それに時代劇大作ということもあって、前後篇に分けて作られたが、一篇だけでは採算がとれないという会社側の要請があったからで、会社の事情と自分の製作態度を、うまくかみ合わせて行く木下の面目躍如といったところであろうか。興行的にもヒットし、前篇の方が後篇よりも良かった。（大場）

＜あらすじ＞

お岩が茶屋女として働いていた時

知りあった民谷伊右衛門は、彼女を妻として迎えたものの、今では仕官の口を探しながら傘張りを内職として暮さなければならなかった。お岩にはお袖という妹があり、反物を売り捌く与茂七を夫として幸福に暮していた。しかし、お岩と伊右衛門の間には何かしっくりしないものがあった。或る日、一文字屋喜兵衛の娘お梅とその侍女お槨の苦境を救ってやった伊右衛門は、牢破りあがりの直助の取持ちでお梅を恋慕するようになったが、流産したお岩の身体を気遣うのだった。直助と同じ牢暮らしをした小平はお岩に横恋慕し、お岩に冷たくあしらわれていた。お槨と仲の直助は伊右衛門をそそのかしながら植木職を利用して事を運んだ。ふとしたことからお岩は顔に火傷をし、良薬だと言って直助がくれた薬を塗るとますますひどくなり、伊右衛門に嫌われまいと、直助が計って伊右衛門に盛らせた毒薬とは知らずに薬を飲み、悶絶死した。そこへ現われた小平も伊右衛門に斬られてしまった。表向きは小平とお岩の情死としてうまく取り計らった伊右衛門は、直助の奸計に引きずり廻され、お梅と祝言を交わし、仕官した。時がたつにつれてお岩のことも忘れつつあった或る日、従僕直助と夜釣りに出かけた伊右衛門は、ふと釣り上げた古い板割れを見て、お岩と小平の幻影と錯覚した。以来、伊右衛門はお岩の亡霊に悩まされるようになり、お梅との間も気まづくなって行った。恐怖にとらわれた小心者の伊右衛門は毒薬自殺した。



破 れ 太 鼓

松竹京都1949年作品

製作……………小倉浩一郎
脚本……………木下 恵介
〃……………小林 正樹
監督……………木下 恵介
助監督……………小林 正樹
〃……………倉橋 良介
撮影……………楠田 浩之
美術……………小島 基司
音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

津田軍平……………阪東妻三郎
妻 邦子……………村瀬 幸子
長男 太郎……………森 雅之
次男 平二……………木下 忠司
三男 又三郎……………大泉 滉
長女 秋子……………小林トシ子
次女 春子……………桂木 洋子
四男 四郎……………大塚 正義
叔母 素子……………沢村 貞子
野中茂樹……………宇野 重吉
父 直樹……………滝沢 修
母 伸子……………東山千栄子
経理部長 木村……………小沢 栄
花田輝夫……………永田 光男
洗濯屋……………青山 宏
リーゼントの社員……………山崎 敏夫
女中 つゆ……………村上 紀代
〃 きみ……………桑原 澄江
〃 うめ……………賀原 夏子
洋服屋……………中田 耕二
女事務員……………大川 温子
女学生……………向井 弘子
火見櫓番人……………玉島 愛造
11巻（2974米）12月1日封切
ベスト・テン第4位

＜かいせつ＞

一代で財をなした土建屋の暴君的な父親と、彼が疎外されている家族との対立を描いた木下喜劇の傑作である。

日本映画を代表する大俳優阪東妻三郎主演映画として、木下がそれまでの阪東主演の時代劇ではないものをという事を企画し、木下門下の小林正樹と共同で脚本化したもので、最初は正劇のつもりで進行したものが、構想を練っているうちに喜劇に

なったといわれる。

演出はかなり大胆にファース喜劇のタッチで貫かれているが、脚本の誇張と共に演技や表情もみんな喜劇的に誇張し、慎重にそのスタイルを統一するという配慮のため、ドタバタのナンセンス喜劇に陥る危険は避けられた。木下は「必然性のある誇張」を大事にしたのだった。

無教養で傲慢な暴君を演じた阪東妻三郎は1901年東京に生まれ、関西歌舞伎界から1922年映画界入りし、時代劇スターとして大御所的存在であり、「無法松の一生」（1943・稲垣浩）、「王将」（1948・伊藤大輔）などの現代劇でも魅力的な人物像を作り上げ、本作品でもその演技は絶讃され、彼の喜劇的演技に生彩を放った記念すべき晩年の作であったが、1953年にこの世を去った。

家族には新劇界から演技達者な豪華メンバーが配されたが、音楽家志望の二男には、木下監督の実弟で映画音楽家の木下忠司が出演しており、オヤジを諷刺した歌「破れ太鼓」を聞かせてくれる。長女役は当初高峰秀子の予定だったが都合がつかず、プロデューサーの大塚和から紹介されて大抜擢された小林トシ子は、日劇ダンシング・チームに属していた17歳の少女で、これが映画デビュー第一作となった。（大場）

＜あらすじ＞

津田家の主人軍平は土建屋で、過去は腕と度胸で危い橋を渡ってきた男、無教育で傲慢な暴君であった。家族に対しても、妻や子供は自分に感謝し尊敬して当然と思っている。だが父の会社に勤めている長男の太郎は、叔母素子と共同でオルゴール製造会社をやろう

とし、音楽家志望の次男平二はオヤジを諷刺した「破れ太鼓」という歌を作って弟妹にきかせている。三男又三郎は医学生、四男四郎は中学生、長女秋子は父の命令で会社の出資主の息子花田輝夫と愛情もないのに交際をしていたが、ふとしたことから青年画家野中と愛し合うようになる。次女の春子は女学生。兄弟みんな仲よく母を慕って楽しい家庭なのだが、軍平が帰ってくるとその団らんは一変してしまう。

この二つの雰囲気がとうとう爆発する時がきた——太郎がオルゴール会社のことを父に説き、反対されたうえに殴られた。太郎は家を出て叔母素子のもとに走った。秋子も昨日までの秋子ではなかった。恋に生きる強い女になっていた。輝夫との婚約のことで遂に父のゲキリンにふれ決然として家を出た。秋子を殴る軍平に今まで絶対服従だった妻邦子まで、良人のもとを離れ家を出てしまう。母のあとを追って子供たちもみんな家を出てしまった。そのころ軍平の会社は金詰りと、秋子と輝夫のことで資本主は手を引き、遂に暗礁にのりあげた。昨日に変わる失意の軍平は今こそ孤独の自分を知り、人生の悲哀を感じた。素子のもとでオルゴール製造にいそむ太郎や邦子、秋子たちも軍平を心から憎んでいるわけではなかった。みんな快く失意の父軍平を迎え入れてやるのだった。



婚約指環

松竹大船・田中絹代プロ1950年作品

製作……………木下 恵介
 //……………桑田良太郎
 脚本・監督……………木下 恵介
 撮影……………楠田 浩之
 美術……………森 幹男
 音楽……………木下 忠司

<配役>

九鬼道雄……………宇野 重吉
 妻 典子……………田中 絹代
 江間猛……………三船 敏郎
 九鬼哲也……………薄田 研二
 ばあや……………吉川 満子
 番頭……………増田 順二
 少年店員……………鈴木 彰三
 車掌……………音羽 久子
 守衛……………津村 準
 おかみさん……………高松 栄子

11巻(2644米) 7月1日封切

<かいせつ>

日本の代表的女優田中絹代は、1950年に日系興行者の招きで渡米したが、それは戦後外国に出た俳優の第一号でもあった。和服をアレンジした日本的いでたちで出かけた彼女であったが、羽田に降り立った姿は洋装にサングラスのモダン振りで、その変わりようをジャーナリズムは騒ぎたてた。

そんな彼女の帰国第一作として企画されたのが本作品で、題名をわざわざ“エンゲージ・リング”と読ませたところに狙いがあった。記念作品であるし、田中のスター性を強調するにはシリアスなドラマより、甘く美しいメロドラマに仕立て上げられるのが当然で、木下のオリジナルもその辺を十分加味し、銀座に貴金属の店を持つ女性が、療養中の夫をかかえる毎日の生活の中で、ふと若い医師に心を動かされるが、結局は何事もなかったように夫のもとへ戻るという、いわばよろめきドラマのはしりともいえるものに仕立て上げた。

木下の作品には徹底した悪人は登場しない。この映画の中でも、三角関係にある人々は全て善人であり、

その間にドロ仕合いを演じるようなこともない。自己主張して相手を責めめというより、自分の不甲斐なさを相手に詫びるという、木下特有の人間関係が展開される。それは蒲田調、大船調といわれる松竹女性映画の根底にあるものであり、木下の自虐の人間観がそこに加味される。

田中は、戦後のスターとしての存在を真剣に考えざるを得ない時期でもあった。渡米してハリウッドの大スターの行き方をつぶさに見てもきた。それ故、敢えて自分のプロダクションを設立するという冒険もやってのけたのである。相手役に抜擢された三船敏郎は、戦後東宝のニュー・フェイスの第一期生の一人で、1947年「新馬鹿時代」(山本嘉次郎)にチョイ役で出演、同年「銀嶺の果て」(谷口千吉)に大抜擢されてデビューした。(この二作品の封切は前後している)東宝争議のため、三船も他社出演が多かった時期でもあるが、この作品では、いわゆる松竹好みの二枚目というより、ガラガラとしてどこか苦味走った風貌が生かされており、古めかしいドラマの中では新鮮味があった。(大場)

<あらすじ>

2年前から胸を病んで網代の別荘で静養を続けている夫道雄を毎週土曜から日曜にかけて見舞うのが九鬼典子の唯一の慰めであった。典子は病身の夫の後をうけて銀座の九鬼貴金属店を独りで切り廻していた。いつものように熱海駅前から網代行きバスに乗った典子は、同乗の青年医師江間猛に何となく気を引かれたが、それは彼が履いている運動靴の白さのせいかも知れなかった。また江間の方でも美し



い典子に一目で強く惹きつけられてしまった。その典子が患者の妻であり、江間が事情により熱海の国立病院からきた夫の新しい医師だと判ってから、別荘で、駅で、車中でと2人の仲は急激に親密の度を加えていった。道雄の病状は次第に快方に向かっていたが、美しい妻を幸福にしてやれない自らのひ弱さに道雄は苛立ちを感じていた。或る日、夫から「この頃ばかり綺麗になったね」と言われて典子は思わず顔を強ばらせた。結婚してから7年になるとはいえ、戦争への応召、遅れた復員、病氣などで実際の夫婦生活は1年位のもので、別荘に来る時には必ずはめてきた婚約指環を典子が忘れるようになったのに道雄が気づいたのもこの頃のことである。上京の途中、来宮で下車して緑の梅林で、はたまた熱海の宇月旅館で典子と江間はお互いの愛を認めあい、また何事もないままに別れることを誓いあった。そうした土曜日の夜、自らの不甲斐なさを憎悪した道雄は海へ飛びこんだが、このことがきっかけとなって典子と道雄は再び強い愛情で結ばれるようになった。

江間の強い勧めで転地療養することになり、網代から富士見高原へと旅立つ九鬼夫妻を見送る江間の眼に典子の婚約指環のきらめきがうつるのだった。

善魔

松竹大船1951年作品

製作……………小出 孝
 原作……………岸田 国士
 脚 色……………野田 高梧
 //……………木下 恵介
 監督……………木下 恵介
 撮影……………楠田 浩之
 美術……………浜田 辰雄
 音楽……………木下 忠司

<配役>

中沼茂生……………森 雅之
 北浦伊都子……………淡島 千景
 三国連太郎……………三国連太郎
 鳥羽三香子……………桂木 洋子
 父 了遠……………笠 智衆
 北浦剛……………千田 是也
 小藤鈴江……………小林トシ子
 浅見てつ……………楠田 薫
 編集局長……………竜岡 晋
 編集局次長……………宮口 精二
 弁護士……………北 竜二
 編集局員……………長尾敏之助
 //……………前畑 正美
 //……………手代木国男
 //……………野口 豊
 少年係員……………高木 信夫
 新聞売……………大杉 陽一

11巻(2959米) 2月17日封切

<かいせつ>

岸田国士の小説の映画化である。岸田国士は、劇作家、新劇演出家、小説家であり、とくに劇作家として、昭和初期の左翼演劇の支配的だった時期に、イデオロギー劇の粗っぽさを排して、言葉の情感の美しさと心理的な繊細さを主眼とする演劇論を展開して多くの佳作を発表すると同時に、後進を育成して戦後の新劇界にも大きな影響を残した。その作風はデリケートで知的で上品であったが、ひたすらフランスに憧れるようなブルジョア趣味的な甘さが、いささか気取り屋的な印象を与えて、ファンの幅をせばめていたことも否定できない。小説家としてもおなじような特色のある、やや甘く清潔で知的ではあるが、純文学作品としてはいくらか皮相なうらみのあ

る長編小説を多く書いた。いわば知識階級の女性向き通俗小説と言えよう。「暖流」「落葉日記」など有名である。とくに前者は吉村公三郎監督によって1939年に映画化されて、知性のある女性メロドラマとして評判になった。木下恵介はこのとき吉村公三郎のチーフ助監督であった。

「善魔」も、いかにも岸田国士らしい作品である。善魔とは、悪をなす者が魔的なエネルギーと行動力を持つとしたら、善をなす者も、ただ善良でおとなしいというだけではだめで、やはりデモニーッシュなエネルギーを持たなければだめなのではないか、という願いをこめてうち出された作者のひとつの観念であり、この作品のなかでは、三国連太郎の扮する主人公三国連太郎がその観念を具体化したヒーローである。三国連太郎はまったくの新人で、この作品でデビューして、その役の名を芸名にしたのである。このあとひきつづき「少年期」「海の花火」で木下恵介の指導を受けて一人前の俳優になっていった。

この作品は珍らしく、ベテランの野田高梧と一緒にシナリオを書いている。大多数の作品を自分のシナリオか、若い人と協力したシナリオで撮っている木下恵介としては、先輩に脚色を依頼した作品は、久板栄二郎による「大曾根家の朝」と「破戒」

ぐらいしかないのである。(佐藤)
 <あらすじ>

T新報社の社会部記者三国は、中沼部長より家出した某官庁の北浦氏の妻伊都子の動静をさぐるよう命じられた。個人の私事に立ち入るのを好まない三国は、不本意ながら長野

原に隠棲する伊都子の父を訪ね、彼女の妹三香子の案内で久能山麓の親友の家にいる伊都子に会い、夫と性格の合わないことがわかったからという家出の理由を聞き、新聞に発表しないと約束して帰社した。他の新聞が大きく報道したので三国もこの会見記を記事にしたが、結婚前の伊都子とお互いに深い好意を抱きあう仲だった中沼は、この事件をあばきたててを好まず、そのため左遷されようとした。この事件以来三国は三香子と愛しあうようになり、中沼も伊都子に再び心を惹かれるようになった。肺を患っていた三香子が重態となった時、伊都子は静岡から長野原への途次、前から関係のあった鈴江とも別れたという中沼から愛を打ちあけられたが、北浦との離婚問題と一緒に考えられたいと断った。長野原に行った三国は、死ぬ前の三香子と結婚式をあげるべく中沼を立て会人に頼みに帰京してみると、中沼は社をやめ、北浦にも伊都子に対する気持をぶちまけてしまっていた。長野原についた時、すでに三香子は永眠していたが、三国の希望で死せる花嫁との結婚式が、父了遠、伊都子、中沼の立会いで行われた。さらに伊都子の愛を求めようとす中沼に対し、伊都子は自分は北浦を不幸にしたうえに鈴江を不幸にしたくないからといって中沼を東京へ帰すのだった。丘の上に三香子の屍を焼く煙が白くのぼっていた。



カルメン故郷に帰る

松竹大船1951年作品

総指揮……………高村 潔
製 作……………月森仙之助
脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………小林正樹、加藤健司
〃……………二本松嘉瑞、川頭義郎
〃……………松山善三、今井雄五郎
最 影……………楠田 浩之
撮影助手……………高村倉太郎、小原治夫
加藤正幸、内海収六
保積善三郎
美 術……………小島 基司
美術助手……………平高 主計
音 楽……………木下 忠司
〃……………黛 敏郎
舞踊振付……………三橋 蓮子
字幕意匠……………清水 崑
主題歌…「カルメン故郷に帰る」

作詞木下忠司、作曲黛敏郎

唄高峰秀子

「そばの花咲く」作詞・曲 木下忠司
唄渡辺はま子

＜配 役＞

リリイ・カルメン（おきん）……………
……………高峰 秀子
田口春雄……………佐野 周二
校長先生……………笠 智衆
田口光子……………井川 邦子
青山正一……………坂本 武
小川先生……………佐田 啓二
マヤ・朱実……………小林トシ子
岡信平……………三井 弘次
青山ゆき……………望月美恵子
村の青年……………山路 義人
青山一郎……………磯野 秋雄
丸野十造……………見明凡太郎
カラー・10巻(2360米) 3月31日封切
ベスト・テン第4位

＜かいせつ＞

トーキー映画の出現が映画界に大事件をもたらした事は周知の事実であるが、1931年に日本で最初のオール・トーキー「マダムと女房」(五所平之助)を製作した松竹が、この作品で日本最初のオール・カラー劇映画製作の冒険に踏み出した。

もともとは日本映画監督協会から

の要請であり、当時一番景気の良かった松竹に白羽の矢が立てられ、その上一番安定した力量を持つ木下が指名されることになった。使われたフィルムが国産のフジカラーでもあり、やることなすことが全て最初の事ばかりである上、製作費も莫大なものとなるから興行的にヒットさせなければならない。セット撮影では光量計測に難点があるからオール・ロケという条件も満たさなければならない。そういう悪条件をも乗りこえて、パットひらめかせたのが本作品であり、まざまざと木下の力量を見せつけるものである。

当時は＜額縁ショー＞から発展したストリップが巷の人気を集めている頃で、そういう風潮に何らかの意志表示をしたとも考えられるし、やっている本人だけが芸術のつもりでいるアンバランスぶりを、木下一流の皮肉な目でとらえたものである。「太陽とバラ」(1956)で＜太陽族＞批判をやったり、60年代後期から氾濫した暴力映画、セックス映画に苦言を呈したりする彼の性向であれば、この喜劇の中にも彼の冷徹な世相風俗批判の眼が感じられる。時流流行に乗れない＜古き＞と、乗らない＜新しさ＞が奇妙に同居しているのは、＜豆腐屋は豆腐しか作らないし、作れない＞と言った小津安二郎とどこか共通している。

主演の高峰秀子は、これが初めての木下作品で、この時使い走りだった助監督松山善三(55年結婚)との最初の出会いでもあった。

“総天然色映画”と大々的に宣伝されたが、白黒版も同時に作られている。(大場)

＜あらすじ＞

浅間山麓に牧場

を営んでいる青山の正さんの娘さんは、東京から友だちを1人つれて近日帰郷すると知らせてきた。その手紙にリリイ・カルメンと署名してあったので、正さんはそんな異人名前の娘には覚えがないと怒鳴り、きんの姉のゆきは村の小学校の教師をしている夫の一郎に相談に行った。校長先生に正さんをなだめてもらうことにした。田口春雄は出征して失明して以来愛用のオルガン相手に作曲していたが、運送屋の丸十に借金のカタとして取りあげられたので、息子の清に手をひかれて小学校までオルガンを弾きに来るのだった。丸十は村に観光ホテルを建てる計画に夢中で、そのため東京まで出かけ、おきんや朱実と一緒に車で帰ってきた。東京でストリッパーをしているおきんや朱実の派手な服装と突飛な行動とは村に大騒ぎをまき起こし、正さんはそれを苦にして熱を出してしまう。村の運動会で、春雄が自作の曲を演奏している最中に朱実はスカートを落っことして演奏を台なしにしてしまうし、想いを寄せている小川先生が一向に手応えを示さないで、きんと2人くさってしまう。しかし、丸十の後援でストリップ公演の舞台に立った2人は大成功を収め、意気揚々と東京へ戻って行った。2人の出演料はそっくり正さんの手をへて小学校へ寄付された。丸十は儲けに気をよくしてオルガンを春雄に只でかえしてやったので、春雄は光子と一緒におきんらが乗った汽車に感謝の手をふるのだった。



少年期

松竹大船1951年作品

製 作……………小倉 繁
原 作……………波多野勤子
「少年期」より
脚 色……………田中 澄江
〃……………木下 恵介
監 督……………木下 恵介
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………浜田 辰雄
美術助手……………梅田千代夫
音 楽……………木下 忠司

＜配 役＞

母……………田村 秋子
一郎……………石浜 朗
父……………笠 智衆
下村先生……………三国連太郎
とよさん……………小林トシ子
山崎夫人……………桜 むつ子
古河老人……………坂本 武
校長……………北 竜二
山崎……………増田 順二
雑貨屋のおばさん……………三好 栄子
〃 お婆さん……………高松 栄子
倉木先生……………二本松嘉瑞
二郎……………野沢 哲夫
三郎……………木下 武則
山崎の娘……………木下 忍
隣組のおかみさん……………紅沢 葉子
12巻(3022米) 5月12日封切

＜かいせつ＞

心理学者波多野勤子の著書「少年期」(光文社刊)は当時の大ベスト・セラーで、＜カップブックス＞シリーズの魁となったものである。これは、著者とその息子との往復書簡を一冊の本にまとめたものであり、心理的に不安定な少年期の子供に、学者の母親がどう対処したかという点に人々の関心はそそがれた。

ベストセラー物の映画化権は、常に数社が激しい獲得競争を演じるものだが、松竹は早々と先を見越して木下の名前で手に入れていた。だから、会社の企画にうまく木下自身が乗せられたともいえる。

題材が少年と母親の交流ということで、脚本に女流ライター田中澄江が起用された。田中(1908年生まれ)

は、「我が家はたのし」(1951・中村登)で映画界入りし、水木洋子と共に女流脚本家の魁となった人で、この作品が2作目である。夫の劇作家田中千未夫と共に熱心なクリスチャンでもある。映画化にあたり、木下は原作にとらわれる事なく自由にアレンジしている。

戦時中の教育が軍国主義的なものであった事は当然であるが、特別な軍国少年ではない者にとっても、もし家族の一員に非愛国的な行動をとる者がいたら、純粋な心に不思議なものと映るであろう。主人公の父親は自由主義者(実際には心理学者の波多野完治)の学者で、戦争に背を向けてこつこつと研究に打ちこんでいる。敬愛する教師の出征に動揺したり、祖国の危機を子供心ながら感じている少年にとって、そんな優柔不断な父親を恥かしく思う。疎開した土地の人々の眼も厳しく感じられる。そうした複雑な環境の中で交わされる親子の微妙な感情といったものを、克明に静かに描いた小品である。

主役の少年を演じた石浜朗(1935年生まれ)は、5000人の応募者の中から選ばれた新人で、最終審査に残った2人の中、母親を演じた田村秋子の推薦もあって大役を射止めた。石浜は期待に応える名子役振りで木下を喜ばせ、彼をして第1回から育てた新人の中でお気に入りの男優として、石浜と田村高広(「女の園」)、田浦正巳(「日本の悲劇」)の3人を上げている。(大場)

＜あらすじ＞

戦争の恐怖が東京の街に暗い影を投げかけている頃、一郎の家では一郎だけを残して一家が信州へ疎開することになっ

た。大学で英文学を講義している父は、戦争の嵐で職を奪われ、一家の暮しは必ずしも楽ではなかった。

一人東京に残った一郎は、煙草屋の小母さんの家に下宿する事になったが、そんなある日、一郎が尊敬していた下村先生が戦死したことを知った。

信州の学校へ転校した一郎は、軍国主義的校風につきあたった。特に倉木先生はふとした誤解から一郎に辛く当るようになった。毎日汗水ながして働いている母の姿を見て、どうして父が手伝わないのか不思議に思った。父は読書ばかりしていた。或る日、むしゃくしゃした気持が一度に爆発して「あんなお父さんは嫌いだ」と激しく言った。

そのうち、村人たちの間で父が反戦主義者だという噂が広まった。一郎は村人たちの白眼視に耐えきれず母に訊ねた。この戦争は人々がいうように立派な戦争だとは思っていないのだと説明されたが、自分の尊敬する下村先生がそんな戦争で犬死したかと思うと一郎の心は益々暗くなるばかりだった。警報下の暗い電灯の下で一心に読書している父の姿を見た一郎は、何故こんな時に本など読んでいるのかと聞くと、父はやさしく、自分が死ぬ前に5時間でも6時間でも余計に寝た方が良いのか、それともせめて生きている間は読めるだけの本を読んだ方が良いのか、と答えるのだった。

こうして、一郎は初めて心底から父を理解し尊敬するようになった。



海の花火

松竹大船1951年作品

製作……小倉 武志
脚本・監督……木下 恵介
助監督……小林 正樹
撮影……楠田 浩之
撮影助手……小原 治夫
美術……浜田 辰夫
音楽……木下 忠司

＜配 役＞

神谷美術……木暮実千代
妹 美輪……桂木 洋子
母 さみ……岸 輝子
父 太郎衛……笠 智衆
魚住薫……山田五十鈴
母 みつ……東山千栄子
息子 省吾……三木 隆
野村由紀子……津島 恵子
矢吹穀……三国連太郎
弟 渡……向坂 渡
鯨井この……杉村 春子
息子 民彦……佐田 啓二
渚一平……石浜 朗
みどり……小林トシ子
相川仁吉……坂本 武
唐沢源六……永田 靖
石黒軍造……宮口 精二
森山……三井 弘次
水産庁漁権課長……十朱 久雄
高橋勇三郎……北 竜二
犬上千代治……小林十九二
魚住英明……細川 俊夫
鯨井梅子……矢吹 寿子
漁業組合唐津支部長……稲葉 義男
下関の船主……松本 克平
水産庁博多出張所長……信 欣三

13巻（3338米） 10月25日封切

＜かいせつ＞

木下恵介は、一作ごとに違った作品をつくる、ということに喜びを感じている人である。悲劇もつくれば喜劇もつくる。大作もつくれば小品もつくる。とはいえ、自ずから得意の分野はあり、抒情的、女性的、庶民的な題材のばあいに成功した作品が多いが、そういう作品でも一作ごとに演出のテクニックは変えている。たとえば「二十四の瞳」はロング・ショット本位の映画であり、意

識的に人物の出し入れは横からに限り、風景の奥行きは深く、芝居は逆に平板にして自然な淡々とした印象を出している。「女の人」は移動撮影に力点をおいた演出で、登場人物の感情のうねりをエモーショナルなカメラの動きで鮮やかに表現した。「破戒」では俯瞰を効果的に使ったが、「四谷怪談」ではそれをいっそう徹底的に試みている。「女」ではオール・ロケーションを試み、「陸軍」ではワン・シーン＝ワン・カットを多用した。「カルメン純情す」では全ショットをカメラをななめにして撮っている。

こういう多様な試みは、才気があり余っているからでもあろうし、映画をつくること自体の愉しみの追求ということでもあろう。しかし、ひとつには、助監督時代に撮影所長の城戸四郎に才能を認めてもらうために、つぎつぎとシナリオを書いては提出していたとき、自分にはいろんな才能があるのだ、ということを知ってもらうために、悲劇、喜劇、メロドラマと、さまざまなものを書いたからであるようである。

おかげでわれわれは多様な映画作法を愉しむことができるのであるが、一面、ねらいがマトを外れてしまつて焦点が定まらない感じの作品もないではない。「海の花火」は、木下恵介としては珍らしく自分なりのメロドラマを試みようとして、メロドラマにはなりきれなかった作品と言えよう。音楽を担当している木下忠司は木下監督の弟であるが、戦争中、陸軍の船舶兵として船に乗っていたのがモデルであるという。主として九州の田舎の話だけでまとめようとしたのを、



それでは客が来ないから東京の話を入れてくれと会社から注文され、筋がややこしくなってしまった、と監督も言っている。（佐藤）

＜あらすじ＞

北九州の一隅、呼子港の遠洋漁業組合長神谷太郎衛は、組合の赤字の原因が持船第一肥前丸と第二肥前丸の船長唐沢源六と石黒軍造の不正にあると睨んで2人を解雇した。折よく戦時中船舶兵としてこの土地にいた魚住省吾が訪ねてきて、後任船長を世話する約束をした。省吾の紹介の新船長矢吹穀と渡の指揮で久しぶりに第一、第二肥前丸は出航し、大漁であったが市価の暴落で組合の赤字を挽回することは出来なかった。その上、唐沢と石黒はいろいろな妨害をしかけてきた。さらに太郎衛の持船が滅船令にひっかかり、彼はそのため陳情すべく上京し、幸い願いは聞き入れられたが病床に倒れた。驚いて駆けつけた姉妹美輪は、かえってこのために永い間の省吾との恋が実を結び、結婚を許されることになった。一方、呼子港での唐沢らの悪事がばれ、一味は警官隊に捕えられた。その時、町へ流れてきていた踊り子みどりは、ひそかに恋していた穀の身代りにたつて兇弾に倒れた。第一、第二肥前丸が日進水産への引渡しのため呼子港を出て行く日、穀と渡は甲板に立って見送る太郎衛に手を振っていた。穀は省吾と結婚した美輪よりも今は自分のために死んだみどりの姿を胸に、渡は妹美輪から贈られたロザリオをその手に持って……。

カルメン純情す

松竹大船1952年作品

製作……小倉 武志
脚本・監督……木下 恵介
助監督……川頭 義郎
〃……松山 善三
撮影……楠田 浩之
撮影助手……小原 治夫
美術……浜田 辰雄
音楽……木下 忠司
〃……黛 敏郎
振 付……三橋 蓮子

＜配 役＞

カルメン……高峰 秀子
須藤……若原 雅夫
千鳥……淡島 千景
朱実……小林トシ子
熊子夫人……三好 栄子
女中 きく……東山千栄子
須藤の母……村瀬 幸子
「ラッキー」の親爺……坂本 武
野村……日守 新一
須藤の父……斎藤 達雄
劇場の役者……堺 駿二
ポン引の女……望月 優子
劇場のマネージャー……多々良 純
朱実の彼氏……磯野 秋雄
牛島……増田 順二
新島……須賀不二夫
「ラッキー」の女房……高松 栄子
細井レイ子……北原 三枝
忠僕 山下……竹田 浩一

水木 涼子
小藤田正一
高瀬 乗二
紅沢 葉子
青木 富夫

11巻（2805米） 11月13日封切
ベスト・テン第5位

＜かいせつ＞

木下は「海の花火」を撮り終えた後、1951年10月から52年7月までヨーロッパ旅行に出かけた。この作品は、彼の帰国後の第1作となったものである。

フランスでの長期滞在は、木下にとって実り多いものであった。文化とか民主主義といったものを、実感として肌で感じとり、多くの人がそ

うであるように、外側から日本及び日本人というものをつぶさに観察することができた。戦後盛んに言われた＜民主主義＞とか＜文化＞とかの、いかに戦後日本で軽々しく言われていたか。軽兆浮薄な気分の中で、いかに人々がその風潮に踊らされていたか。ストイックな気分でフランスに滞在した。かといって、フランスかぶれになるのでもなく、急激なく日本回帰に身を置くような事もなかった。しかし、政治や社会問題にそれまで以上に眼を向けるようになったことはたしかであった。

木下が創造した「カルメン」という人間像は、彼自身のお気に入りらしく、彼一流の諷刺喜劇にはもってこいの人物でもあった。本作品では舞台を一変して、前作の農村から都会へと移し、その上、大前衛芸術家なる人物を設定する。ストリップを立派な芸術と信じ込んでいるカルメンは、この芸術家まがいの事を口走る前衛画家のおだてにのせられて彼を尊敬し、彼に失望して行く過程が歯切れの良いテンポで展開されて行く。そこには、芸術家たるものは生活全体が芸術的でなければならぬという信念のもと、家族や使用人にまで芸術的な服装や、立居振る舞いをさせる。おつむの弱いカルメンも、そういうことが芸術的と信じて近づこうとするが、結局はカルメンはカルメンのままであった。木下は実に

この事が言いたかった。自分がフランスに行つて多くの事を吸収はしてきたが、かといって急激に大きく変りようもない。この作品は、そういった木下自身の宣言であり、自戒の結果であろうと見られよう。異常な世界を表現するの

に、全編カメラ・アングルを曲げて撮っているのも、木下らしいアイデアである。（大場）

＜あらすじ＞

浅草のストリッパー、カルメンのもとに男に捨てられた旧友朱実が赤ん坊を抱いて舞い込んできた。善処のめどもつかないまま、2人は泣きの涙で赤ん坊を捨てたが、折からの火事騒ぎで急に心配になり引返してくる。ちょうどパリ帰りの芸術家須藤が家の前の捨て子を元の情婦レイ子の仕業と思いこみ、カンカンになって電話で相手を詰問している最中だった。須藤と知合ったカルメンはその不可解な様式の作品に大感激し、やがて尊敬がほのかな慕情に変わった。須藤にモデルを頼まれても裸になれない彼女だった。須藤は代議士候補佐竹熊子女史の娘でアプレ派の千鳥と300万円の持参金目当てで婚約しているが、或る日、下情視察と称する熊子女史を案内してストリップ劇場に現われた。客席に恋しい人を見出したカルメンは、どうしても裸になれず、ついに解雇されてしまった。朱実と共に日雇仕事を転々として今はラッキー食堂に勤めているカルメンの所へ、千鳥と須藤の結婚を呪う手紙の主と誤解した熊子女史がどなりこんできた。余りにも真剣なその様子を須藤が自分を愛しているためと勘がいた彼女は、千鳥に恋を譲り、幸福そうに微笑みながら、またも迫りくる生活苦にたち向かうのだった。



日本の悲劇

松竹大船1958年作品

製作……………小出 孝
 脚本・監督……………桑田良太郎
 助監督……………木下 恵介
 撮影……………川頭 義郎
 撮影助手……………楠田 浩之
 美術……………高村倉太郎
 音楽……………中村 公彦

＜配 役＞

井上春子……………望月 優子
 娘 歌子……………桂木 洋子
 息子 清一……………田浦 正巳
 艶歌師 達也……………佐田 啓二
 板前 佐藤……………高橋 貞二
 赤沢正之……………上原 謙
 妻 霧子……………高杉 早苗
 娘 葉子……………榎並 敬子
 芸者 若丸……………淡路 恵子
 春子の義兄 一造……………日守 新一
 一造の妻 すえ……………北林 谷栄
 一造の息子 勝男……………草刈洋四郎
 藤田……………須賀不二夫
 闇屋風の男……………多々良 純
 岩見……………柳 永二郎
 小林十九二
 水木 涼子
 矢吹 寿子
 草香田鶴子
 竹田 法一
 青木 富夫
 長船フジヨ

13巻（3172米） 6月17日封切
 ベスト・テン第6位

＜かいせつ＞

フランスから帰国した第1作「カルメン純情す」では、斜めから見た日本批判ともいえる作品であったのだが、この作品では真正面から日本の現実をとらえ、木下の代表作のみならず、日本映画の中でも最良の作品ともいえるものである。

女手一つで育てた息子や娘が、母の無教養さや、戦後の困難期を乗りこえるため旅館の女中をしたり、いかがわしい関係をもったりしたことに愛想をつかし、ついには母を自殺に追いこむまでに至るという、題名

通りの1950年代の“日本の悲劇”が、ニュース映画の挿入や荒々しい画調とで、木下作品に珍らしいリアルなタッチで描かれている。そこには、木下がこよなく愛した良き家族関係や、困難に耐える 美しさとか、他人への優しい思いやりなどが極端に省かれている。といって、各個人が決して悪人に描かれている訳でもない。自分を守るためにはどうしてもそうせざるを得ない言動が、結果として冷たい人間関係や思いやりの崩壊を生み出すのだと言わんとしている。そこには、多分に“自我の目覚め”といったニュアンスが感じとられる。しかし、60年代以降の日本映画に顕著に見られる、激しい自己主張をする人間像とは一味違ったものがあり、あくまでも、50年代の日本にあった社会的悲劇が主流となっている。木下が理想とする人間関係の崩壊を嘆いているのであり、ひいてはその因となった戦後の社会問題を強く批判しているのである。

当初、母親役に田中絹代が予定されていたが、田中がそれを断ったため望月優子が起用されたが、彼女は一世一代とも言える熱演振りでこれに応え、この作品の成功に大きく貢献した。息子役の田浦正巳はこの映画でデビューした。（大場）

＜あらすじ＞

熱海の旅館「伊豆花」に女中とし



て働く春子は、戦争未亡人である。終戦直後の混乱とき、歌子と清一の2児を抱えて、かつぎ屋やら曖昧屋の女やらにまで身を落とし、唯一の財産だった地所も悪らつな義兄夫婦に横領された。

彼女の生き甲斐は、無理して洋裁学校と英語塾に出している歌子、医科大学に通わせている 清一だったが、当の2人は春子に冷めたい。というも母と客との酔態を垣間見た子供心の反撥が今に至っているわけである。その美貌にも拘らずまっとうな嫁入り口もないことを母の行状のせいにした歌子は、いつしかシニカルな娘になり、彼女に心を傾けている英語教師赤沢の妻霧子の激しい嫉妬さえ鼻先きであしらう始末。一方、清一は最近、戦争で息子を失った資産家の医師から養子に望まれ、籍を移してくれと頼んでくる。むろん春子は子供ゆえの今までの苦労を強調し、狂気のように反対するが、そのおしつけがましい愛情がいよいよ子供らの心を遠のかせた。歌子は愛してもいない赤沢と墮落ちする。あわてた春子が急速上京し、すでに資産家の医師の邸に住みこんだ清一に相談しようとする、息子はただ籍のことだけを固執した。その冷静な語調に、春子は諦めて養子の件を承諾する。生き甲斐を失い、息子たちの小遣いにもと手を出していた株に失敗した春子は、東京からの帰途、湯河原駅のホームから進行中の列車に身を投げるのだった。

女の園

松竹大船1954年作品

製作……………山本 武
 原作……………阿部 知二
 「人工庭園」より
 脚本・監督……………木下 恵介
 助監督……………川頭 義郎
 撮影……………楠田 浩之
 撮影助手……………荒野 諒一
 美術……………中村 公彦
 音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

五条真弓（舎監）……………高峰三枝子
 出石芳江……………高峰 秀子
 滝田富子……………岸 恵子
 村野明子……………久我 美子
 下田参吉……………田村 高広
 相良義一……………田浦 正巳
 出石正雄……………三木 隆
 その妻……………井川 邦子
 下宿の小母さん……………望月 優子
 校長……………東山千栄子
 学長……………毛利 菊枝
 「鶴賀」の小母さん……………浪花千栄子
 平戸喜平……………金子 信雄
 芳江の父……………松本 克平
 服部文江……………山本 和子
 参吉の母……………岡田 和子
 新聞記者……………末永 功
 教授……………青山万里子
 〃……………原 泉子

14巻（2851米）3月16日封切
 ベスト・テン第2位

＜かいせつ＞

処女作の「花咲く港」以来、木下作品の舞台は田舎に置かれ、純朴な人々を設定することが多かった。そして古めかしい因習や習慣にとらわれている、封建性といったものを時には郷揄し、時にはユーモアで包んで映画化している。しかし、フランスでの長い滞在から帰国した木下の作品では、その第一作「カルメン純情す」での鋭い文明批評を、次作の「日本の悲劇」では家族制の崩壊をも含む大きな社会問題をと、それまでの木下作品には見られなかった、荒々しくシリアスな作風が一挙に吹き出てきた。

良妻賢母の子女教育を旨とする伝統ある名門女子大学。厳しい規則で固められた寮生活は、各人に違和感を抱かすにはおかなかった。しかし誰もそれを口に出して言えない。ある日、一人の女子学生の自殺をきっかけに、学園の民主化運動が次第に広まっていくという物語でも判るように、封建的なものへの鋭いメスが入れられている。じっと耐えている人間像にこよなく愛着を感じている木下にとって、真向からその破壊を試みたと思われるこの作品は、期せずして、丁度この頃から全国的な学園闘争が広まりつつあった、そんな時代を予兆するものとなった。

舎監を演じた高峰三枝子は、戦前からの松竹のトップ女優であり、唯一の木下作品出演であり、高峰秀子は「カルメン故郷に帰る」からの木下組の一員となった。岸恵子は前年からの「君の名は」三部作で押しも押されぬ人気スターとなっており、久我美子は華族出身の女優として東宝の「四つの恋の物語＜初恋＞」（1947・豊田四郎）でデビューした、気品ある若手女優であった。こうした松竹を代表する女優出演の中にあり、大スター阪東妻三郎の長男、田村高広がこの作品でデビューした。「破れ太鼓」の試写の時、恥かしがって来なかった父の替りに来た田村を見た木下が、その時阪妻に俳優になることをすすめたという。（大場）

＜あらすじ＞

京都郊外にある正倫女子大学は、校母大友女史の奉ずる良妻賢母型女子育成を教育の理想とし、徹底した束縛主義で学生に臨んでいた。七つの寮に起居する学生たちは、補導監平戸喜平、寮母五条真弓らの厳しい

干渉を受けていた。姫路の瀬戸物屋の娘で新入生の出石芳江は、3年ほど銀行勤めして入学したせいか、消燈時間の禁を破ってまで勉強しなければ学業について行けず、その上、同郷の青年で東京の大学に学ぶ恋人下田参吉との自由な文通も許されぬ寮生活に苦痛を感じていた。芳江と同室で牧賀出身の滝田富子はテニスの選手だったが、テニス友だちの大学生相良との交際が学校の忌にふれ冬休み前に停学処分を受けた。赤い思想を持つと噂される奈良出身の上級生村野明子は、学校の有力な後援者の子女であるため特別扱いにされていた。冬休中、芳江は父の眼をくぐって参吉と東の間逢うことができた。が、休みが明け、富子の休み中の行動を五条たちが糾弾したことから、明子を先頭に学生たちの自由を求める声は爆発した。かねて亡妻の面影を芳江に見出して彼女に関心を抱いていた平戸は、学校側が騒ぎを起した学生を罰した時、芳江だけを軽い処罰とした。この罰の不均等は学生たちの固結を崩そうとする学校側の策略だった。芳江は学校側の切崩工作の対象となって学生たちの反感を買わなければならなかった。このショックに神経衰弱気味になった芳江は、寮をとびだし一時は東京の下田のもとに身を寄せたが、同僚への責任感に悩んで再び学校に戻り、人気のない夜の教室で自殺した。この事件は校内に激しい波乱を呼び、学校側も互いにそれぞれの立場で激した感情を相手にぶちまけて混乱は一層激しくなっていった。



野菊の如き君なりき

松竹大船1955年作品

製作……………久保 光三
原作……………伊藤左千夫
「野菊の墓」より
脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………大槻 義一
撮影……………楠田 浩之
撮影助手……………荒野 諒一
音楽……………木下 忠司
特殊撮影……………川上 景司

<配 役>

民子……………有田 紀子
政夫……………田中 晋二
老人(政夫)……………笠 智衆
政夫の兄 栄造……………田村 高広
お増……………小林トシ子
政夫の母……………杉村 春子
民子の姉……………雪代 敬子
政夫の嫂 さだ……………山本 和子
民子の祖母……………浦辺 粂子
庄さん……………小林十九二
民子の母……………本橋 和子
父……………高木 信夫
常吉……………渡辺 鉄弥
お仙……………松島 恭子
お浜……………谷 よしの

10巻(2527米) 11月29日封切
ベスト・テン第3位

<かいせつ>

原作は、明治の歌壇で正岡子規に師事して著名な歌人、伊藤左千夫の小説「野菊の墓」である。大分以前に助監督の松山善三がこの原作を木下に見せ、その抒情味豊かな物語が気に入ったため映画化することになったものである。

何十年か振りで故郷を訪れた一老人の追想が、信州の美しい自然を背景に回想形式で展開される。旧家に育った少年と、2つ年上のイトコの少女の淡い恋心が、古い道徳観にしばられる大人達の無理解から、2人は別れ離れになった上、少女は嫁ぎ先で少年の手紙を抱いて死ぬという物語を、木下は回想する部分を全て白地の楕円形のマスクで囲むという大胆な手法をとり、甘美な感傷性と幻想性をいやが上にも盛りこんだの

だった。

ここでも木下は、封建的なものへの批判を描くより、それによって身動きのとれない2人の愛と、じっと耐えて生き、そういう生き方を美しくまとめあげた所に、彼の抒情的世界と詠嘆的作風が頂点に達したものと、一つの完成度を示していると言えるだろう。

少年を演じた田中晋二と、少女を演じた有田紀子は、木下監督が特にこの映画のために起用した無名の新人で、田中は以後木下作品の常連となり、有田は何作品か出演したものの間もなく引退した。木下の俳優の動かし方は、きっちりしたコンテによって演出するのではなく、その場の状況に応じて自由に対処し念入りなりハーサルを繰り返すよりも、自分のイメージをそれとなく俳優からひき出すというもので、それ故に、新人を抜擢しても失敗することはなく、その才能は眼を見張らせるものがある。

木下はロケーションが好きで、自然の中での演出は得意な監督であるが、特にこの作品では、楕円形のボカシをやり、詩情豊かな画面作りを成功させた楠田カメラマンの手腕は見逃がせないだろう。(大場)

<あらすじ>

河の流れに秋の景色が色濃く写っている。渡し舟の客斎藤政夫老人は、船頭に遠く過ぎ去った思い出をしみじみと語るのだった。

この渡し場に程近い村の旧家の次男として政夫は育った。15歳の秋のこと、母が病弱のため近くの町家の娘で、母の姪に当る民子が政夫の家の手伝いに来た。政夫は2つ年上の民子とは幼い頃か

ら仲が良かった。久し振りの再会に政夫は嬉しかったが、それが嫂のさだや作女のお増の口の端にのって、本人同志もいつか稚いながら恋といった淡い気持ちを抱くようになっていった。

祭を明日に控えた日、母のいっつけで山の畑に綿を採りに行った2人は、この時初めて相手の心に恋を感じ合ったが、同時にそれ以来周囲の者に仲を裂かれるようになった。ただ2人が一緒にいるだけで、こそこそ悪口を言われ、2人の清純な気持ちを暗くするばかりであった。古い因習にこり固まっている人々の口はますますうるさくなり、母の言葉で追われるように中学校の寮に入れられた政夫が、冬の休みに帰省してみると、渡し場に迎えてくれるはずの民子の姿がなかった。

お増の口から、民子はさだの中傷から実家へ追い帰されたと聞かされて、政夫は早々に学校へ戻った。

2人の仲を心配した政夫の母や民子の両親のすすめで、民子は政夫へのつる思いを押さえながら他家へ嫁いだ。ただ、民子の祖母だけがふびんに思っていた。

やがて授業中に電報で呼び戻された政夫は、そこで民子の死を知らされた。民子の祖母の話によると、民子は政夫の手紙を抱きしめながら息を引きとったという。政夫の名は一言もいわずに……。

渡し場におり立った斎藤老人は、民子が好きだった野菊の花を摘み、そっと墓前に供えるのだった。



夕やけ雲

松竹大船1956年作品

製作……………久保 光三
脚本……………楠田 芳子
監督……………木下 恵介
撮影……………楠田 浩之
美術……………平高 主計
音楽……………木下 忠司

<配 役>

秋本洋……………田中 晋二
洋一の母 お新……………望月 優子
須藤……………田村 高広
洋一の姉 豊子……………久我 美子
原田喜代……………山田五十鈴
洋一の父 源吉……………東野英治郎
秋本幸造……………日守 新一
喜代の夫 春夫……………中村 伸郎
遠メガネの少女文子……………有田 紀子
菓子屋のおかみさん……………岸 輝子
洋一の姉 和枝……………菊池 典子
雑貨屋のおかみさん……………野辺かほる
喜代の息子 誠二……………大野 良平
医者……………土紀 就一
文子の父……………高木 信夫
土谷……………手代木国男
魚源の客……………本橋 和子
高松 栄子
草香田鶴子

8巻(2125米) 4月17日封切

<かいせつ>

シナリオを書いた楠田芳子は木下恵介の妹であり、木下恵介とずっと一緒に仕事をしているカメラマン楠田浩之の夫人である。木下作品の音楽を一貫して担当している木下忠司も木下恵介の弟であり、珍しい映画兄妹である。木下組は助監督の顔ぶれもほぼまわっており、俳優も木下恵介がまったくの新人から手塩にかけて育成した人が多く起用される。この作品で言えば、田中晋二と有田紀子は前作の「野菊の如き君なりき」でデビューさせた新人であり、田村高広は前々年の「女の園」でデビューさせた新人である。こうして木下恵介の映画は、木下恵介を中心にして気心のよく知りあった仲間間でつくられることが多いが、「夕やけ雲」はその最たるもののひとつ

であろう。

シナリオライターとしての楠田芳子は、前々年、やはり木下恵介の愛弟子である小林正樹監督の「この広い空のどこかに」でデビューし、これは小林監督の出世作といっている佳作であったが、後年の小林監督の力業のような作品とは違って、平凡な商店の家庭の日常生活をさわやかにスケッチ的に描いたホームドラマであった。その後も彼女は、寡作ではあるがホームドラマに専念しており、映画にホームドラマがなくなっただけではテレビのホームドラマの有力なライターのひとりとなっている。

「夕やけ雲」は、魚屋の息子の少年が、店の商売が嫌でしようがないにもかかわらず、父の死で、嫌だなく、後継ぎとして一家の柱になってゆかなければならないという話である。世間のどこにもある平凡な話であり、あまり平凡すぎて映画にはかえって取り上げられることがなかったような話である。しかし当人にとっては深刻な問題であり、そこには平凡な庶民としての親のあとなど継ぎたくないという、現代の日本の若者に一般的に見られる傾向が根深く反映している。その意味では決して個人的な問題ではなく、社会一般の思潮の大きな変動をふまえている。なにげない日常生活を扱っていながら、時代の変動のきしみも痛いほどに写し出すのは木下恵介の映画の重要な特色である。(佐藤)

<あらすじ>

秋本洋一の家は下町の片隅で魚屋を営んでおり、父源吉、母お新、姉豊子、妹和枝らの弟妹7人家族で細々と暮らしている。



洋一は魚屋が嫌い船乗り憧れ、叔父から貰った双眼鏡を手に毎日2階から遠くを眺めていた。姉の豊子は貧乏が嫌いで、恋人の須藤と結婚を約束していたが彼の父が事業に失敗したと聞くと彼から離れた。次いで豊子は新たに金持の五十男との話を家族の反対をよそに一人で進めていた。こうした時源吉は心臓病で倒れた。洋一は父と母の言葉に魚屋になる決心をした。こうした洋一を慰めてくれるのは、双眼鏡に写る少女の姿であった。ある日、洋一と友人の原田は双眼鏡の少女の家を探しあてたが、その少女は痛々しい病身の身で嫁いで行くところだった。洋一の姉豊子は勤務先の課長に親代りになってもらい、五十男の後妻になったが、別れた筈の須藤と箱根で遊んだりする無軌道ぶりを示していた。こうした彼女を探す夫の電話に、病をおして出た父源吉は、崩れるように倒れた。源吉の死後、妹の和枝は大阪の叔父幸造に引き取られていった。原田の母喜代からは、親友の一家が北海道に転任することを知らされ、若い洋一の上には次から次へと厳しい現実の波が打ち寄せてきた。それから4年、洋一は茨の道を雄々しく切り開き、今は小ぎれいな店で母と共に鮮かな手つきで刺身を作っていた。夕やけ雲の下、細々と立つ夕げの煙を前に崖に立つ洋一は、「さようなら、俺の愛していたみんな、遠メガネの少女も、妹も、友だちも、船乗り憧れた青春の夢も」と呟いた。

太陽とバラ

松竹大船1956年作品

企画……………久保 光三
脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………大槻 義一
撮影……………楠田 浩之
撮影助手……………荒野 諒一
美術……………梅田千代夫
音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

長谷川正比呂……………石浜 朗
秋山清……………中村賀津雄
清の母……………沢村 貞子
正比呂の姉 敬子……………久我 美子
清の妹 薫……………有田 紀子
清の姉 洋子……………杉田 弘子
辻長七……………田中 晋二
正比呂の母……………三宅 邦子
〃 父……………北 竜二
桜井……………竜岡 晋
すしやの親爺……………須賀不二夫
〃 女将……………桜 むつ子
左隣のおかみさん……………吉川 満子
〃 親父……………磯野 秋雄
山中次郎……………田村 保
次郎の母……………野辺かほる
工場所長……………奈良 真義
右隣の親父……………小林十九二
〃 おかみさん……………春日 千里
パーのマスター……………諸角啓二郎
別荘の小母さん……………水木 涼子
10巻 (2236米) 11月14日封切
ベスト・テン第9位

＜かいせつ＞

太陽族映画に対する反撥が主な動機となって製作された映画である。太陽族映画とは、前年に芥川賞を受けて注目された石原慎太郎の小説「太陽の季節」の映画化と、そのヒットによる同じ原作者の一連の作品の映画化をさし、市川崑の「処刑の部屋」、中平康の「狂った果実」、堀川弘通の「日蝕の夏」などを含む。とくに古川卓巳監督の「太陽の季節」が、ヨットを乗りまわしたり年上のブルジョワ女と遊びまわったりする学生たちを恰好よく描いてヒットしたことが世論の反撥を買った。また作品的にすぐれていた「処

刑の部屋」が、女子学生に睡眠薬を飲ませて犯すという、いわば新手の非行の手口を描いたことなども、朝日新聞紙上で井沢淳記者が市川崑を攻撃したりして話題になった。太陽族映画は青少年の非行をあおるものではないかという世論は盛り上がり、それというのも映倫が映画業界のヒモつきだからではないか、という議論にもなって、ついにそれまで映連に所属していた映倫が改組されて業界から独立するというにまでなったものである。太陽族映画は、それまでの非行少年映画とは違って、非行を若さのエネルギーの発露として半ば肯定的に描いたところに特色があった。しかしそれは、本質的には金持ち階層の子弟の青春の謳歌であった。金持ちでなければヨットなど乗りまわせるわけがない。金持ちの子弟の非行は世に出れば若気のあやまちとして自慢話になってしまうていどのことで、貧困層の若者のそれのように、やくざにつながったりする深刻さはなく、いわば、いい気なものである。

木下恵介はこの太陽族映画流行のときに、あえて太陽族映画に挑戦するかたちで「太陽とバラ」をつくった。ここに描かれているのは、太陽族にとっては若気の面白い過ちにすぎないことであっても、貧乏人の少年にとっては、一生にかかわる、また家族全体の危機でもある深刻な大問題なのだということである。(佐藤)

＜あらすじ＞

8月も終りの湘南海岸。秋山清は与太者仲間の山中次郎や辻長七と盗み、タカリ、喧嘩とすさんだ青春の日々を送っていた。清の父が戦後間もなく買出して

事故死したのち、母親は不良の清に手をやきながら内職で生計を立て、夜間高校に通う清純な妹薫、幼ない簪ともども厳しい現実と取組んでいた。だが清はついに警察にあげられる始末だった。しかし母の強い意見から、母が家政婦を勤める別荘の長谷川夫妻の尽力で、やがてその工場

で働くことになった。長谷川の長男正比呂は薫の美しさに惹かれて彼女を追い廻す一方、清を自分らの太陽グループに引き入れる。清は工場を休み、給料前借で遊び暮らす。太陽娘の洋子と過して家に戻った時、亡父の仏前で反省をうながされても捨ぜリフを残して飛び出す。たまたま正比呂の指図で喧嘩した清は彼の家に伴われる。家庭に戻ると豹変する彼に呆れるが、何不自由な生活ぶりに反撥を感じ出す。翌朝正比呂の両親が清に会いたいと言ってくる。清の母の手紙の前に優しく話す夫妻。正比呂のため身を誤った姉の敬子も清には親切であった。清が去ったのち敬子は今迄の事をすべて母親に語り、2人で正比呂の後を追う。一方別荘へ向う清は、途中で会った母親の言葉に耳を貸さず「死んでしまえ」とまで言われるが、そのままダイスに耽る正比呂らのもとへはしる。あてつけな妹薫誘惑の話、そして実姉への暴言、怒りに燃えた清は遂に正比呂を殴殺し、手を血に染めたまま家に戻ってくる。「あんな奴は死んだ方がいいんだ」と言うや走り去った清は、半狂乱の母親や警官を後にそのまま蕩進する列車に飛びこんで行った。



喜びも悲しみも幾歳月

松竹大船1957年作品

製作……………小倉 武志
原作・脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………大槻 義一
撮影……………楠田 浩之
色彩技術……………成島東一郎
特殊撮影……………川上 景司
美術……………伊藤 薫朔
〃……………梅田千代夫
音楽……………木下 忠司

主題歌「喜びも悲しみも幾歳月」
作詞・曲 木下忠司
唄 若山 彰

「灯を抱く人たち」
作詞 仙宅千恵子
作曲 木下 忠司
唄 関 真紀子

＜配 役＞

有沢きよ子……………高峰 秀子
夫 四郎……………佐田 啓二
息子 光太郎……………中村賀津雄
娘 雪野……………有沢 正子
藤井たつ子……………桂木 洋子
野津……………田村 高広
妻 真砂子……………伊藤 弘子
金牧……………三井 弘次
妻……………桜 むつ子
糸子……………井川 邦子
名取……………北 龍二
夫人……………夏川 静江
息子 進吾……………仲谷 昇
石狩灯台長 木村……………明石 潮
郵便局長……………坂本 武
観音崎灯台長 手塚……………小林十九二
佐渡灯台長 大場……………夏川大二郎
水出……………田中 晋二
鈴木……………三木 隆
カラー 18巻(4448米) 10月1日封切
ベスト・テン第3位

＜かいせつ＞

木下はこの作品の前に、深沢七郎のベストセラー「橋山節考」の映画化を希望していたが、内容の暗さと大胆な試みを危惧した会社側は、その企画に反対の色を示した。そして一本、興行的ヒットをする作品をと

「二十四の瞳」の線を狙って作ったのが本作品である。

当時、テレビの普及率が次第に増えてきて、映画界としても何らかの対抗手段を考慮しなければならず、既にカラー映画を成功させた松竹にとって、画面の大型化が計画されたのだった。その魁となったのが東映の「鳳城の花嫁」(57・松田定次)だったが、松竹もグランドスコープ作品としてこの7月「抱かれた花嫁」(番匠義彰)を完成させ、大型化時代に突入していった。また一方では、大作一本立興行への道も考えられていた時期でもあった。

木下は、日本人好みの感傷性と、波瀾万丈の話をうまくミックスさせた脚本で、北は北海道納沙布岬から南は五島列島の女島まで、全国15ヶ所に縦断ロケを敢行し、ディスクパー・ジャパンの映画の魁となった。また、ロケ地とのタイアップとその観客を動員するという、製作と興行上の面からみても、かなりの効果を持った結果となり、木下忠司作曲の主題歌のメロディーにのって、それこそ日本全土を席捲する大ヒットとなった。

主演の佐田啓二と高峰秀子は、25年の歳月に渡る夫婦を見事に演じきり、中村賀津雄は前作「太陽とバラ」に引き続いての木下作品であり、有沢正子はこの映画でデビューした木下好みの新人である。(大場)

＜あらすじ＞

上海事件の昭和7年、新婚早々の有沢四郎ときよ子は観音崎灯台に赴任した。日本が国際連盟を脱退した年、四郎たちは雪の石狩灯台へ転任になった。そこで長女雪野が生まれた。2年後には長男光太郎が誕生し

た。昭和12年には波風荒い五島列島の女島灯台に転勤し、ともすると夫婦喧嘩をすることが多くなり、きよ子は家出しようと思っても、便船を一週間も待たねばならぬ始末であった。気さくな若い灯台員野津は、そんな灯台にいながらいつも明るく、台長の娘真砂子に恋していたが、真砂子は灯台員の妻にはならないといって野津を困らせた。昭和16年、太平洋戦争が始まった年に有沢一家は佐渡の弾崎灯台に移り、有沢も次席の地位にあった。B29が本土に爆音を轟かす昭和20年、有沢たちは御前崎灯台に移り、東京から疎開してきた名取夫人と知り合った。間もなく野津と、今は彼の良き妻となっている真砂子が赴任してきた。

戦争が終わって、野津夫婦は他の灯台へ転勤になった。それから5年、有沢たちは三重県安乗崎に移った。灯台記念日に両親が表彰された後、立派に成長した雪野と光太郎は心のこもった贈物をした。やがて雪野は名取家に招かれて東京へ勉強に出ていった。昭和28年に風光明媚な瀬戸内海の本島灯台に移った。ところが大学入試に失敗して遊び歩いていた光太郎は、不良と喧嘩して死ぬという不幸に見舞われた。思い出の御前崎灯台の台長になって赴任する途中、東京にいる雪野と名取家の長男進吾との結婚話が持ち出された。やがて2人が結婚して任地のカイロに向う日めつきり老いた四郎ときよ子は、2人のために灯をともした。



風 前 の 灯

松竹大船1957年作品

製作……………桑田良太郎
脚本・監督……………木下 恵介
監督助手……………大槻 義一
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………梅田千代夫
音 楽……………木下 忠司

＜配 役＞

佐藤百合子……………高峰 秀子
夫 金重……………佐田 啓二
母 てつ……………田村 秋子
てつの甥 赤間……………南原 伸二
百合子の妹 さくら……………小林トシ子
田舎の青年 幸平……………田中 晋二
下宿人 美代子……………伊藤 弘子
百合子の妹 あやめ……………有沢 正子
不良A……………小瀬 朗
新太郎……………小野 良
畳屋……………サトウ・サブロー
百合子の子 和夫……………五月女殊久
あやめの友人 鈴木……………佐藤 芳秀
不良B……………佐山 彰二
肴屋……………春風亭板葉
美代子の友人 北村……………里見 孝二

8巻(2158米)12月1日封切
＜かいせつ＞

大作「喜びも悲しみも幾歳月」をヒットさせたあと、ある人が、あれだけ金をかければいい映画ができるのは当たり前だ、と言っているのを見て、なかに小品だっていい作品はつくれるんだ、とたった20日で撮ってみせた作品だそうである。このあとまた、大作であり力作である「檜山節考」にとりかかるので、「風前の灯」は本格的な仕事の合間のちょっとしたお遊びという性格のものであろう。したがって、これは木下恵介にとって代表作でも本領を発揮した作品でもないが、お遊びの良さがあるもので、テーマを高くかかげた作品には見られない、くつろいだ冗談の愉しさがここにはある。ただし、素材としては前から温めていたものさそうである。

木下恵介の代表作と言われている作品には、たいてい、心の美しい、純粋な、素直な、愛情ゆたかな人々

がゆったりと描き出されているわけであるが、この作品では、それをみんな正反対にして、ケチで、ひねくられて、こせこせした連中ばかりを登場させている。しかもそれを木下作品で美しい純粋な人物たちを演じてきた俳優たちに演技させ、おまけに、つくったばかりの“感動の名作”「喜びも悲しみも幾歳月」のテーマ音楽までギャグに転用している。

こんなふうには、まるで自分の作風そのものをひっくり返してみせようような仕事というのは、あるいは過剰な自信の現れというものかもしれないが、名声の枠の中に安住してしまわないための、一種の精神の体操のようなものであるかもしれない。人間を善意の眼で見ることを作風の基本にしているからといって、善意の眼でしか見れないのでは仕方がないので、そういう固定化から自分を自由にするために、こういう作品をつくってみたいなるのかもしれない。あるいは、「喜びも悲しみも幾歳月」のように、時間的にも空間的にも拡散してゆく内容の作品を手がけたあとであるからこそ、逆に、せまい場所と短い時間の中にたくさんの登場人物をあわただしく出入りさせる作品をつくってみたいかっただのかもしれない。木下恵介は、こうして自分の技術を豊かにしてゆくことを喜びとする監督なのである。(佐藤)

＜あらすじ＞

田舎から上京してきた幸平は、新宿駅の広場で無一文の空腹を抱えて立っていた時、郊外の一軒家佐藤家に強盗にはいる不良たちに無理矢理に誘われた。不良に狙われているのも知らず佐藤家では全員が欲の皮をつっぱらせた生

活を今日もするのだ。佐藤家の主のてつが貯めこんだ小金を、息子の金重、百合子夫婦が狙っている。大学出の金重は下駄屋の店員をしており、懸賞の一等で5、6万円もするカメラに当選したが強欲なてつには黙っていた。同居人の美代子は喫茶店の給仕で大学生の北村と良い仲だが、アイロンで畳を焦し、てつと大喧嘩をして部屋を出ることになった。百合子の妹さくらは年下の夫とアパート暮らしをしていたが、金重の当選を知り、金を目当てにやってきた。もう一人の妹あやめも現れたが、百合子から美代子の部屋が空いたことを知らされ、男友だちの大学生鈴木を移らせるつもりだ。てつの甥で前科6犯のピストル強盗赤間も戦災で父母を亡くした際てつに横領されたこの家を奪い返しにやってきた。外では不良たちが、これらの人の出入りに、何度も忍び入りかけて失敗し、幸平はやる気をなくしていた。一度は部屋を出た美代子まで戻ってきて鈴木と部屋の奪い合いから喧嘩を始め、やっと治まった時、北村がきて焼餅から鈴木と喧嘩を始めた。さくらは百合子が戸棚においた20円を盗んで百合子と喧嘩して帰り、そのことで百合子はてつとも争った。夕刻まで居坐っていた赤間が百合子夫婦を脅し、てつの金を奪おうとした。彼のピストルの最後の一発を金重の子供が暴発させ、駆けつけてきた警官と赤間が展開する大乱闘を見守る弥次馬の中に、例の不良たちも混っていた。夜、幸平は新宿の交番で涙を拭いていた。



檜 山 節 考

松竹大船1958年作品

製作……………小堀 正治
原作……………深沢 七郎
脚本・監督……………木下 恵介
監督助手……………大槻 義一
撮 影……………楠田 浩之
撮影助手……………赤松 隆司
……………成島東一郎
美術……………伊藤 熹朔
美術助手……………梅田千代夫
浄瑠璃作曲……………野沢松之輔
長唄作曲……………杵屋六左衛門
音楽参与……………遠藤 為春

＜配 役＞

おりん……………田中 絹代
息子 辰平……………高橋 貞二
妻 玉さん……………望月 優子
辰平の子 伊与吉……………市川 団子
又さん……………宮口 精二
息子……………伊藤雄之助
飛脚……………東野英治郎
照さん……………三津田 健
伊与吉の妻 松さん……………小笠原慶子
村 人……………織田 政雄
……………西村 晃
雨 屋……………鬼 笑介
焼 松……………高木 信夫
村 人……………小林十九二
……………末永 功
……………本橋 和子
辰平の子……………五月女殊久
……………服部 勝幸
口上役……………吉田 兵次
C W 11巻(2677米)6月1日封切
ベスト・テン第1位

＜かいせつ＞

原作は、1956年の中央公論新人小説賞を受賞した深沢七郎の同名小説で、当時の大ベストセラーとなったものである。長野県は国鉄篠ノ井線に姥捨という駅があり、食糧の乏しいこの地方では少しでも食物を節約するために、ある年令まで達した老人を山に捨てたという伝説にもとづき、深沢は一片の感傷性をこめずに客観的に叙述した作品である。

元来が伝説であるから、檜山という地名も架空のものであり、時代も

いつの頃かはっきりしないが、昔から切実な問題であった食糧事情の窮迫と、それに伴う非人間的な因習に対する盲目的な服従という題材を扱うにあたって、「古い日本の伝統的な芸術スタイルを基礎に、独特の様式や色彩を追求しようとした最初の作品です」と、木下が述べするように歌舞伎もどきの思いきった様式的演出を試みた。“東西々々、このところごろんに入れまするは、本朝姥捨の伝説より檜山節考……”という黒子の口上に始まるこの映画は、美術界の大御所伊藤熹朔の協力を得て、山も谷も森も全てセットという大胆さで、歌舞伎舞台の早変りを見えるような舞台転換による省略や、人工的效果を狙った色彩などで、この真偽の程を超越した肌粟を生じせしめる伝説の世界へ、見る者を完全に引きずりこむことに成功した。

主役の老婆を演じた田中絹代は、丈夫な歯を恥じて石臼でその歯を折ってしまうという場面のため、何本かの前歯を抜いてしまうという熱意振りで、それを含めての迫真的演技は数々の演技賞を獲得し、本人をしてこれで引退してもいいと思った程であると言わしめている。

この映画化に当り、余りにも大胆な試みと、膨大な製作費とで会社首脳部は首をたてにふらなかつたが、その前年に「喜びも悲しみも幾歳月」という大ヒット作をものにして、や

っと本作品の映画化に着手したという。この2作品の間に「風前の灯」という20日間位で撮り上げた小品もあり、木下のアイデアとテクニクの自由奔放性を遺憾なく発揮したのだった。とにかく、当時の日本映画界が絶頂期にあ

った頃であり、今日の映画界では考えられない程の贅をこらした作品となった。(大場)

＜あらすじ＞

山奥の日蔭の村に住む69歳のおりんは、亭主と死別したあと、これも去年嫁に死なれた息子の辰平と孫のけさ吉の世話をしながら、息子の後妻を探すかわら、来年の檜山参りの支度に余念がない。檜山祭りの日に隣村から辰平の嫁玉さんが来た。おりんがこれで安心して檜山へ行けると思った時、けさ吉の子を妊っている松やんがごろがりこんだ。おりんは子供たちの歌にまでうたわっている程丈夫な歯を石臼にぶつけて欠いて、檜山行きの冬を待った。雨屋の亭主が近所に豆泥棒に入り、捕って一家12人は村から消された。おりんはねずみっ子(曾孫)が生まれるまでに檜山へ行かねばと決心し、あと4日で正月という日、お山参りの振舞いをしてお山参りの作法を教わりしぶり勝ちな辰平をせかせて檜山へ向った。辰平に背負われたおりんは一語も発せず、顔に死相が現われたおりんは独り岩陰に坐し、山を早くおりると辰平に合図した。涙ながら山道に戻る辰平は、お山参りを渋っていた隣家の銭屋の又やんを、作が崖から突き落とそうとしているのを見てとめに入ったが、銭屋の2人とも谷底へ転落してしまった。堪まらなくなった辰平は禁を犯して山頂へ駆け登ったが、念仏を称えるおりんに帰れとさとされた。——村に戻りついた辰平は玉さんと並んで檜山に向って合掌するのだった。



この天の虹

松竹大船1958年作品

製作……………小堀 正治
脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………大槻 義一
"……………上村 力
撮影……………楠田 浩之
撮影助手……………赤松 隆司
"……………成島東一郎
美術……………梅田千代夫
音楽……………木下 忠司
謡曲指導……………長谷川雅山

＜配 役＞

相良修……………高橋 貞二
帯田千恵……………久我 美子
町村四郎……………田村 高広
帯田京一郎……………大木 実
影山フミ……………田中 絹代
直司……………笠 智衆
稔……………小坂 一也
園部博子……………高千穂ひづる
須田菊夫……………川津 佑介
前川久子……………小林トシ子
平野八重子……………伊藤 弘子
前川誠二……………須賀不二夫
林……………井川 邦子
帯田良平……………織田 政雄
相良の母……………浦辺 粂子
帯田たつ江……………岡村 文子
高田源一……………林家 珍平
岡田部長……………細川 俊夫
C W 11巻(2900米)10月28日封切
＜かいせつ＞

九州の八幡製鉄所（今日の新日本製鉄）とその社員住宅の人々を描いた社会性のあるホームドラマである。この社員住宅街の住人は当然のことながらすべて八幡製鉄の社員であり、その身分によって住む地域や家の間取りが格式づけられている。この会社の正社員であれば肩身が広く、臨時雇であれば肩身がせまい。会社一家の気風も根強く、この会社に就職できればゆったりとおちついた気持ちでいられるが、下請けの企業にしか就職できなければ製鉄所の正社員がうらやましくてならない。ホームドラマの名手であり、庶民の家族感情を描くことの名人である木下

恵介は、この作品で、この会社に勤める人々の個々の家庭を描くと同時に、家族主義をかかげる日本の大企業の巨大疑似家族の気質をも解明しようとしている。個々の家庭のなかにある、甘えたり、すねたり、ひねくれたり、という感情が、個々の家庭の枠をこえた、個人対会社の心情のなかにもあることがこの作品では興味ぶかく描き出されている。会社を自分の家庭のように感じ、そこに温く受け容れられない者がひねくれるのを、もつともだと思ひ、あわれむ。これはまさしく、企業大家族主義のなかにおける人間の描写としてユニークなものであろう。

この作品がつくられた1958年は、日本が高度成長経済の時代に入る直前の時期である。日本人は一般に、自分たちは貧しい、という意識を持ち、だから肩をすり合わせるようにして助け合うべきだ、と考えていた。「この天の虹」という題は、製鉄所のシンボルとも言うべき溶鉱炉の巨大な煙突群から出る多様な煙を比喩的にそう言っているのであるが、今日でなら、この煙は公害のシンボルとして否定的にしか見られないであろう。しかし当時は、まだ公害問題は知識としても誰も知っておらず、この壮大な煙こそが日本の産業をなんとか復興させてくれる希望のしるしに見えたものなのである。

（佐藤）

＜あらすじ＞

東洋最大の八幡製鉄所では今日も鉄と人間が火花を散らして戦っている。縦横に走る構内鉄道、その運輸部ポイント返しの若い作業員須田菊夫は、溶鉱炉の組長影山の社員アパートに下宿している。或る日影山の

一人息子稔が戻ってきた。稔は優秀な学生だったが八幡製鉄所の体格規定に外れて入社できず、それ以来ヤケになり会社をやめて家に戻ってきたのだ。菊夫が兄と慕う溶鉱炉工場の棒心相良は、親和会で秘書課の事務員帯田千恵と知りあい心を惹かれたので、田舎から母を呼び、影山を介して帯田家に交渉してもらった。帯田家では妻のたつ江が作業員は夫と息子で沢山だと反対した。息子の京一郎はストリップ工場の作業員で、病院の看護婦平賀八重子という恋人がおり、相良に好意をもっていた。しかし千恵には建築技師の町村という恋人がおり、八重子の叔父で渉外課勤務の前川の家に下宿していた。前川の妻久子もいつしか町村に思いを寄せていた。菊夫は音楽会に来た町村と千恵の睦い様子を見て不安だった。その頃、影山の家に千恵の母が相良との縁談を断りにきた。相良は失望し、それを聞いた菊夫は憤然としてたつ江に談判しに出かけたが、冷たく一蹴された。翌日、千恵は町村のブラジル派遣と久子との仲が怪しいという噂を聞いた。同じ頃、町村は園部部長から姪の博子との見合を頼まれた。怪我をした京一郎を見舞った帰り、千恵は酔った菊夫と会い、相良が作業員だから断ったのかと詰問された。千恵は相良が作業員だからでなくすでに町村がいたから断ったのだと真意を話した。千恵は相良の人柄に好意を持ったものの町村からの求婚に応じずてブラジルに行く決心をかためた。



風

花

松竹大船1959年作品

製作……………小堀 正治
脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………大槻 義一
撮影……………楠田 浩之
撮影助手……………赤松 隆司
"……………成島東一郎
美術……………梅田千代夫
音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

春子……………岸 恵子
乾幸子……………有馬 稲子
名倉さくら……………久我 美子
春子の息子 捨雄……………川津 佑介
その少年時代……………川頭頭一郎
さくらの少女時代……………和泉 雅子
さくらの母 トミ……………東山千栄子
父 強之進……………永田 靖
名倉家下僕 弥吉……………笠 智衆
名倉家長男 勝之……………細川 俊夫
その妻 たつ子……………井川 邦子
名倉家次男 英雄……………川金 正直
踊りの師匠……………花柳 秀

9巻(2134米)1月3日封切

＜かいせつ＞

過去と現在を、ディゾルヴ（オーバーラップ）などで囲い込むことなく、直接カットでつなぎ、しかもそれをひんぱんに行うという斬新なテクニックを使った野心的な作品である。その後こういうやり方は、フランスのアラン・レネなどが極端なやり方でやるようになったので必ずしも珍らしくはなくなったが、当時としてはひじょうに新しいテクニックだった。以前は回想シーンというと、いちいち、思い出にふける人物の大写しにディゾルヴして過去になり、再びおなじようにして現在の思い出にふける人物の顔にもどる、といった手続きがとられていたものである。木下恵介は「野菊の如き君なりき」では、過去のシーンをわざわざ楕円形の枠で囲って、それが思い出という気分になれに濡れたものであることをきわだたせていたが、この「風花」では逆に、過去と現在をおなじに扱って、意識の流れのなか

では両者は等しいことを鮮やかに示している。

そもそも木下恵介の作品では、長い年月を扱う年代記的なストーリーが多いにもかかわらず、その年月が、発展や変化であることは少ない。「野菊の如き君なりき」にしても、遠い昔の初恋を回想する老人は、回想の中の少年とおなじ純真な心のままのように思われるし、「二十四の瞳」の大石先生は、新任の先生だったころと、20年後に復職したときと、容姿は変わっていても、心は少しも変りがない。「喜びも悲しみも幾歳月」の夫婦の愛情もそうである。木下恵介にとっては、年月によって変化してゆく容姿を示すことは、むしろ、それにもかかわらず変化しないものをきわだたせるためにこそ必要なのであろう。変化しないものというのは、心であり、願いであり、愛である。もちろん木下作品にも、年月による心の変化を扱った「惜春鳥」や「永遠の人」のような作品もあるが、それらも、じつは、心は変わってほしくないという強い願いのうえに成り立っているから意味があるわけである。過去と現在を等質に扱う「風花」のようなテクニックを生み出したのも、木下恵介のそういう歳月の観方と深い結びつきがあるのではなからうか。（佐藤）

＜あらすじ＞

ここ信州善光寺平の旧家名倉家で

は、娘さくらの結婚のため車に分乗して出発して行った。見送っていた春子は息子の捨雄の姿が見えないのに気づき、胸さわぎを覚えて川辺へ向って駆けた。捨雄が深みに向かって進むのを見て夢中で追いつがった。——18年前、小作

人の娘春子が17歳の頃、地主の次男英雄と抱き合って飛びこんだのもこの川だった。この許されぬ恋の決算は英雄が死んで彼女だけが生き残ってしまった。怒った英雄の父は骨壺を川に叩きつけ、春子の父は自殺した。身重の春子は周囲から白眼視されて辛い日々を送った。外聞を気にした名倉家も、下男の弥吉の熱心な口利きで彼女を引きとって捨雄が生まれた。名倉家の人々は事ある毎につらくあつた。死んだ英雄の兄夫婦には、一人娘で捨雄より七つ年上のさくらがいた。彼女だけが捨雄を可愛がり、いつか彼も淡い恋心を抱くようになっていた。その頃さくらの結婚話が進んでいた。ある日女学校時代の親友乾幸子がさくらを訪れた。彼女は卒業するとすぐ東京へ出た。それをさくらはどんなに羨ましく思った事だろう。幸子は画家と結婚して貧乏にしていた。しかし愛する人と一緒ならばどんな困難にも勝ると言い切る幸子の言葉に、さくらは自分の今の気持ちがぐらつくのを覚えた。彼女の帰った後今までの虚ろな生活を救っていたのは、捨雄との清らかな愛情だったのではないかと感じ始めた。そしてその思い出だけを大切に胸にしまって、新しい人生へ出発しようと決意した。結婚前のある夜、2人は家を抜け出して川辺で会った。2人の思い出にさくらは舞扇を捨雄に渡した。——必死の母に呼び止められた捨雄の手に舞扇があった。息子の悲しみが痛い程解る春子は、やっと名倉の家を出る決心をした。



惜 春 鳥

松竹大船1959年作品

製作……………小出孝、脇田茂
脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………大槻 義一
撮影……………楠田 浩之
撮影助手……………赤松 隆司
"……………成島東一郎
美術……………梅田千代夫
音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

牧田英太郎……………佐田 啓二
芸者 みどり……………有馬 稲子
牧田の甥 康生……………津川 雅彦
手代木浩三……………石浜 朗
馬杉彰……………山本 豊三
峯村卓也……………小坂 一也
岩垣直治……………川津 佑介
桃沢蓉子……………十朱 幸代
卓也の母……………清川 虹子
菊太郎……………桜 むつ子
康生の母……………藤間 紫
彰の父……………宮口 精二
桃沢たね……………岸 輝子
鬼塚平三郎……………永田 靖
彰の母……………岡田 和子
浩三の兄……………末永 功
浩三の父……………笠 智衆
桃沢悠吉……………伴 淳三郎
C W 7巻(2799米)4月28日封切
＜かいせつ＞

木下恵介は新人の育成がうまく、全く演技を知らないズブの素人の若者を演出するのに妙を得ている。これは師匠の島津保次郎ゆずりの美質で、なるべくうまい俳優だけを使おうとした溝口健二や小津安二郎とは対照的な行き方である。もちろん島津保次郎も木下恵介も多くの名優や大スタアを使ったが、素人のような新人には、また、ベテランには求め難いナイーヴな自然なものがあり得る。ただ、カメラの前ではどうしてもコチコチになってしまいやすい新人から、ナイーヴなものをひき出すことは至難で、たんに厳格な熱心な演技指導だけでは効果はあがらない。その点、島津保次郎や木下恵介は、撮影現場に終始なごやかな気分

をただよわせることも演出のうちに含み、俳優たちをいたずらに緊張させないだけでなく、新人でも自然な動きに見えるアクションをいちいち具体的に指示することの名人である。また、あらかじめ予定した演出プランをカメラワークのなかに強引に俳優の演技をあてはめてゆくというのをやらす、現場の俳優のコンディションを尊重して、それをいちばん無理なく見せるように、俳優の動きやカメラの位置をきめてゆく。こうして新人に無理なく映画演技を呼吸させていって、自分のいちばんいいフィーリングを保たせるのである。

こうして木下門下からは多くの有望な新人が現れ、佐田啓二や三国連太郎や川津佑介のように、木下作品以外にも大きくはばたいて行ったスタアが少なくない。しかし、また、主として木下作品で印象的で、それ以外にはあまり目ぼしい仕事のない俳優たちもいる。石浜朗、田浦正巳、田中晋二、小林トシ子、桂木洋子、有田紀子などである。木下恵介の独自の人間像の世界がそこにあるのだろう。こういう新人育成のうまさから、木下恵介門下の若い新人俳優たちは木下学校などと呼ばれた。「惜春鳥」は、言うなれば1959年における木下学校の勢揃いのようでもある作品である。津川雅彦などは俳優家族の出身で若くしてすでに自分のスタイルを持っていたが、石浜朗、山本豊三、小坂一也、川津佑介などは、まったく木下恵介の自家薬籠中の新人たちとして巧みにナイーヴな情感をひき出されていた。(佐藤)

＜あらすじ＞

会津の飯盛山、白虎隊の墓前で会

津塗りの下職をやっているビッコの馬杉彰の吟ずる＜少年白虎隊＞の詩にあわせて、大滝旅館の息子峯村卓也、工場で働く手代木浩三、サロンXの息子牧田康生、アルバイトをしながら東京の大学に通っている岩垣直治の4人が剣舞を舞っていた。岩垣の帰郷を機会に久しぶりに旧交を温める5人だが、彼らの胸には現在の境遇の変化からきた感情の食違いが複雑に流れていた。岩垣は出資者鬼塚の家の中と変なことになって追出されてきたのであり、それを手代木は冷たく責め、馬杉は生一本にかばっていた。康生の家にも東京から叔父の英太郎が転りこんできていた。彼は土地の芸者みどりと墮落ちしたが、みどりは芸者屋の女将に連れ戻され、彼自身は胸を患っていた。康生の母米子は質屋の桃沢悠吉の妾で英太郎にいい顔をしなかったが、康生は英太郎が好きで、近く鬼塚の妾になる身のみどりに再び会わせてやりたいと思った。桃沢家では悠吉の妻たねの姪で養女にしていた蓉子に手代木を婿養子と迎える話が鬼塚の肝入りで持上った。ところが蓉子は康生を慕っており、康生は本妻と妾の子といったお互いの関係から蓉子を諦めていた。手代木は蓉子と見合する前に、友だちとして康生に一言断りに来たが康生は是認するほかなかった。見合いの日蓉子は康生が好きだと席を立ったあと、岩垣が詐欺の共犯で追われていると鬼塚に電話が入り、鬼塚は岩垣の処置を手代木ら4人に任せたが、4人は岩垣を逃そうとした……。



今日もまたかくてありなん

松竹大船1959年作品

製作……………細谷 辰雄
脚本・監督……………木下 恵介
監督助手……………大槻 義一
撮影……………楠田 浩之
撮影助手……………赤松 隆司
"……………成島東一郎
美術……………梅田千代夫
音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

佐藤正一……………高橋 貞二
妻 保子……………久我 美子
息子 一雄……………中村勘九郎
竹村周助……………中村勘三郎
森哲生……………田村 高広
森五郎……………小坂 一也
竹村とも江……………藤間 紫
娘 葉子……………加藤千恵子
男A……………三井 弘次
専務……………佐野 周二
赤田健三……………三国連太郎
ミミ……………杉田 弘子
別の女……………瞳 麗子
森春子……………小林トシ子
観翠楼の女中……………桜 むつ子
保子の母……………夏川 静江
男B……………田中 晋二

5巻(2017米) 9月27日封切
＜かいせつ＞

歌舞伎俳優の中村勘三郎のスケジュールがあいていて、一本映画の仕事をしたという希望があり、とくに木下作品に出たいと言っている、ということからはじまった企画だそうである。阪東妻三郎と木下恵介、という組み合わせから「破れ太鼓」が生まれたのとおなじケースであろう。中村勘三郎だからといって時代劇にはせず、また、とくに芝居がかったものにもしないで、現代の人間生活について静かに問いかけものになった。この作品について木下恵介は、「キネマ旬報」の「自作を語る」でつぎのように述べている。

「どこが悪いというわけではないのに、何かあじけない人間同士の結びつきがあるでしょう。それを見てみたかった。暗い映画だが、この

暗さを真剣になって追求して、そこから明るさを求めよう。日本人はたいてい、いいかげんところで妥協し、暗さを忘れ、満足している。そのために政治的な感覚も少しも進歩しない。トコトンまで君は幸福なのかと問いかけて、人生の暗さを知ってもらいたかった。そして、その暗さの中で絶望せず人生の希望を一生懸命追いつづけてもらいたい。これがぼくの製作意図です」と。

昭和初期に松竹蒲田撮影所で確立された芸術的な現代ものの一ジャンルに小市民映画と呼ばれるものがある。島津保次郎、五所平之助、小津安二郎などによってうちたてられたもので、当時の小市民の、貧しさ、生活の土台の弱さ、卑屈になりやすい傾向、そして、そのせめてもの救いとしての家庭をしみじみと描いたものである。「今日もまたかくてありなん」は、木下恵介が、かつておなじ撮影所の先輩たちがたんねんに描きあげたその伝統を引き継ぎながら、さらにそれを発展させようとした作品と言えるだろう。一見平凡無事そうな小市民生活の悲哀の表現をひきついで作品である。単調な日々。ささやかな希望と絶望。しかしそれでも、青春時代を苛烈な戦争のなかで過した世代はそれで満足しなければならないと思っている。そのいっぽう、この沈滞した無気力な貧しい平和に対する云いようのない焦

だたしさも人々の心の中にうごめきは始めている。これは安保闘争の前年につくられた映画なのである。(佐藤)

＜あらすじ＞

湘南の海の近くの小住宅に住む佐藤正一は、東京の会社に勤める安サ

ラリーマンで、妻の保子は息子の一雄と家事に忙しい。家の借金返済の為もあり、会社の部長に月6万円で避暑用に家を貸すことにした正一は東京の同僚のアパートに転りこみ、保子は子供を連れて軽井沢の実家に帰った。雑貨屋の実家には母のほかはタクシー運転手の弟哲生、働き者の春子夫妻とその子、小諸の町工場勤めの弟で真面目な五郎たちが暮している。五郎は材木屋の娘紀子に淡い恋を感じた。流れこみやぐさ赤田の子分どもが紀子とその友人たちを脅し殴りつける事件が起きた。1年ほど前から材木屋の離れに幼い娘葉子と住んでいる中老の男周助は、事件を目撃しヤクザへの憤りを保子に洩らす。東京からやってきた佐藤は、北軽井沢に避暑中の専務夫人を訪れ麻雀のお相手をつとめ、保子も同行したが会社本位の夫が不満だった。周助は元陸大出の軍人で、戦争で人間を殺した罪を感じ、葉子だけを頼りに旅館女中の妻とも江の仕送り細々と暮しているが、恩給さえ断ったのでとも江とは名ばかりの夫婦である。葉子が疫痢にかかり手当の甲斐なく死亡した時、佐藤が麻雀の相手にやってきたが、保子は同道せず周助を訪ね、端座した周助が見つけている短刀を取りあげて持ち帰った。親しくなった紀子と五郎が赤田の子分に襲われ負傷した五郎を見舞って帰宅した保子は、夫に預けた短刀を周助が持ちだしたと聞き、雨の中を別荘にかけつけると、赤田は短刀で刺され、周助は銃弾で撃たれたまま死闘を続けていた。



春の夢

松竹大船1960年作品

製作……………細谷 辰雄
脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………大槻 義一
撮影……………楠田 浩之
撮影助手……………赤松 隆司
〃……………成島東一郎
美術……………梅田千代夫
音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

奥平千鶴子……………岡田茉莉子
矢杉和子……………久我 美子
奥平庄兵衛……………小沢栄太郎
花村医師……………佐野 周二
渥美信一郎……………笠 智衆
八重……………荒木 道子
奥平多美子……………丹阿弥谷津子
奥平の祖母……………東山千栄子
ヨッちゃん……………山本 豊三
奥平守……………川津 祐介
女中 梅子……………十朱 幸代
江間……………森 美樹
行男……………小坂 一也
お幸……………賀原 夏子
加藤栄一……………田中 晋二
春子……………藤 美恵
竹内……………織田 政雄
女中 君子……………中村メイコ
専務……………十朱 久雄
てつ……………菅井 きん
常務……………小笠原章二郎
源吉……………日野 道夫
ミネ……………中村美代子
山田……………稲葉 義男
行男の母……………野辺かほる
C W 8巻(2826米)1月3日封切
＜かいせつ＞

松竹時代の木下恵介のカメラをいつも担当している楠田浩之は、木下恵介が撮影所のカメラ助手に入ってから一年ほどしてからおなじカメラ助手として入所してきた人である。「僕も苦労してたときでしょう。こんないやな社会はないとおもっていると、坊っちゃんみたいなのがはいてくると可哀そうになっちゃう。これがまたおなじように苦労をして、いつカメラマンになれるか

わからないのに、悪いことは覚えるし、もまれるのかとおもうと。だから第一回に僕が監督するときには君のカメラで廻そうねと約束していたのです」と木下恵介は語っている。スタッフを選ぶのに、人間的に好きになれる人ということが大きな条件になっていることがよく分る。撮影は楽しくすすめなければならない、艱難辛苦してやるというのには反対だ、というのも木下恵介の信条のひとつで、そのためにも、スタッフや俳優は気の合った人々でなければならぬのであろう。そして、その人間的な好みは作品の発想にもかかわっているはずである。下司つぼく野卑な人間、粗暴な人間への嫌悪は全作品に一貫していると言っているであろう。

「春の夢」は木下恵介としては軽い作品であるが、いかにも楽しく撮ったと思われるものである。とくに色彩効果には工夫をこらして、徹底的に人工的な世界をつくり出している。人工的な色彩といえば、前に「櫛山節考」では歌舞伎の舞台のような効果をねらったり、あとの「笛吹川」では部分着色という破天荒な試みをしたり、さまざまな試みをしているが、「春の夢」では、文字どおり夢のようなソフトな色彩を試みた。木下＝楠田のコンビは、一方では「日本の悲劇」や「太陽とバラ」のように、甘さのまったくない、乾いたリアリズムに徹した映像をねらった作品もあり、自分の得意の方向を限定せず、一作ごとに新しいやり方を試みる大胆さは木下作品のたのしみのひとつである。(佐藤)

＜あらすじ＞

東京のある屋敷町。魚政の行男に

教えられて石焼き芋屋の渥美の爺さんは、坂の上の奥平家の若い女中君子と梅子に芋を売りに行った。掃除中の梅子が爺さんを応接間に無理に呼びこみ重いソファを動かしている、この家の主人で製菓会社の社長奥平庄兵衛とオールドミス秘書矢杉和子が帰宅した。その時、焼芋屋の爺さんが脳溢血を起して応接間の真中で倒れ、呼ばれた同家の主治医花村と矢杉は人道主義を楯に爺さんを動かすことに反対した。この騒ぎの最中に奥平家の実権者の祖母と女中頭の八重が帰宅した。婿養子の庄兵衛は甲斐性なしで、3人の孫といえど博愛主義と称して男を渡り歩く長女多美子、貧乏画家に夢中の次女千鶴子、現代病の虚無感にとらわれている長男守と、1人として祖母の意にかなわない。冷く嫌われものの八重が男隷庄兵衛の永い間の隠れた愛人だったことがわかり、奥平家は日毎に騒然としてくる。孤児栄一だけが心から爺さんの面倒を見、この2人を千鶴子だけが庇ってやった。爺さんの看病から花村医師と矢杉の間に恋が生れ、これに刺激されて千鶴子は貧乏画家との愛を宣言した。庄兵衛の経営する会社はストに突入し、デモ隊に備えて奥平邸にはヤケザの群が住みこんだ。花村医師は病人をアパートに移すことを決意し、千鶴子は貧乏画家江間のあとを追って奥平家から出て行った。初めて客間に足を踏み入れた祖母は、爺さんが彼女の初恋の人だったことを知った。デモ隊と警官の乱戦のさ中に倒れた祖母は静かに息をひきとった。



笛吹川

松竹大船1960年作品

原作……………深沢 七郎
製作・脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………大槻 義一
撮影……………楠田 浩之
美術……………伊藤 熹朔
〃……………江崎 孝坪
音楽……………木下 忠司

＜配 役＞

おけい……………高峰 秀子
夫 定平……………田村 高広
長男 惣蔵……………市川染五郎
長女 ウメ……………岩下 志麻
次男 安蔵……………中村万之助
ノブの子 次郎……………川津 祐介
三男 平吉……………田中 晋二
上杉謙信……………松本幸四郎
武田信玄……………中村勘三郎
虎吉……………渡辺 文雄
おじい……………加藤 嘉
聖道夫人……………井川 邦子
おじいの孫 半蔵……………大源寺竜介
勝やん……………安部 徹
おじいの孫 ヒサ……………小林トシ子
おじいの子 半平……………織田 政雄
ミツの子 タツ……………荒木 道子
定平の母 ミツ……………山岡 久乃
里駒の嫁……………市原 悦子
武田勝頼……………武内 享
タツの娘 ノブ……………伊藤 弘子
おじいの孫 タケ……………矢吹 寿子
武田聖道……………浜田 寅彦
老女……………原 泉
方丈……………小笠原二郎
C W 9巻(3208米)10月19日封切

ベスト・テン第4位

＜かいせつ＞

「笛吹川」は木下恵介のおそらくはもっとも異色ある力作のひとつである。

日本映画に戦国時代が扱われることは多いが、それはいずれも、乱世の武將たちを英雄として讃える立場でつくられており、当然のことながら、ヒロイズムによって美化されている。民衆の立場から戦国時代を描いた映画などはない。わずかに1941年の衣笠貞之助監督の「川中 島合

戦」が、物資輸送の人夫の苦勞を比較的大きく扱っていたのが印象的だったていである。

「笛吹川」の原作者深沢七郎は、権力への憎悪をたんなるイデオロギーとしてではなく気質化して身につけている珍らしい作家で、彼自身の郷里の伝説的英雄である 武田 信玄も、彼の筆にかかれれば、どこか薄気味の悪い怪物のような存在以上のものではない。いっぽう、権力者を憎むからといって、観念的に民衆を美化するわけでもないところがまた、深沢七郎のユニークなところで、民衆の残酷さを彼ほど鮮やかに、あつげらんと描ける小説家もちょっといない。

この原作を得て、木下恵介は、戦国時代の農民の、戦争といえど出世の好機とばかりに嬉々として出かけて行き、殺し、殺され、負けて生きのびればまた村に帰って土を耕すという、いわば戦乱が日常であった日々の生態を描き出している。そこには、素晴らしい英雄的な合戦はなく、ただ愚かな殺し合いがあるだけである。天晴れ仰ぎ見るような豪傑はおらず、ただ、殺したり殺されたりすることに無感覚になっている人間たちがいるだけである。戦争というものを、ほとんど退屈なまでにつまらない殺し合いとして描いたという点で、この作品以上の映画を思いうかべることは難しい。戦争を思想的には否定しているつもり映画でも、たいてい、戦闘自体は痛快なものにしてしまうが、深沢七郎と木下恵介は、戦争の中の民衆のしぶとさは面白がっているが、戦闘そのものの痛快さといったことには殆どなんの興味も示し

ていない。これは驚くべき本物の平和主義と言えよう。(佐藤)

＜あらすじ＞

戦国時代、甲斐の国笛吹橋のたもとに一軒の貧しい百姓家があり、おじいと婿の半平、孫のタケ、ヒサ、半蔵が住んでいた。おじいは半蔵がお屋形様(武田信虎)の戦に出かけ、飯田河原の合戦で手柄をたてたので大喜びである。お屋形様に生れた男の坊子の後産を埋める役を半平が申しつかったが、おじいとその役をひったくり、御胞衣を汚して家来に斬られた。同じ日、近くの家で赤ん坊が生まれ、その子はおじいの生れ代りと信じられた。やがて半蔵も討死し、ミツの子定平はおけいを嫁にした。2人の間に長く子供が生まれなかったが、方丈さんが死んだ日に惣蔵が生まれ、翌年に次男の安蔵が生まれた。タケとヒサが死んで惣蔵が3つになった時、ミツが後妻に行った山口屋が大金持になりすぎ、お屋形様に嫉まれて焼打をくった。ミツは殺され、子供タツは娘ノブを連れて甲府を逃げだし、定平の世話でくまわれた。ノブは男に捨てられ、子供を生んだが寺の門前に捨てて死んだ。やがて定平とおけいの間に三男平吉が生まれ、3人の男の子と末娘ウメを抱え、夫婦は手伝に出て働いた。子供たちは成人し、惣蔵と安蔵は戦に行き、ウメも奉公に出た。やがて信州の高遠城が落ち、惣蔵たちは笛吹橋に敗走してきた。おけいはお屋形様の行列を追って子供たちの名を呼び続けたが、子供たちはふり返ろうとしなかった……。



永 遠 の 人

松竹大船1953年作品

製作……………月森仙之助
製作・脚本・監督……………木下 恵介
助監督……………吉田 喜重
撮 影……………楠田 浩之
美 術……………梅田千代夫
音 楽……………木下 忠司
ブラス・ギター……………ホセ 勝田
唄……………宇井あきら

＜配 役＞

小清水さだ子……………高峰 秀子
川南隆……………佐田 啓二
小清水平兵衛……………仲代 達矢
川南の妻 友子……………乙羽 信子
息子 豊……………石浜 朗
さだ子の娘 直子……………藤 由起子
隆の兄 力造……………野々村 潔
さだ子の父 草三郎……………加藤 嘉
平兵衛の父 平左衛門……………永田 靖
さだ子の長男 栄一……………田村 正和
さだ子の次男 守人……………戸塚 雅哉
巡査……………東野英治郎

8巻(2922米) 9月16日封切
ベスト・テン第3位

＜かいせつ＞

木下恵介は、「二十四の瞳」「喜びも悲しみも幾歳月」の2作によって、歳月をへてもいつまでも変わらない師弟や家族の愛情の年代記とでもいうべき作風をうちたて、主としてこれらの作品によって、いわば国民的な作家とも言える敬意のこもった大衆的な評判を得た。しかし、彼はいっぽうで、憎しみの年代記とも言うべき作品もつくっている。「日本の悲劇」や「女の園」がそうである。これらの作品は大衆的な評判の広がりという点では前記の「愛の年代記」ものに及ばないが、作品としての高さ、鋭さという点では、むしろそれ以上に重要なものである。「日本の悲劇」の姉弟は、母のみだらな姿を目撃してから母を憎むようになる。「女の園」で高峰三枝子が演じた女子大学の寮監は、若き日の失恋の心の傷にはじまる人間憎悪から、学生に冷酷な教師になっている。木下恵介は、メロドラマ的ないわゆる善玉

悪玉という描き方はしない。「大曾根家の朝」のとき、占領軍の検閲官は、小沢栄太郎の演じた軍人を徹底的に悪い奴として描くように要求したという。しかし脚本の久板栄二郎と木下恵介はこれにずいぶん抵抗し、一時は止めてしまおうかと思いつつながら、やっと妥協点を見出してやったという。「人間はそんなに悪いわけではないと思うのです。僕たち、人間を憎んでいるわけではないのですから……」と言っている。「四谷怪談」でも、悪の権化とも言える民谷伊右衛門を、気の弱いノイローゼの男に脚色してやっているくらいである。しかし、こうして人間の善意をあくまでも作風の基調にしている木下恵介が、ときに、人間の心の奥深くにすみついてしまうものとしての憎悪を描くことに執着するのは興味ぶかい。

「永遠の人」は、一組の夫婦の半生をつうじて人間の憎悪を執拗に描いた大作であり、木下恵介の全作品のなかでも異色ある作品である。地方色豊かな地方へのロケーションを好む木下恵介は、ここでは阿蘇にロケーションを行なっている。(佐藤) <あらすじ>

☆第1章 昭和7年。阿蘇谷の大地主小清水平左衛門の小作人草三郎の娘さだ子には川南隆という親兄弟も許した恋人がいた。平左衛門の息子平兵衛は隆と共に戦争に行ったが平兵衛は足を負傷し除隊となって帰郷してきた。その歓迎会の数日後、さだ子は平兵衛に犯され、川に身を投げたが、隆の兄力造に助けられた。やがて凱旋してきた隆は事情を知ると、置手紙を残して出奔した。

☆第2章 昭和

19年。さだ子は平兵衛と結婚し、栄一、守人、直子を産んだ。太平洋戦争の末期、隆も力造も応召し、隆の妻の友子は息子豊と力造の家にいたが、平兵衛の申し出で小清水家に手伝に行くことになった。或る日、友子に挑む平兵衛をさだ子はくげだもの>と面罵した。騒ぎの中で平左衛門が病死し、翌日、友子は暇をとり実家へ戻った。

☆第3章 昭和24年。隆は胸を冒されて戻ってきた。一方、さだ子が平兵衛に犯された時にできた栄一は高校生になっていたが、自分の出生の秘密を知ると阿蘇の火口に投身自殺した。さだ子と平兵衛はさらに憎みあうようになった。

☆第4章 昭和35年。20歳の直子と25歳の豊は愛しあっていたが家庭の事情で結婚できない。さだ子が2人を大阪へ逃がしたのを知って平兵衛が怒っている時、東京の大学に入っている守人が安保反対のデモに参加、逮捕状が出ていると巡査が知らせてきた。守人の電話でさだ子は草千里まできた守人に会い逃走資金を与えたが、その途中で会った友子に大阪の豊の住所を教えてやった。

☆第5章 昭和36年。死の床につく隆のもとに、直子と豊が生まれたばかりの子を連れてかけつけた。さだ子が来ると隆は死の間際に平兵衛を苦しめていたのは逆に私だ、謝ってくれと頼んだ。隆を安らかに送るため平兵衛を呼ぼうとしたが、平兵衛はさだ子の頼みを聞かなかった。が、彼の心もやがて溶け、2人は30年ぶりに許しあうのだった。



今 年 の 恋

松竹大船1962年作品

製作……………月森仙之助
製作・脚本・監督……………木下 恵介
撮 影……………楠田 浩之
"……………成島東一郎
美 術……………梅田千代夫
音 楽……………木下 忠司

＜配 役＞

相川美加子……………岡田茉莉子
山田正……………吉田 輝雄
弟 光……………田村 正和
美加子の弟 一郎……………石川 竜二
広沢道子……………峯 京子
杉本先生……………三木のり平
山田家の婆や もと子……………東山千栄子
美加子の母 お紋……………浪花千栄子
" 父 一作……………三遊亭円朝
正の父 良平……………野々村 潔
相川家の 女中……………若水やエ子
林……………菅原 通済
清子……………高森 和子
松 晋樹

ワイド 6巻(2255米) 1月14日封切
＜かいせつ＞

木下恵介の作品のなかでは、ごく軽い風俗映画である。ごく軽い風俗スケッチ的な作品をさらに撮るといのは、木下恵介の師匠の島津保次郎監督もよくやったことである。今日では軽い風俗スケッチ的な映画はテレビのホームドラマにすっかりお株を奪われたかたちになり、映画ではよほど重量感のある作品か刺激の強い作品でないとい存在理由がないような感じになっているが、映画の盛んだった時期にはそうではなく、重厚な力作とおなじくらい、軽妙で小味な作品も歓迎されたのである。島津保次郎監督はなかでもその名手で、大作力作をつくるいっぽうで、日常生活のなにげない細部を面白く見せる軽さを舌を巻かせる作品を多作した。むしろ軽い作品のほうに名人芸があったとも言える。木下恵介が助手として修業した戦前の松竹蒲田、大船撮影所には、島津保次郎以外にも、五所平之助や清水宏のように、ときどき、ごく軽いなんでもな

いような風俗スケッチ的な小品でファンをうならせる名監督がいて、これはこの撮影所の重要な伝統になっていた。

島津保次郎監督の助手からは多くの名監督が輩出したが、師のその軽みをもっともよく受け継いだひとりが木下恵介である。島津保次郎は、演技指導においては、俳優を鍛えぬくというゆき方ではなく、俳優がいちばん自然にのびのびとカメラの前でふるまえるように誘導した。そして、カメラワークは俳優の条件に応じて柔軟に変えていった。俳優の動きを自分のイメージにあくまでも合わせてゆく小津安二郎、俳優を徹底的にしぼりぬく溝口健二や黒沢明と対照的なところに、島津保次郎から木下恵介に受け継がれた演出の流派がある。これは軽い風俗スケッチの妙味を発揮するうえには欠くことのできないものであろう。

吉田輝雄は新東宝で活躍していた俳優で、これが松竹に移った第1回の作品である。三木のり平、若水やエ子、三遊亭円朝など、ふだんあまり喜劇俳優を起用しない木下作品に、達者な喜劇人が出演しているのも珍らしい。(佐藤)

＜あらすじ＞

高校生の山田光と相川一郎は仲良しだが共に成績が良くない。一郎の家は銀座の料理屋愛川で、お人好しの父一作と母お紋は職人気質、姉の美加子は店の看板娘で数ある縁談に耳もかかず、一郎の監督に一生懸命だ。彼女は弟の成績不良は悪友のせいだと思いこんでいる。横浜にある光の家でも同じで、秀才でハンサムな大学院生の兄正と婆やが口うるさく友だちが悪い

と教説しているが、鰯夫で或る会社の専務をしている父良平は全てに鷹揚で話がわかる人物だ。或る日、正は友人の広瀬道子に一方的に求婚され、彼女の一人合点を納得させようと愛川の暖簾をくぐったのも、一つには弟の友だちの家を偵察する目的もあった。が、美人の美加子を見た途端に一目惚れして道子を怒らせ、彼女にビールを浴せられた。数日後、一郎の成績のことで学校へ呼出された美加子は、同じく呼出された正と出会い、一郎の友だちの兄と知って益々心証を悪くした。正は愛川を訪れて美加子と話しあおうとしたが、偶然良平が愛人の清子と来っていたので親子揃って碌でなしだと美加子に思われてしまった。その後、光が一郎の家に泊ると電話してきた時、美加子に対する意地から正は絶対に帰れと厳命した。一郎の家を出た光は翌日になっても帰宅せず大騒ぎとなり、美加子も一郎と初めて横浜へやってきた。そんな騒ぎの最中に熱海の旅館にいる清子から光が来ているという電話があり、良平は学校が休みだという一郎を連れて熱海へ。正は美加子を送って銀座へ出た。車中で正の肩にもたれて眠った彼女は、家へ帰っても照れ臭いのか一作が正をまるで婿扱いするのに突っけんどんにした。そこへ熱海の良平から皆で京都へ遊びに行くという電話があり、正が後を追って出かけると、美加子も正が忘れたライターを届けると京都に向かうのだった。



二人で歩いた幾春秋

松竹大船1962年作品

製作……………白井 昌夫
製作・脚本・監督……………木下 恵介
原作……………河野 道工
「道路工夫」の歌より
撮影……………楠田 浩之
美術……………伊藤 熹朔
音楽……………木下 忠司
唄……………若山 彰

＜配 役＞

野中とら江……………高峰 秀子
夫 義男……………佐田 啓二
息子 利幸……………山本 豊三
千代……………久我 美子
石川美代子……………倍賞千恵子
望月……………野々村 潔
妻……………菅井 きん
義男の父……………小川虎之助
母……………岸 輝子
寺下……………浜田 寅彦
飲み屋のおかみ……………三崎千恵子
所員……………左右田一平
杉本……………河野 秋武
竹村……………稲葉 義男
町の人……………青山まり子
所員……………田中 晋二
吉岡……………矢野 宣
所長……………土紀 洋児
ワイド 7巻(2793米)8月12日封切
＜かいせつ＞

佐田啓二は木下恵介が「不死鳥」でデビューさせたスタアである。その後、日本映画の代表的な二枚目のひとりになり、多くの監督の作品に主演したが、木下恵介作品に忘れ難いものが多い。「不死鳥」は上原謙でやるつもりだったのをことわれ、そのとき佐田啓二の入社テストの写真を見てきめたのだそうである。「なにが人間がよさそうだな」ということに、僕、たいへんひかれるし、自分がその人を抜擢できる位置にあれば、映画界でのばしてあげるということは一寸いい気持ちがするのですよ。実際問題としては、馴れない人間を使うことは難しいけれども、自分がその映画を作るといふほかに、別の興味がありますね。一つ

の楽しみです。できない人をできるようにみせるというむつかしさですか？ いえ、それは無理なことをさせなければ、素直に動いているようにみえるものなのです。うまく見えるようにしちゃうわけ。1枚の写真を写すにしても、その人間のいい顔を狙うでしょ。同じことで、その人間のうまく見えるところばかりを狙うわけです。そうしているうちに、だんだん才能がある人はわかって来ますよ」と木下恵介は語っている。

こうして佐田啓二は1950年代の松竹を背負うトップ・スタアになったが、甘い二枚目としてのほにかんだような微笑とともに、戦中派らしい、苦労にはじつと、素直に生真面目に耐えぬ人間であるような気分が身についていて、戦中戦後の苦難の時代を耐えてきた世代には、世代的な共感があつた。やがて彼は、この生真面目な感じに、謙虚な渋い温たかさを加えた堅実な演技力を加えて風格のある俳優になった。「二人で歩いた幾春秋」は、甘い二枚目から脱皮して淡々とした内面的な演技を見せるようになった時期の佐田啓二の代表的な作品のひとつである。道路工夫という地味な仕事に生きつづける中年の夫婦を高峰秀子と共演しているが、「喜びも悲しみも幾歳月」とともに、この2人によって演じられたこれらの人物は、たしかにひとつの時代の典型的な日本人であった。万事にひかえめで自我をつき出そうとはしないところは佐田啓二の個性であり、また時代の性格でもあった。(佐藤)

昭和21年、復員して郷里山梨で道路工夫となった野中義男は、両親、妻とら江、息子利

幸と丘の家の小さな借家で苦しい毎日を送っている。翌年、とら江は土木出張所の小使に雇われ、義男一家は小使室に住むことになった。5年後、小学3年生の利幸は成績も一番で義男は利幸の将来に望みをかけた。脳溢血で倒れた工夫仲間望月をリヤカーに乗せて花見に出かける途中で義男は初恋の千代と会った。やがて最優秀の成績で中学を終えた利幸は甲府高等学校へ。幾歳月の苦しみを忘れて義男ととら江は喜びあつた。昭和32年、京都大学に入った利幸への仕送りのため、義男は好きな酒を半分にし、とら江も食べ物を節約した。その年も明けて、利幸から「実は去年、大学の受験に失敗したが、アルバイトをしながら勉強し、今年は試験に合格したから安心して下さい」という意外な手紙がきた。やがて3年に進学した利幸は、仕送りに悩む両親に迷惑をかけまいとアルバイトを続けるが、学資が足りずとかく沈みがちだ。好意をよせる石川美代子はそんな利幸を慰めた。その頃、とら江が京都にやってきた。利幸は遂に学業を諦めて山梨へ帰った。義男は利幸を殴りながら「親の気持ちが判らないのか」と泣き、利幸もとら江も泣いた。昭和37年、新しく学士として京都大学を巣立つ卒業生の中に利幸の明るい顔があつた。大講堂に列席した義男ととら江のふしくれた掌に喜びの涙が落ちるのだった。



昭和21年、復員して郷里山梨で道路工夫となった野中義男は、両親、妻とら江、息子利

歌え若人達

松竹大船1963年作品

製作……………白井 昌夫
脚本……………木下 恵介
監督……………山田 太一
助監督……………木下 恵介
撮影……………永瀬 良輔
美術……………楠田 浩之
音楽……………梅田千代夫
音 楽……………木下 忠司

＜配 役＞

森康彦……………松川 勉
宮本伸一……………川津 祐介
岡田一之助……………三上真一郎
平尾弘……………山本 圭
テレビ女優 厚木紀子……………岩下 志麻
岡田の恋人 中島裕子……………倍賞千恵子
本庄淑子……………富士真奈美
岡田の祖母……………東山千栄子
平山教授……………三島 雅夫
平井……………永井 智雄
平尾の母……………京塚 昌子
森の母……………川上 夏代
パーのマダム……………坪内美詠子
食堂のおじさん……………柳家金語楼
経済学教授……………益田 喜頓
管理人……………若水ヤエ子
下宿のおばさん……………清川 玉枝
食堂のおばさん……………武智 豊子
プロデューサー 中井…

ロイ・ジェームス

編集長……………大森 義夫
婦京する学生……………林家 珍平
香山……………山口 崇
犯人……………田中 晋二
果物屋の娘……………珠樹 ルミ
説明する学生……………津川 雅彦
ケネディの学生……………山本 豊三
運転手……………渥美 清
新 克利
特別出演……………佐田啓二、田村高広
岡田茉莉子、牧紀子

C W 6巻(2383米)1月6日封切
＜かいせつ＞

シナリオを、木下恵介門下の山田太一が書いている。木下恵介の助監督からは、松山善三、吉田喜重など、すぐれた監督、脚本家が出ているが、山田太一もその1人で、近年

ではテレビのホームドラマ「それぞれの秋」や「藍より青く」などの作者として活躍している。木下恵介の庶民的な親しみやすいユーモアとセンチメンタリズムをもっとも良く受け継いでいる作者であろう。

「歌え若人達」は、お正月映画としてつくられた軽い娯楽映画であつて、深刻なものではない。しかし、のんびりとユーモアたっぷりの語り口ではあるが、題名の威勢のよさとは裏腹に、むしろ、青春のゆううつさを微苦笑まじりに描いたものであることは、山田太一がその後テレビで得意とするようになるところである。

ある大学で同じ寮の生活をしている4人の学友がいる。宮本(川津祐介)は家からの仕送りが豊富だし、勉強もできるので、人生に自信まんまん。ガールハントにもいちばん手が早く、逆に森(松川勉)は、アルバイトに疲れきって人生に絶望している。ところが、絶望しながらアルバイトをしている顔が現代的だと、週刊誌の表紙に撮られたためにテレビ出演のチャンスがやってきて、いつの間にかスタアになってしまう。宮本のほう家は家が破産して逆に人生に絶望する。こういう皮肉を利かせた学生生活の話というのは、戦前の松竹蒲田＝大船いらいの松竹の風俗喜劇の伝統と言っているものである。

木下恵介はこれを力まず淡々と撮っており、軽い世間話のような調子の笑いで流している。故郷のお婆さんのうるささに閉口している岡田(三上真一郎)のブスとしたユーモアや、かわいい親孝行な坊やみたいな顔をしていて、いつのまにかガールフレンドを妊娠させている平尾(山本圭)の茶

目っ気など、木下恵介の演出はなんでもないようなところのアクセントのつけ方が利いている。(佐藤)

＜あらすじ＞

一文なしで大学に入った森康彦、勉強第一主義の岡田一之助、成績にも女にも自信のある宮本伸一、母親思いの平尾弘の4人は、東京の大学の寮で同室の仲間だ。アルバイトに学業という生活を送っている森は、バイト中の姿が週刊誌に載り、テレビの連ドラの主人公に抜擢された。そんな森の幸運を宮本は人生のまぐれ当りと懐疑的に反撥し、その空虚な心は恋人の裕子や女友だちの淑子からも離れさせた。岡田は森の活躍が刺激となり勉学に励むが、そんな岡田に裕子は心惹かれるようになる。一介のサラリーマンを望む平尾は天下泰平だが、テレビ俳優となった森は仲間から離れて行くようで心配だった。そんな彼を引き止めたのはテレビ女優の厚木紀子だ。やがて、4人にとって最後の大学祭が近づき、その準備中、自動車部の学生と喧嘩して平尾が気絶した。てんやわんやの中に平尾の母親、森のお袋さん、岡田のお婆さんらが大学祭にやってきた。大学祭もたけなわとなり、岡田と裕子、平尾と果物屋の娘、森と紀子らのカップルは楽しそうだ。年も改まり、新人タレント森の盛大なデビュー発表会の日、会場には岡田、平尾、淑子らのカップルが集まったが、宮本はひとりぼっちだった。こうして、ばらばらな4つの青春が未来に向かって出発するのだった。



死 闘 の 伝 説

松竹大船1963年作品

製作……白井 昌夫
製作・脚本・監督……木下 恵介
助監督……桜井 秀雄
撮影……楠田 浩之
美術……梅田千代夫
音楽……木下 忠司

＜配 役＞

園部黄枝子……岩下 志麻
清水百合……加賀まり子
黄枝子の母 静子……田中 絹代
“ 兄 秀行……加藤 剛
“ 弟 範雄……松川 勉
百合の父 信太郎……加藤 嘉
村長の息子 鷹森剛……菅原 文太
語る人……滝沢 修
剛一の父 金兵衛……石黒 達也
山ノ助……花沢 徳衛
林巡查……野々村 潔
源さん……坂本 武
黄枝子の祖母 梅乃……毛利 菊枝
酔っぱらいの親爺……浜村 純
校長……明石 潮
警部補……中田 耕二
警官……青山 宏
正太……小瀬 朗
黄枝子の妹 篝……朝田由紀子
親爺の女房……大塚 君代
中村 晃子
パート・カラー ワイド

6巻(2313米)8月11日封切

＜かいせつ＞

アクション映画を他にほとんど撮っていない木下恵介には珍らしく、闘争の要素を含んだ作品である。いわゆる活劇ではないが、サスペンスのかもしれない。そして、山村の人間関係の重苦しさをドラマの核心にしているところは、やはり、いかにも木下恵介らしい。木下恵介自身は浜松の商人の家の出であるが、日本の映画監督で、彼ほど、日本の農村漁村を描きつづけた人も他にはいないのではあるまいか。「野菊の如き君なりき」や「永遠の人」や「風花」に描かれた農村の地主、「二十四の瞳」や「なつかしき

笛や太鼓」の島と漁村、「わが恋せして乙女」や「カルメン純情す」の牧歌的な田園、戦国時代の半農半武士的な百姓たちの村、そして「檜山節考」や「死闘の伝説」の重苦しい貧しい山村である。これは、ひとつには、木下恵介が自然の風物を撮ることのうまい、風景詩人的、抒情詩人的な資質の持主だからであるにちがいないが、ただそれだけでもないのではない。

農村にしる漁村にしる、村こそは家族制度のもっとも強固な土台であり、木下恵介は、抒情詩人であると同時に家を描いてやまない作家であるからこそ、どうしても、しぜんと村に眼が向くことになるのではあるまいか。戦争を描くのにさえも木下恵介は、砲火の炸裂する戦場によって描こうとしたことはなく、家族を別れ別れにするものとして描いた。「陸軍」「大曾根家の朝」「二十四の瞳」がそうである。そして「死闘の伝説」もそれにつながる作品である。木下作品では、母親は家の統合の中心であるからこそ尊い。田中絹代、望月優子、高峰秀子、杉村春子など、木下作品で母親を演じた女優たちこそ、木下作品の真のヒロインと言える。木下恵介が本当に心からのいきどおりを見せるのは、母によって統合されている家を何者かが破壊しようとするときである。このときこそ木下恵介はあえて社会派になるのである。そして、そうでないときまで肩ひじ張って怒っているとはしないのである。(佐藤)

＜あらすじ＞

太平洋戦争の末期、北海道の寒村に疎開してきた園部家の娘黄枝子に村長の息子鷹森剛一との縁談がおき

た。黄枝子は気が進まなかったが、一家が他国者としてこの村で暮すには断りきれないと思った。祖母梅乃と母静子もそんな娘の心を察して返事をためらっている。弟の範雄は若者の潔癖感からこの縁談には反対した。そこへ、長男秀行が病気のため戦地から帰還してきた。剛一が大陸の戦線で残虐行為を犯しているのを目撃していた秀行は、早速この縁談を断った。村中の園部家迫害が始まった。ただ、猟師の信太郎とその娘百合だけは別だった。戦友のいる仙台へ向う秀行は、村境まで送ってくれる百合にほのかな恋情を感じるのだった。或る日、買出し帰りの黄枝子は林の中で剛一に襲われた。黄枝子を迎えにきた百合が剛一にむしゃぶりついた。危機を脱した黄枝子は百合を救おうと石で剛一を殴りつけ2人は必死で逃げだした。剛の一死が村に伝えられ、林巡查らが黄枝子を引渡せと信太郎の家に向うが、百合が猟銃を構えて近づけない。黄枝子は警察へ行くというが、信太郎は彼女を百合と山奥の白雪小屋に逃がす。こうして村人たちは暴徒と化して範雄、梅乃、信太郎らを殺した。折しも帰郷した秀行は争いを止めさせようと小屋へ急行したが、その時百合の胸は兇弾で貫かれた。必死で訴える黄枝子の言葉に、村人たちはやっと平静に戻った。争いは終わったが、百合の名を呼び続ける秀行の声が悲しい。日本降伏の2日前の出来事であった。



香 華

松竹大船1964年作品

原作……有吉佐和子
製作・脚本・監督……木下 恵介
助監督……桜井 秀雄
撮影……楠田 浩之
美術監督……伊藤 嘉朗
美術……梅田千代夫
音楽……木下 忠司

＜配 役＞

朋子……岡田茉莉子
母 郁代……乙羽 信子
祖母 つな……田中 絹代
太郎丸……杉村 春子
軍人 江崎……加藤 剛
野沢……岡田 英次
郁代の夫 高坂……北村 和夫
叶楼々主……柳 永二郎
女将……市川 翠扇
杉浦……菅原 文太
下男 八郎……三木のり平
呉服屋の番頭……桂 小金治
神波伯爵……宇佐美 淳
大叔父……村上 冬樹
大滝……新 克利
安子の子 常治……田中 晋二
ワイド 14巻(5527米)5月24日封切
ベスト・テン第3位

＜かいせつ＞

有吉佐和子のベストセラーであり、舞台化されても評判になった長編小説の映画化である。有吉佐和子が、日本舞踊などに取材した短編小説を書いて一部に認められかけたころ、松竹の大谷竹次郎会長は彼女の才能に注目し、舞踊劇や歌舞伎俳優による舞台劇の台本が書けるはずであるとして積極的に演劇の仕事に引き込んだ。それから彼女は舞台劇の脚本・演出もやるようになったが、はたせるかな、小説家としても、この「香華」や「華岡青洲の妻」など、大衆性ゆたかなウエルメイド・プレイになりやすい作品をつぎつぎに書いた。大谷竹次郎は長年日本の歌舞伎をほとんど一手に盛り支えてきた興行者であるが、松竹会長として芝居を熟知していると同時に映画にもすぐれた批評眼を持っていて、

木下恵介はしばしば、大谷会長から適切な批評と賞賛を受けたことを語っている。

「香華」は、淡彩な語り口の作品の多い木下恵介作品としては、珍らしく、波乱と屈折の多い、メロドラマ的なアクセントの強い作品である。自堕落で奔放で遊女としてお職をはることを自慢にする母親と、その娘との愛憎の年代記であるが、自堕落な母親とそれを憎む子どもたちという人間関係は、木下恵介はかつて「日本の悲劇」でいちどとりあげている。ただし、「日本の悲劇」の母親が、貧しさから止むを得ず酌婦をしているのとは違って、「香華」の母親は、もっと性格的に淫奔で、これは木下作品としては他に例のないものと言えよう。この母親を演じた乙羽信子は、宝塚少女歌劇出身で、百万ドルの笑くぼと呼ばれた愛らしさで人気があつて戦後まもなく大映に迎えられたが、1950年代から新藤兼人監督の近代映画協会に参加し、リアリズム映画の汚れ役を体当り的に熱演することが多かった。

娘を演じた岡田茉莉子は、1951年に東宝で娘役としてデビュー、のち松竹に移って主演スタアとして活躍していたが、この年、木下門下だった新進監督の吉田喜重と結婚し、ともに松竹を去った。(佐藤)

＜あらすじ＞

郁代は小地主須永つなの1人娘だったが大地主田沢の1人息子と結婚し、20歳で後家になると娘朋子をつなの元に置いて高坂敬助の後妻となった。つなが亡くなった後朋子は郁代に引きとられたが、敬助の親と折り合いの悪い郁代は、敬助との間に出来た安子と共に



なつかしき笛や太鼓

木下プロ・宝塚映画＝東宝1967年作品

製作……藤本 真澄
 // ……金子 正且
 製作・脚本・監督……木下 恵介
 撮影……楠田 浩之
 美術……松山 崇
 音楽……木下 忠司

＜配 役＞

家田徹……夏木 陽介
 妻 道子……大空 真弓
 おばあちゃん……浦辺 象子
 大塚先生……小坂 一也
 網元……藤原 釜足
 校長……谷口 完
 体育会長……志麻 康彦
 三郎の父……山村 弘三
 豊の母……初音 礼子
 北見 唯一
 遠藤 辰雄

C W 9巻(3137米) 9月30日封切
 ベスト・テン第9位

＜かいせつ＞

木下恵介は「香華」をさいごにして松竹をやめた。松竹育ちで、松竹以外での仕事は1本もしなかった木下恵介であるが、日本の映画界は1960年代に入ると急速に衰退し、60年代半ばになると、どこの撮影所も巨匠作品は金がかかるということで敬遠する傾向が強まった。とくに松竹のばあい、得意の女性映画とホームドラマの主な観客層である女性はテレビに奪われたかたちになったのが痛かった。他社に追従して松竹もエロと暴力の傾向を強めるようになり、そうした傾向とは全く違う世界を描いてきた木下恵介には、納得のゆく仕事をやれる機会は減った。67年に木下プロを設立し、以後は主としてテレビで仕事をするようになった。そしてテレビでは、女性映画、ホームドラマの名手としての才能は十分に受け容れられ、映画界からテレビに行った監督としてはもっとも成功した。とくにTBSテレビの「木下恵介アワー」は、内容的に平均してレベルも高く、視聴率的にも安定したホームドラマ、シリアスな

ヒューマンなドラマとして長く続いている。

「なつかしき笛や太鼓」は、瀬戸内海の小さな島の小学生たちが、夏木陽介の明朗な教師の熱心な指導の下に、バレー・ボールの練習にうち込んで大会で優勝し、それまでの小さな分教所の生徒としてのいじけた気分をふきとばすという、ほほえましい作品である。ローカル・カラー、子どもたちの世界、貧しさのためにいじめやすい人々にそそぐ温い眼など、これは典型的に木下恵介の世界であるが、ここにはまた、エロと暴力の方向に急速に傾いてゆきつつあった日本映画界に対し、あえてこういうささやかな愛情の世界のたんなる描写をこそ映画の正道として守ろうという強い主張が感じられた。しかし、そのことがまた、あえて時流に背を向けているという印象を深めたことも否めない。このあと76年に「スリランカの愛と別れ」を発表するまで9年間、映画界を離れてテレビに専念することになる。

なお、テレビでは、自らシナリオや演出を担当するだけでなく、プロダクションの主宰者として、多くの後進を育成している。(佐藤)

＜あらすじ＞

春の瀬戸内海を家田徹と妻道子は感慨深げに四国丸亀市に向かっていた。小手島での13年間の教員生活にいま別れを告げたところだった。昭和29年の春。徹は婚約中の同僚道子の反対を押し切って離島教員として小手島に赴任した。徹はかつて戦友林の逆境を助けることができず、彼を死に追いやったが、その遺児健一が母を失い孤児となつてこの島に

健一を育てようと決心していたのだった。周囲4キロの島の学校の複式学級で、酒と賭博に明け暮れる大人たちの中で、生徒の心は荒みきっていた。彼らは努力することを忘れ、生徒たちは近島との合同運動会でもいつもビリで、誇りを持つことを知らなかった。そんな生徒たちに、徹はバレーボールを通して努力によって目的に達することの尊さを教えようとコートを作った。第一の障害はボールに興味を示さない生徒たちで、次に島民たちは男女混成の運動は好ましくないと徹の気を挫いた。だが、徹の根気よい指導と説得で、生徒たちはバレーボールの楽しさと努力する精神を学んだ。そんな或る日、徹の努力で塩飽全島の中学生の丸亀市におけるバレーボール大会に、小手島チームが参加することになった。生徒たちに自信を持たせるチャンスと喜んだ徹は生徒を励まして練習を重ねたが、生徒たちもそれに応えて、或る時は朝靄をついで、また或る時は日没まで練習するのだった。試合の日、他校に比べて貧しい服装の小手島チームは、すばらしいファイトで勝ち進んで、ついに優勝したのだった。それ以来、小手島の生徒たちの顔には、子供らしい明るさが見られるようになり、父兄たちの生活も改まってきた。それから13年後のいま、徹と道子の息子となった健一の高校進学のために、徹と道子は島民たちの盛大な見送りを受けて丸亀市に向かうのだった。



* 今回未上映ですが、資料として掲載。

スリランカの愛と別れ

東宝映画＝俳優座映画放送1976年作品

製作……佐藤 正之
 // ……馬場 和夫
 // ……椎野 英之
 原作・脚本・監督……木下 恵介
 撮影……中井 朝一
 美術……村木与四郎
 音楽……木下 忠司

＜配 役＞

越智竹人……北大路欣也
 井上慶子……栗原 小巻
 ジャカランタ夫人……高峰 秀子
 松永保……小林 桂樹
 妻 喜代……津島 恵子
 篤和次郎……小野川公三郎
 橋本末男……片桐 新
 坂田栄……太田 博之
 ローハン……ニランジャン・ペレライラ
 ギータ・マンメリト
 C W (3173米) 5月29日封切

＜かいせつ＞

スリランカはかつてセイロンと呼ばれた国である。平和な仏教国であり、宝石の名産地であるが、人々の生活は貧しい。その貧しい国のおだやかな人々の生活を、美しい情景のなかでとらえて、生きとし生けるものの生の悲しみをかなでる。登場人物はいずれも、なにげない表情の奥に辛い過去を秘めている人々である。すなわち、これは、場所をインド洋の国に移してはいるが、なつかしい木下恵介作品の語り口の世界である。

この作品では、音楽の木下忠司以外はすべて、木下恵介にとっては新しいスタッフであり、俳優もはじめて一緒に仕事をする人が多い。撮影の中井朝一は昭和初期の帝キネ以来のベテランで、とくに戦後、黒沢明監督と組んだ仕事が多い。「生きる」「七人の侍」「デルス・ウザーラ」などが代表作である。美術の村木与四郎も黒沢明のよき協力者で、「蜘蛛巣城」や「赤ひげ」が代表作である。

主演者の一人である高峰秀子は、昭和初期に松竹蒲田撮影所で子役としてデビューして人気を得て以来、昭和10年代には東宝で、少女スタ

として「綴方教室」「馬」などの名作に主演し、戦後は主として新東宝で、「銀座カンカン娘」などの明朗青春スタアとして人気を得た。そして1950年代に入ってから、木下恵介の「二十四の瞳」「喜びも悲しみも幾歳月」「永遠の人」、成瀬巳喜男の「稲妻」「浮雲」「あらくれ」など、まるで木下、成瀬両監督の間をピンポン玉のように往復して、長年の映画生活で培われた豊かな演技力を心ゆくまで見せ、日本を代表する大女優のひとりになった。高峰秀子は、木下、成瀬両監督に共通する演出の特長を、「らしさ」を嫌うことであると言っている。いかにも女優らしく、その役らしくポーズをつくることを嫌うわけである。ものごころついたときから映画界にいて、女優にあこがれることなしに女優になって苦労を重ねてきた高峰秀子自身も、得意になって「らしく」ふるまうことにはうんざりしているところがあり、ここがこの2人の巨匠と意気の合うところでもあったのかもしれない。(佐藤)

＜あらすじ＞

インド洋に浮ぶ島マルチブ共和国に、洋南水産社員越智竹人、篤和次郎、橋本末男の3人が、新工場設立のため日本から派遣されて来ていた。責任者の越智は、会社との連絡のため、飛行機で数時間のスリランカの首都コロンボに度々渡った。そこには越智が尊敬する国連職員の松永夫妻がいた。ある日越智は、松永の紹介で單身日本から宝石の買付に来ている井上慶子を知った。日本に別居中の妻子がいる越智と、何か暗い過去を背負って生きている慶子だが、互いの淋し

の中に次第に好意を抱くのだった。そんなある日、越智は慶子の紹介で日本人ともインド人ともつかないジャカランタ夫人を知った。彼女の身の上話は、莫大な財産に支えられ、25年間も夫人に仕える老僕ローハンと共に、静かに余生を送る現在の夫人からは想像もつかない激しい愛のドラマだった。越智が島に戻った時、部下の篤と現地娘ライラとの恋愛を知った。宗教や習慣の違いを心配して越智は反対したが、2人の激しい愛の前にはなすすべもなく、2人は結婚した。その頃慶子は松永夫妻と共に景勝地シギリヤを訪れた。彼女は自分の過去に縛られて現在の幸福を見つける事を恐れていることに気づき、素直な気持ちで越智に手紙を送った。数日後、2人がコロンボで再会した時お互いの愛を確認した。癌に病むジャカランタ夫人は松永を自宅に呼んで、自分の財産をスリランカ政府に寄贈したいと申し出た。その頃慶子は、夫人の夫マハバリは病死ではなくて祭りに行ったまま行方不明となった事、同じ日に一青年が殺害された事を聞かされた。夫人は再び越智と慶子呼び寄せ、愛の歴史を秘めたダイヤの指輪を越智にさし出すのだった。ローハンが越智を送る途中、マハバリが夫人の可愛がっていた青年を殺したので、自分が主人を殺した事を打ち明けた。満月の夜、夫人はローハンの拳銃で60余年の人生に終止符を打ち、彼も後を追って自害した。遺言通り夫人の遺骨は海に捨てられ、慶子の指にはあのダイヤが光っていた……。



アメリカ映画の影響・無声期

ヒーローの系譜 II

山本喜久男

概観

前章では明治末から大正初期にかけての新派映画の活劇、旧劇映画の変化ものにふれた。その後、アメリカ映画の台頭で、日本のアクション映画は連続映画や西部劇から大きな影響を受けたが、連続映画の影響については既に本誌15号で述べておいた。そこで、ここでは1920年代のアメリカのアクション映画の影響を論じることにする。

ところで、私たちがアクション映画と呼んでいるものとは一体何だろうか。前章の吉山旭光の批評で、大正3年の新派映画は、すでに活劇という名称のジャンルを確立していたことが明らかにされた。それは、フランスの連続映画の模倣であり、探偵と悪漢の追っかけ映画であった。つまり、善玉と悪玉の追っかけという、倫理的な行動は、アクション映画の本質をなしている。この題材の活動性が映画の本質の活動性に対応していることはいうまでもない。つまり文字通りの活動写真が活動的なものを題材とし、アクション映画なるものを生みだしていくのだが、同時にそれは観客の側の、活動の意味、つまり社会的行動のモラリティを明らかにしていく。従って、映画のアクションと社会的行動の関係を解くことが、アクション映画とは何かという答えになるはずである。このように、1920年代の日米アクション映画の関係を考えてみたい。

「日本映画年鑑」の大正13年・14年度版によると、1924年度の日本公開のアメリカ映画は575本で、人情劇、正喜劇、活劇、喜劇、文芸、史劇、連続、他の分類によると、活劇と連続映画のアクション映画は、本数で3分の1弱、巻数で2分の1強を占めていた。この数字は、アクション映画がアメリカ映画にとって重要なものであったことを物語っている。これに対して、日本映画（自大正12年12月、至13年11月）は人情劇、時代劇、喜劇、活劇、探偵劇、時事、他の計537本で、そのうち、活劇、探偵劇は28本である。これで見るとアクション現代劇は圧倒的に少ないが、ただし日本では、時代劇が立廻りなど、多くのアクションを含んでいる点を考えれば、時代劇の多くをアクション映画と、みなせるだろう。この年度の時代劇は209本であった。この頃、時代劇はすでに

写実的な立廻りを確立していて、乱闘劇という活劇化に向っていた。さらに同年鑑の大正15年・昭和2年度版によると、1926年度の日本の劇映画488本のうち、時代劇は255本と増加し、活劇・探偵劇は34本、軍事劇は6本というように、アクション現代劇も増加している。これらのアクション映画の増加は、日本映画におけるアクション映画の確立とそのジャンルの多様化を反映している。それはまた、見る側の論理では、映画における社会的行動の諸パターンの確立、ということになる。そこで以上のような諸問題を集約するために、20年代のアメリカのアクション映画を代表的なスターのイメージにパターン化して、それらのパターンと日本映画との影響を考えてみよう。

1. ダグラス・フェアバンクス 変装する活力

無声期を通じて、フェアバンクスが日本でも大変な人気者であったことはいうまでもないだろう。「キネマ旬報」の大正14年度、東西スターの人気投票では、外国男優の1位が彼で、2位がバーセルメスである。ちなみに、日本の男優では、1位が阪東妻三郎、2位が中野英治、3位が鈴木伝明で、東西の人気俳優の上位は、アクション・スターが占めている。「活動之世界」大正7年1月号の「大正6年回顧録」（編集局）によると、「メリー・ピックフォードに匹敵する人気俳優ドーグラス・フェアバンクス氏の出演劇は8月電気館に『快男子』として初めて上場され」とある。以後の彼は、「欧米映画史上」の南部圭之助によると、「快笑と快走のなかに観客をスクリーンに吸収し、それを裏付ける興行成績でぐんぐん大型化して行った」（58頁）ということになる。快笑と快走、つまり喜活劇のヒーローとして、当時のスクリーンに、彼は君臨したのである。リュイス・ジェイカブスの「アメリカ映画の興隆」は彼の初期の喜劇にふれて、フェアバンクスの「活力」イメージを次のように伝えている。

「1917年フェアバンクスはアニタ・ルースとジョン・エマースンと組んで、機智に富んだ、速い動きの諷刺喜劇を連作した。この種の諷刺喜劇は、喜劇映画界で一時的な流行を生みだした。それから1年足らずで、彼は野心的で、正直な、民主的なアメリカ青年の代表的アイドルになった。これらの作品で、彼は「独立独歩の人」であ

り、不敗の確固不動の人であった。頭の速い回転や疲れ知らずのエネルギーで、彼はいつも金や女をかちとった。彼は、ルーズベルト大統領の「不撓不屈の人生」という考えとアメリカ人のスピード崇拜とを組みあわせて、「活力」を新しい映画スターの特徴にした。いつも彼は活発な、障害をものとしめない、怖れを知らない、そして、「左フックの素速い」、家庭的な、常に「眩惑的ほほえみにまたたく人だった」（276頁）

この活力の人は、快笑と快走でもって、大型化したアクション映画を展開する。「奇傑ゾロ」The Mark of Zorro. 1920 大正10年日本封切、「三銃士」The Three Musketeers. 1921 大正10年封切、「ロビン・フッド」Robin Hood. 1922.大正12年封切、「バグダッドの盗賊」The Thief of Bagdad. 1924. 大正14年封切（同年キネマ旬報娯楽の優秀映画第1位）、「ドンQ」Don Q. Son of Zorro. 1925.大正14年封切（同娯楽的優秀映画第2位）、「ダグラスの海賊」The Black Pirate. 1926. 大正15年封切（キネ旬ベスト・テン第7位）、「鉄仮面」The Iron Mask. 1929. 昭和4年封切等がそれら作品である。

これら作品の特徴を集約してみると、すべてが歴史劇のカテゴリーに入る。扱われている時代で、一番新しいのが「ドンQ」の19世紀初頭だろうか。「ドンQ」の主人公は18世紀末を扱った「奇傑ゾロ」の主人公の息子である。一番古い時代が「ロビン・フッド」の12～13世紀、「バグダッドの盗賊」は昔々の物語りだが、モンゴルの王子がバグダッドを攻撃したりするところからこの頃とみていいだろう。「三銃士」等は17世紀。歴史劇といってもこれら作品はロマネスク性の濃厚なものであり、悪漢の陰謀にたたかう、剣と変装の達人の善玉、彼に救われる美女といった19世紀ヨーロッパのメロドラマの「ケープと剣」劇の伝統を受けついでいる。事実、フランク・ラヒルの「メロドラマの世界」F. Rahill; The World of Melodrama. 1967.によると、19世紀の半ばにデュマの「三銃士」等によって確立された「ケープと剣」劇の継承者としてフェアバンクスが位置づけられている。従って主人公の身分は殆ど貴族であり、ウォルター・スコットの騎士イメージを持っている。ロビン・フッドは子爵、ダルタニアンもガスコーニュの貴族、「ダグラスの海賊」も公爵、ゾロはスペインの名門の出で、彼らはレディに対する献身と剣による武勲を示すのである。フェアバンクスの場合、この武勲談が例の快走と快笑によって展開するわけだが、彼はまた、メロドラマの伝統とともに、アメリカのアクション映画の原型ともいうべきものを、提示している。ロビン・フッドの場合、彼はハンティングドン子爵として、リチャード王と共に、十字軍遠征を行う。途中、彼は恋人のマリアン姫からジョン大公の圧政を伝える手紙を受取り、ひそかに

帰国してシャーウッドの森の義賊、ロビン・フッドに変装・変身し、自由民として圧政とたたかう。しかし姫と共に捕えられ、死刑寸前で、覆面の騎士に変装したリチャード王に救い出される。この自由民としてのシャーウッドの森のヒーローは、西部劇の曠野を流浪する自由の人としてのヒーローと一致する。そしてマリアン姫も又西部劇のヒロインのように、社会を象徴し、悪漢つまり社会をおびやかす力の犠牲者となり、ヒーローは、ヒロイン＝社会を救出するために、悪漢とたたかう。

ゾロの場合、ヒーローはもっと現代に近づく。名門ヴェガ家のドン・ディエゴはスペインで教育を受けて、やはり悪知事の圧政下のカリフォルニアに帰ってくる。ロビン・フッドとゾロの場合、外国に出ることが男子の成人への通過儀礼となり、現代的には教育ということを意味している。これは「バグダッドの盗賊」では更に明確な意味を持つ。ここではヒーローは盗賊だが、王子に変装して姫の婿になろうとし、姫の愛情で改心して、宝探しの難題を解決する。最後に幸福を獲得するが、聖者が「幸福は自から働きて得るべきものなり」としめくくる。「三銃士」でも、ダルタニアンは文字通り大口たたきのガスコン人だが、パリに出て三銃士の盟友となり、騎士として成長していく。「ダグラスの海賊」も、青年が海賊修業をしながら、義侠心から海賊討伐をすることになる。

ところでカリフォルニアに戻ったドン・ディエゴは、軟弱な道楽息子に変身し、黒装束とマスクで変装して悪政とたたかい、ゾロと呼ばれる。父が嫁に望む名門の娘も、ドン・ディエゴよりゾロを愛するようになるが、悪知事の腹心の部下に迫られる。ここでドン・ディエゴは相手を倒し、正体を明かし、カリフォルニアに自由をもたらず。最後に彼は抵抗者の武器としての剣を壁につき刺し、「わが剣よ、再びお前を必要とする時まで」と叫ぶ。

ゾロの場合、民主的アメリカ青年のアイドルの意味が一番明確に示されているようだ。フェアバンクスが具現した活力にはルーズベルトの「不撓不屈の生き方」が反映しているが、ゾロにはルーズベルトのモンロー主義みたいなものが反映している。「ケープと剣」劇の伝統として、ゾロはスペイン貴族の剣士と同じスペイン人相手のたたかいを展開し、スペイン統治体制へのたたかいで勝利を収める。そこにはアメリカが列強に加わる足がかりとなった米西戦争の勝利、帝国主義が重複しているといえよう。そしてゾロも又他のフェアバンクス作品のヒーローと同様に自由のイメージを持つ。ここに自由競争による成功という資本主義社会の理想がたくされており、この点でフェアバンクスはロイドに近く、その作品の社会的意味はロイド喜劇、学生スポーツ映画のそれに一致する。そしてフェアバンクス作品の変装・変身も、

ミケープと剣、劇の伝統を継承して非常に戦略的である。特にロビン・フッドとゾロの場合、それは革命的・ゲリラ的であるが、ゾロの覆面は一種のドミノ面を使用している点でゲーム的でもある。つまりドミノ面は主に目だけを覆っていて、フェアバンクス顔の特徴はかなり露出しているからだ。ドミノ面は仮装のシンボルであり、それにより、フェアバンクスは最も効率よく変装を果す。この効率は活力そのものである彼の力学的な動作の美しさ、特徴でもある。第二次大戦後、ジーン・ケリーの動作の力学性の美しさに幻惑されてきた私にとって、その後、フェアバンクス作品特にゾロを見た時のショックは大きなものであった。そこにはケリーを凌駕する激しい動作の効率的な美しさがあった。大勢の相手を軽々と片付けていく剣さばきと階段や卓上にとび上がり、シャンデリアにぶら下って相手をかわしていく立体的な立廻り。荷車をシーソーにしてその反動で高所にとびつき、堀の上を走り、走りながら馬にとび移り、去っていくといった、広い空間を征服していく連続動作。この行動の活力が義人としてのヒーローの勝利をもたらし、結果的にはその勝利は国家的コンセンサスと同化する。ここにアメリカ映画の虚構の幸福な一元的世界がある。日本の義人伝のような国家と国民との不幸な二元的対立の構造ではない。

さて、この変装する、つまり戦略的活力のヒーローは、日本映画にどのような影響をもたらしたのだろうか。まず例によって、翻案作品と俳優たちのダグラス張りが出現する。もともと日本にも、新国劇の激しい立廻りが、すでにあったことは注意すべきだが、おそらくそれは、平面上の動作が主ではなかったか。ダグラスほどの立体的な動きを持っていたのだろうか。特に彼の動きの効率性には、及ばなかったのではないだろうか。ともあれ、田中三郎の「ドンQ」の批評（旬報大正14年11月1日号）はこう述べている。

「フェアバンクスの主役振りは益々円熟の感が深い。日本の乱闘物という奴で、剣を青眼に構え、窮屈そうに精一杯主役がしゃちこ張って、いきみかえる有様と異り、悠悠と剣を振りまわして、あの酒場を切り抜けて、逃げるあたりの呼吸は流石に比類がなく、日本乱闘物監督及び俳優諸君、宜しく参考にして可なりである」

かくて、フェアバンクス作品の翻案がはじまり、ダグラス張りが展開する。まず「奇傑ゾロ」の翻案が大正12年の「怪傑鷹」（マキノ、脚本・寿々喜多呂九平、監督・二川文太郎）で幕をあげ、翌年の「神出鬼没」（帝キネ、脚本・生野銀之助、監督・広瀬五郎）とつづき、昭和に入り3年に「飛龍の嵐」（東亜、原作・古谷善磁、脚本・日足重亮、監督・永井健、出演・隼秀人）、10年に「奇傑卅太郎」（大都、脚本・監督・岡田敬、主演・海

江田譲治）が作られた。

「怪傑鷹」は山本緑葉の批評（旬報大正13年1月21日号）でこう評価された。

「フェアバンクス氏の傑作『奇傑ゾロ』の向うを張った牧野独特の時代映画。もう只愉快に見られる点で成功している。絶えず新しい道を開かんとする牧野氏の意気は嬉しい。（略）撮影も移動や俯瞰は素晴らしい好い所がある。高木新平氏の鷹は可成りダグラス張りに活躍しているが、顔から来る感じが悪いのは損だ。妻三郎氏の黒木原はロバート・マッキム張りでとても愉快。三人の奸臣を持つ手段がありきたり、平凡で、好評にまかせて矢鱈に乱闘乱闘の感のあったのは好い事ではないと思う」。

この作品の内容は同誌の紹介によるとこうなる。「時は鎌倉時代の頃、時の執権北条高時の狂暴なる虐政と専政は言語に絶し、四民尽く高時の暴虐を呪い、横暴を憎み、かつ苦しむ時、猛然起って彼等の暴政に反抗し正義と勤皇の刃を閃かして良民の身辺を守護する鷹と呼ばれる怪傑は出現した」。

かくして、鷹は新田義貞の勤皇の挙兵の報に接して姿を消す。良民の正義と勤皇との重複は当時の国家的コンセンサスであったろう。しかしそこには日本映画独特の国家と国民との分裂が反映している。つまり鷹に恋をする娘は良民側の娘ではなく、鷹に殺された高時家臣の娘である。従って彼女は国家・国民の二重構造の犠牲者として、父のかたきを恋する。

「怪傑鷹」の翌年、高木は「ロビン・フッドの夢」（マキノ、脚本・監督・金森万象）に主演した。これは現代劇で「ロビン・フッド」のパロディで、高木が夢でフッドに扮して大活躍というもの。旬報の山本緑葉評（10月11日号）は高木を評して、「ロビン・フッドになってからも充分ダグラスそっちのけの放れ業でファンを喜ばせている」とした。高木は又、昭和4年の「隼六剣士」（マキノ、脚本・寿々喜多、監督・金森）に出演しているが、これは戦国時代の平家の末裔の若者たちが隼六剣士として立ち、姫を救うというもの。旬報2月1日号の山本緑葉評は「前編におけるロビン・フッドまがいの場面も大方は監督とカメラによって助けられている」とした。

高木新平のダグラス張りについては、大井広介の「チャンバラ芸術史」（1959）が次のように述べている。

「寿々喜多呂九平によって、いま一人、マキノ映画のヒーローになったのが、鳥人高木新平である。高木はマキノ・プロにはいった高見嘉平改め柳妻麗三郎という曲芸師に、軽業の手ほどきを受け、小兵で身軽、『奇傑ゾロ』やリチャード・タルマッジ風の跳躍を得意とした。出世作は呂九平、二川による足利初期を世界にした『怪

傑鷹』で、阪妻はじめ門田登鬼蔵ことのちの月形はいずれも鷹に倒される悪玉をやっていた」

そしてフェアバンクスの支配人が来日した折に、高木が学んだことを次のように伝えている。

「フェアバンクスの支配人がやってきたことがあり、飛んだりはねたりすること自体よりも、飛ぶ前のフォームがみるからにさわやかなのが要諦だときかされ、そう心がけてやったという。なるほど日活が隼秀人という身軽さにかけてはひけをとらぬ冒険俳優を使ったが、そういう点で見劣りしたと肯けた。阪妻主演の『侍甚七捕物帖』の怪人や『ロビン・フッドの夢』その他があり、マキノ・キネマ最後の現代活劇『争闘』（略）で高木はトリックを使わず、ビルからビルへとんで、大評判になった」（82頁）

そして阪妻の去ったマキノで、高木は「毒刃」「何者」等の怪人の役で大活躍を示した。実際に高木がどれほどフェアバンクスに迫ったかは、「争闘」しか見ていない私には判断できない。しかし、この作品の素朴なビルのとびこえに、高木の以上のような心意気は充分に認めることはできる。少なくともそれは、歌舞伎や新国劇が追求してきた立廻りを、とびこえようとした映画のアクションの、象徴のように見える。

ついでダグラスに挑戦したのが市川荒太郎で、大正13年4月の「黒法師」（松竹、脚本・大塚稔、監督・ヘンリー・小谷）に出演した。旬報4月21日号の山本緑葉評は、「『ロビン・フッド』をそっくり其儘脚色して要領の悪いものになってしまった」「此種映画の山場たる立廻りなども洗練されていず、一般に潑刺たる気分に乏しい事も惜しい」とし、荒太郎もデビュー作品で馴れぬためか印象に残らないと、落第点をつけた。「ロビン・フッド」の翻案作品は、これを「隼六剣士」のほかに、大正13年の「猛闘の彼方」（帝キネ、脚本・監督・長尾史録、主演・片岡仁弘）がある。旬報9月1日号の山本緑葉評は、「整った映画である。脚色も良い。監督手法も良い。そして興行価値もある。譚りは或いは『ロビン・フッド』の翻案かも知れない。けれど『ロビン・フッド』の良い要素のみ骨子として脚色されているこの譚りは良くまとまった興味ある譚りを構成している。翻案でもいい。彼の『黒法師』の如き愚劣さえしなければ良い」として、観客の興味をそそる手法やカット・バックをほめ、「何時も感じの悪い片岡仁弘氏も今度は相当見られる」と推奨している。

これは海賊に城を落された城主の息子が姿を消し、最後に部下と共に復讐をとげる話。ここでも主人公の妹は敵の妻であり、主人公が夫を倒すことで、彼女も最後に死んでしまう。主人公はかくして義理・人情のジレンマに陥ることになる。この日本的ジレンマは何度も繰り返

えすようだが、強すぎる権力構造がもたらした、国家と国民、社会と個人の徹底的な断絶の反映であり、とくに、この期の時代劇の特徴をなすものである。

この期の乱闘劇のヒーロー、帝キネの市川百々之助も和製ダグラスを自称した。「殺陣」（1974）の永田哲朗によると、旧劇の立廻りを破壊した功労者は、勝見庸太郎と市川百々助である。勝見が和製エディ・ポロであったことは、連続映画の影響のところで述べておいた。時代劇の写実的で活力ある立廻りの開拓に、外国のアクション・スターへの同化が、このように蓄積され、利用されていたのである。永田は大正12年後期にデビューした百々之助の乱闘劇のヒーローぶりを伝えているが、代表作の大正15年の「剣難」をこう述べている。

「両親と恋人を奪われた主人公が、御前試合で仇敵を倒し、復讐を遂げるが、主君から乱心者とみなされて、雲霞のような捕手に囲まれ、斬りまくったあげくに自刃する。このときは全11巻のうち半分が乱闘場面で、実に三昼夜も乱闘をつづけるという記録を作った」（52頁）

この物語りには日本的ジレンマの構造がむきだしにされている。両親や恋人のために、正義を守る主人公の社会的行動が、権力に報復されるというマキノ時代劇的な、反抗の劇的構造が示されているからである。しかし社会的正義の活力という点ではこの三昼夜の乱闘にダグラスの活力を見出すことができよう。

百々之助はまず大正13年末の「神出鬼没」でゾロを演じた。翌年の旬報1月21日号の山本緑葉評は、脚本と監督が平凡すぎて単なる乱闘劇となってしまったと批判したが、「百々之助の二役は和製ダグラスと自称する丈中々元気である」としている。

稲垣浩は「日本映画作品大鑑」の補稿（未刊）で、「百々之助演ずる柔弱な若殿が覆面の怪人となって悪人共に正義の刃をふるうスーパーマン的な仕組は好評だった」と述べている。この作品では悪人は奸臣で、主人公は城主の息子という設定。悪人を城主にせず、奸臣にするという設定は「飛龍の嵐」にも見られる。これは検閲という国家権力のしめつけの産物だろうか。伊藤の「斬人斬馬剣」の悪家老の設定と同じである。大正15年の「鈍急之進」（松竹、原作・龍神施魔丸、脚本・監督・大久保忠素、主演・森野五郎）は「ドンQ」の翻案作品だが、ここでは主人公の、蘭方医の曾呂道愚が急雨という怪人になって佐幕党の悪侍をこらす内容になっている。

ついで百々之助は、大正14年1月の「疾風迅雷」（脚本・長屋春翠、監督・長尾史録）で、ダルタニアンに挑戦。旬報1月21日号の山本緑葉評は、脚本と監督をほめ、「大物の『三銃士』の興味中心点を小規模ながら破綻なく見せている事は巧みである」「追いかけあり乱闘あり、しかして映画として面白し」として、「百々之助

の康景は美しすぎるが相変らず活気溢る演技を思う儘見せている」と述べている。この期の百々之助はかなり意欲的で、大正15年にジェイムズ・クルーズの「儒夫奮起せば」の翻案作品「俠客」でも活気を示し、「映画時代」昭和2年3月号の石川俊爾評は「百々之助近来の快作」とほめている。クルーズ作品の影響は後述するが、この作品は軟弱な武士が俠客の親分の教育で勇者となるもの。

「殺陣」は百々之助を美剣士スター第一号として、新派悲劇に向きがちだった女性ファンを剣戟映画にひきつけた功績を指摘している（52頁）。事実、「神出鬼没」批評には「百々之助が目醒しい活躍をする乱闘劇であるから、活劇を好む人達にも女の御客様にも喜ばれるとりになる映画」とある。百々之助は結局は濫作によりスターの座を失うことになるが、彼の台頭初期に和製ダグラスを自称しながら、ミケープと剣、劇、つまりヨーロッパ・チャンバラ劇の継承者フェアバンクスを乱闘劇ヒーローの糧とした点に注意したい。

なお「三銃士」の翻案には、百々之助作品以外に、昭和5年の「諸謔三浪士」（脚本・監督・稲垣浩、主演・片岡千恵蔵）がある。三浪人が浅草の六法阿弥陀組という悪漢団に正義の刃をふるうというもので、旬報10月11日号の北川冬彦評は「ダグラスの『三銃士』あたりから考えついてでっち上げたらしいところのもの。ギャグをしきりに使って、観客の爆笑をたくみに誘引してはいるが、そのギャグたるや古くさくて決して新鮮なものではない」と手きびしい。又、昭和3年のマキノの「浪人街」（第1話、脚本・山上伊太郎、監督・マキノ正博）には「三銃士」との類似を指摘する批評があった。旬報11月11日で村上久雄はこう述べている。

「このストーリーは輩出する剣劇映画――変な意味における乱闘それのみの剣戟映画――中にあるは充分に異色ある物、4人の性格描写、異なれる浪人の心境、生活を描写して、その相互の交渉を描く所、而も浪人の生活であり乍ら、その何人の存在意識にも時代劇通弊のニヒリズムがなく――尤も唯一人土居将左衛門にはやや虚無的な陰影があるが――寧ろ諦観しきった或る明るさのあるのが甚だ嬉しかった。4人の浪士の内では根岸東一郎扮する赤牛弥五衛門のモボ的存在と谷崎十郎のドン・ファンの存在とが、特異なる物として興味を引く。だが、この映画全般を覆い包む明るさ、軽さ、快さは将に監督マキノ正博の手腕であり、此处をこそ私は十二分に買い、激賞したいのである。

その出だしの愉快なるスピード、私はフレッド・ニプロの作『三銃士』中での三銃士出現の快さを、この劈頭の数場面に見た。この種の感懷を日本映画に、特に時代劇に感じる事は珍らしい」

以上の指摘には、フェアバンクス作品を頂点とするア

メリカの喜活劇の影響が、日本映画の明るさや活力として定着したことを物語っている。大井広介の「チャンバラ芸術史」（1959）はこの作品の立廻りにはみるべきものがなかったとしているが、例外として冒頭の主人公どうしが抜き合わせ、構えながら、居酒屋から足場のいい地点に動く演出を評価している（173頁）。村上が「三銃士」と比較したのもこのあたりだろう。「ロビン・フッドの夢」や「隼六剣士」を監督したマキノの金森万象について、大井は彼がジョージ・B・サイツ監督に傾倒していたことを伝えている（17頁）。サイツ作品には連続映画「スピード・ハッチ」（主演・チャールズ・ハッチスン）等があり、これも喜活劇だった。このほかの影響として、昭和5年の「天保水滸伝」（マキノ、監督・関口光昭、主演・谷崎十郎）のなかで、繁蔵一味が水中を潜って、敵地に潜入するところに「ダグラスの海賊」の影響の指摘（旬報2月1日号・山本緑葉評）があり、又、昭和5年の「維新鉄仮面」（東亜、脚本・村田圭三、監督・仁科熊彦）は、「鉄仮面」の影響が考えられる。

以上がダグラス張りと翻案の指摘だが、ここでフェアバンクス及びその作品の影響の意味を要約してみよう。まず作品に関しては、特に「三銃士」はミケープと剣、劇の始祖であり、他の作品はすべてこのモデルに準じたものと考えられる。フェアバンクス作品は西欧メロドラマの伝統を集約しており、その成果を日本映画が吸収した。この吸収にはそれだけの準備があった。つまり、日本の大衆文学も又この種の西欧文学を翻案し、吸収していたからである。例えば新聞連載の時代小説と時代劇との結びつきの流行のはしりとなった前田曙山の「燃ゆる渦巻」（1923～24）が、「三銃士」から構想を得たことは一目瞭然である。大衆小説のこの種の翻案の脈脈は深くそして大きい。更に当時アメリカでは、フェアバンクスの「三銃士」の成功で、3年間ほどの時代劇ブームがあったことを「欧米映画史」上巻が伝えている（68頁）。

例えば大正14年日本公開の「スカラムーシュ」Scaramouche. 1923. などがそうだが、これら作品もミケープと剣、劇の系統で、題材としても日本になじみ深いものであった。この作品では旅まわりの役者となった主人公が親友の仇である貴族たちを決闘で次々に倒していく復讐譚だが、これは三上於菟吉の「雪之丞変化」（1934～35）の人物設定に影響を与えていると思われる。三上は又、大正末の「敵打日月双紙」でマッカレーの「双生児の復讐」を翻案している。以上のように、フェアバンクス作品はまずその題材において日本となじみの深いものであった。ついで、フェアバンクスの性格つまり活力とか独立独歩とかが当時日本に影響を与えていたアメリカ映画の登場人物の性格を代表するものであった

点に注意したい。それゆえに「浪人街」にも、アメリカニズムが波及していたのである。又、現代劇でも、ヘインズやロイドの同様な性格を追いながら、学生スポーツ映画などをアメリカ映画から移植していた。その種の作品に松竹の牛原虚彦と鈴木伝明のコンビのミ彼、ものがあるが、昭和4年の「彼と人生」は大正7年日本公開の「ドーグラスの奮闘」Facing the Music, 1916. に非常に似ている。「ドーグラスの奮闘」は、上流階級の息子が老僕をつれて貧民街に住み、バーの用心棒になって悪漢を退治し、ロマンスも成就するというもので、「彼と人生」でも、上流階級の息子が老僕をつれて貧民街に住み、レストランのボーイや芥菜めの仕事をしたりする。家を出て途方にくれる老僕に、主人公は「僕だって男一匹だ、いざとなりゃ働いてお前一人位養ってやるよ」と力づける。ともあれ、金持のドラ息子にも活気と独立独歩の精神が波及している。

最後に、時代劇への影響の決定的なものとして、フェアバンクスの立廻りがあり、それがダグラス振りの俳優をもたらした。時代劇の主流は、この期に、乱闘劇や剣戟ものであったが、その活力は彼に負うところ大だったと思われる。日本ではアメリカ映画の活力を、現代劇でなく時代劇で、吸収・発露しなければならない事情があった。これを飯島正の「シネマのABC」（1928）が端的に説明している。

「剣戟愛好は日本映画界の主流であると云っている位である。剣戟映画の興行価値は現代映画の約五倍であるとさえ聞いている」「現代の目まぐるしいテムポ、それが時代物のキイノオトである。というとな変なものであるが、現在、現代物の日本映画に、果して、電車、自動車、汽車の速力の爆発性、人と人との接触、犯罪の見事さ、革命的気魄、そういうものがあるだろうか。否、時代物映画、狭くいえば剣戟映画、は実にこの慾求を満すものである」（39頁）

ここでは、現代劇のアクション映画の代用としての、時代劇の性格がとらえられているが、事実、第二次大戦後の日本の近代性の成熟につれて、現代劇の増加と反比例して時代劇は減少していく。それとやはり、現代劇がミ犯罪の見事さ、革命的気魄、を自由にえがけなかった当時の事情、検閲の存在も考慮に入れておくべきだろう。ともあれ活力はダグラス振りをこえて、当時の時代劇にみちみちていた。「日本映画お好み番付」（旬報、昭和42年1月1日号）によると、昭和2年から19年までに「高田馬場」は21本も作られている。ここでは中山安兵衛が、例の高田馬場までのマラソンをやったのけ、その直後、相手をきりまくるという、超人的活力を発揮するのである。それはまさにミ疲れ知らずのエネルギー、の日本版であった。

最後に当時の時代劇における変装つまり覆面の流行について考えてみよう。大正3年頃、新派映画では変装する登場人物たちの活劇が、旧劇映画では幽霊などの変化ものが流行した。やがてこの新派の変装活劇は大正12年に登場してきたマキノの寿々喜多呂九平の時代劇の骨子となる。7月の「浮世絵師・紫頭巾」は紫頭巾の怪人の活躍とその変装ぶり（せむしの浮世絵師）を示し、同年12月の「怪傑鷹」では「奇傑ゾロ」を翻案している。覆面は変装による身元不明の怪人の象徴となり、社会的かくれみの機能をはたす。こうして覆面時代劇が流行し、その結果、大正14年のマキノの勝見正義監督の「目明し佐吉の死」では、「興行価値を考慮して挿入した覆面は全体が真面目であるだけに却って目障り」（旬報1月11日号）ということになる。

そして日本映画は国民的な覆面ヒーローをつくりだす。大仏次郎の小説のミ鞍馬天狗、は大正13年から発表され、その映画化が翌年の松之助主演の「鞍馬天狗」（高橋康寿）から始まり、百々之助主演の映画もあり、特に嵐寛寿郎のシリーズは昭和2年から31年までに40本、そのうち敗戦前に23本を数えた。天狗の宗十郎頭巾は、ゾロのドミノ面のように、幕府体制に対する倉田典膳の（革命的）行動を援護するミかくれみのミとなった。ところで、演技としての変装とは別に現実に弱者が強者に成長する、あるいは転生するという作品群がアメリカと日本の映画にあった。一例としてはロイド喜劇がそうだが、前出のキネマ旬報の人気俳優の第2位、パーセルメスの作品がその代表であった。

2. リチャード・パーセルメス　ダビデ型ヒーロー
ヘンリー・キング監督の出世作「乗合馬車」 Tol’able David. 1921. は大正12年に日本公開され、多くの模倣作をもたらした。当時の帝国館のニュース第70号によると、題名には「孝子殉職／血涙大活劇」の角書がある。平和な町はずれの一家の長男が乗合馬車の馭者兼通送夫をしている。パーセルメス扮するところの次男坊はミ勘忍袋のデイヴィッド、と呼ばれるおとなしい少年で、幼なじみの娘にからかわれたりするが、彼は巨人ゴリアテを倒した英雄ダビデにあこがれている。tol’able はミ勘忍袋のミと当時訳されたようだが、この忍耐には皆にいいめられる人のそれに近いものがあるとサドウルの「映画作品事典」（1965）は述べている。川岸でデイヴィッドと娘が話しあうところで、娘が彼をサドウルの意味でからかう字幕があったと私も記憶している。この平和な町に3人の大男の悪漢が入りこんで、乱暴の限りをつくし、襲われた兄は不具になる。デイヴィッドは兄のかわりに念願の馭者となり、一家のために働く。ある日、彼は大事な郵便袋を馬車から落してしまう。娘は袋をとどけようとして悪漢に奪われ乱暴されかかるが、遂にデイ

ヴィッドは立上がり、死闘の末にゴリアテを倒し、町に郵便袋を持かえり、職務を全うする。

ジェイカブスは「アメリカ映画の興隆」(372～3頁)で、この作品が、自然主義でアメリカ南部の小さな町スモール・タウンの生活を描いた、小さな町ものの傑作であり、後の語りぐさになるほどの大当たりをした、と伝えている。物語りは単純でメロドラマ的でなく、主人公は類型的でなく新鮮であると評価し、キングの技術のたしかさの証拠として、プドフキンが「映画技術」でこの作品の一部を模範例としたことをあげている。私も、特に前半のデイヴィッドの日常生活を描いたリアリズムに感銘を受けた。最後の死闘の部分は、今日目でみてもかなりの迫力がある。「欧米映画史」の上巻で、南部圭之助は、「ついに恋人まで乱暴される瞬間に、彼はさんざんにたたかれながら、この悪い兄弟に打勝つ。アーネスト・タレンスという1メートル90ぐらいの残忍な新しい型の悪役がデビューして、バーセルメスをたたく所は、数少ないその頃の女性客が悲鳴をあげて顔をおおうほどであった」(64頁)としている。まさにヘヴィ級とライト級位との格闘で、170センチのバーセルメスは、大男のトランス E. Torrence にひょいと持ちあげられてしまうという感じだが、この悲愴な一方的勝負が最後に逆転する呼吸がみごとであった。

この劇的構造は古典的な西部劇のパターンと同じである。恋人や肉親が代表している社会(小さな町)の平和のために、それを脅かす強力な悪漢を倒す。ただ違うのは、主人公が自由を象徴する流れ者でなく、成人期を迎えた若ものであることである。ここにこの作品、そしてキングの小さな町ものの特徴がある。ジェイカブスは、同じバーセルメス主演の「激怒」Fury. 1923. (大正13年日本公開)もこの系列の作品としている。前出書の南部は、この作品を海洋劇というアクション・メロドラマの優秀作品の一つに数えている(54頁)。バーセルメスは船長の息子に扮し、再びいじめられ役を演じる。敵役は彼の母を倫落させた一等航海士で、今や恋仇でもある。こうして彼は航海士と対決するが最初はやっつけられ、二度目は激浪上の船で対決し、ついに相手を海に投げこむ。このように「激怒」も前作と全く同じ劇的構造を示している。主人公は両作品とも成人期を迎えた若ものである。前作で彼は一日も早く馭者になりたいと思い、

成人への通過儀礼としての悪漢との死闘を経て、一人前の馭者となる。「激怒」でも、彼は悪漢を倒して一人前の社会人、船員となる。これらのドラマは、未成年者の自由が社会的秩序に参加して成人に達するというイニシエーションのドラマであり、流れ者の自由が社会的に秩序参加するという古典的な西部劇の構造と非常に共通している。このイニシエーションの性格は、学生スポーツ映画の章で述べておいたが、学生スポーツ映画との共通としては、主人公が最後に逆転の勝利を収める点がある。ただし、バーセルメス作品ではリアリズムがよりすぐれており、勝負がずっと悲愴であることが認められよう。

このようにバーセルメス作品は、羊飼いが、ゴリアテを倒す英雄ダビデ王に転生する英雄譚を、アメリカのデモクラシーの原点としての小さな町の世界に写實的に展開した。そして、バーセルメス作品について、この種の英雄譚の映画が日本公開された。大正13年の「男子怒れば」Broken Chains. 1922. (監督・アラン・ホルバー A. Hollubar) は、臆病な金持の息子が南西部に出かけ、妻を虐待する農夫から彼女を救おうとして叩きのめされるが最後に相手を倒すというもの。同年旬報5月21日号の田村幸彦評は「これ程巧みに観客心理を掴み、全篇を通じて緊張した効果を挙げ得た映画は、そうザラに有るものではない。実際あのクライマックスの物凄い戦慄味には、誰でも捲き込まれて手に汗を握るであろう」と賞讃している。しかし、この種の感激も大正15年の「男子起たば」When a Man's a Man. 1924. (監督・エドワード・クライン E. Kleine) あたりになると、だいぶ、さめてくる。旬報同年8月1日号の清水千代太の批評は、「金持ののらくら息子が西部に行って男らしい男になる——という余り珍らしくもない、面白くもない物語」を述べている。この批評から、この種の物語の映画がいかに多かったかがわかる。これら作品も学生スポーツ映画とよく似ている。青年が西部で男をみがく、つまりアメリカの原点としての小さな町で社会人への通過儀式を経験するのである。都会人が西部で社会教育を受けることに對し、学生スポーツ映画例えばロイドやキートンの作品では田舎者が都会的な大学で教育を受けるという対照を示している。新時代への対応と伝統の遵守が、そこに交叉しているのである。

(つづく)

編集 東京国立近代美術館
フィルムセンター
東京都中央区京橋3-11
(561) 0823-4

表紙 原 弘
表紙写真 「野菊の如き君なりき」
「二十四の瞳」

1977年2月1日発行

発行者 安達健二

発行所 東京国立近代美術館
東京都千代田区北の丸公園3

印刷所 大塚巧藝社